



增補
道中膝栗毛

東京文事堂發兌

089561-000-4

特10-761

道中膝栗毛 (增補訂正)

十返舎 一九 / 著

M19

DBM-1485





特10
761

明治

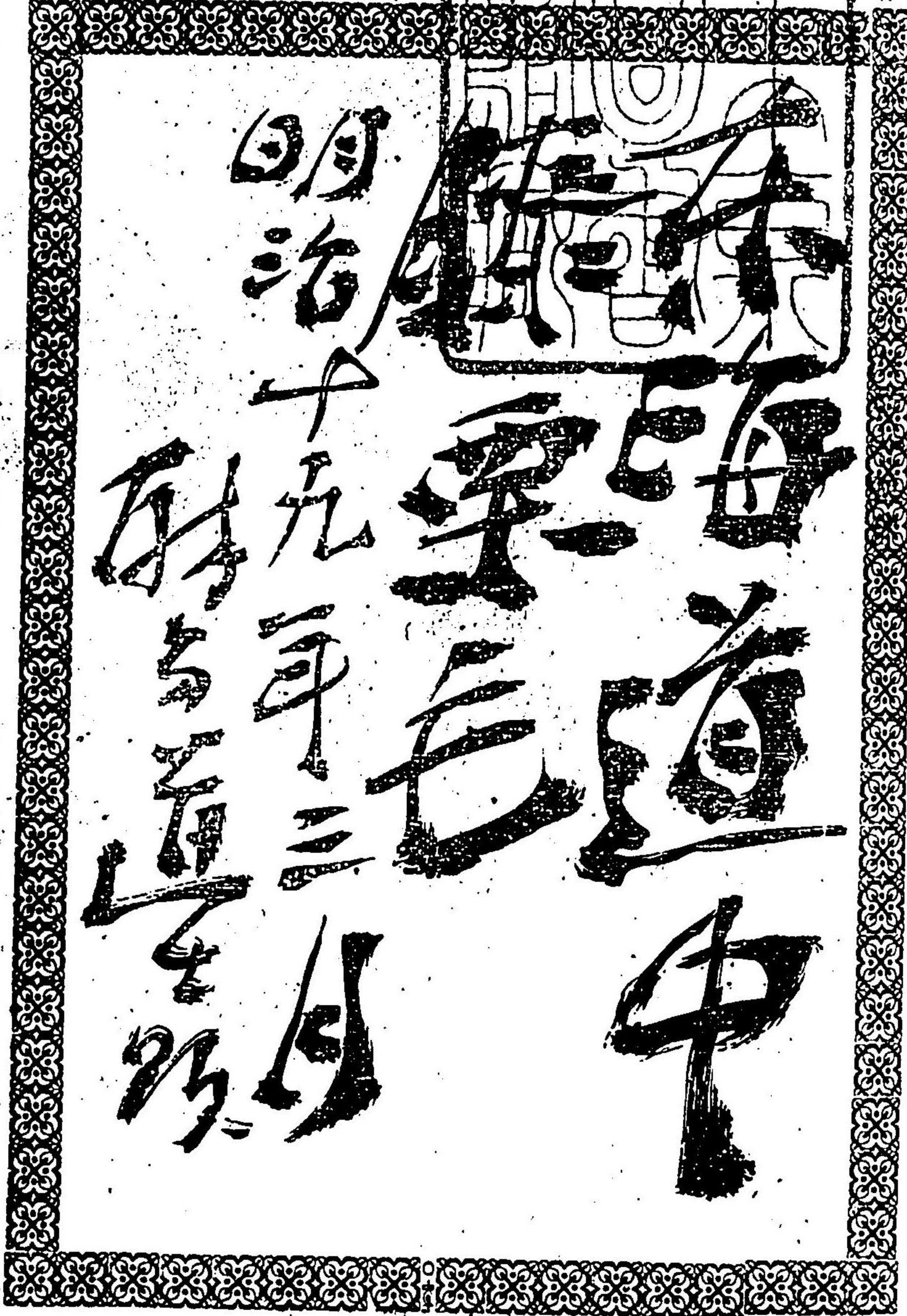


海
道
中

中

明治十九年三月

村吉道
全



補家評道中藤栗毛序



藤栗毛、趣白深長、遠西、濶評、本為
 於東、山脊、是、山、皆僻地、石海、避
 陸、苟有、道、化、祝、柑、者、購、求、以、為、佩、象
 賞、上、料、可、謂、中、古、以、來、滑、移、古、玉
 之本、家、多、余、白、三、本、皆、頃、水、讀、之、
 晝、夜、不、闕、大、語、日、羽、激、性、遂、受、於、之、出

根性甚多ハニ自惚又ハ其の所
珍男多頃夫昔肆潛ハ齒翻刻本
編ハ欲シ信シ〇式ヲ請フ笑評ヲ入
蓋シ余之於白痴ハ汝ニ喜ム出神
隨テ不讓一步ハ也至ニ不預
鏡者乎嗚呼名也聞山甘殺之
余不才遭此撰卷ハ筆及往考

前丹恐衆聖婦之振歎將生一
取ハ者歟一念至十茲不安心
罪深遂古出放踊於欄外以表其
心異因此可徳評判更自高灵鷲
山承願深於流河川叩木良
云ハ明治十五年十月朔首於芳原
烈亭之生海會一醉多道士



彌次贊
 原來閉漢
 徒臉容申
 戲方本分
 著色且隨
 何皆不當
 五返舍半九題



彌次贊

北八贊
 起頭是申
 童矮陋主
 兒微生理
 李郎駕狼
 漢信步飛
 愚舍一得題



増補 道中膝栗毛序

管根八里の長持唄にハ。猛き宰領の心を和らけ。竹に雀の
馬士唄にハ。鬼殺しを爛せしむ。是るの歌の徳利酒呑や諸
の旅衣都をさして行かけの駄賃帳を繰返し筆の建場に
雲駕の息杖をして。あいやらやつと書編たる東海道五十
三次の記行に。無滑稽と方言の二割増重荷に。僻言夷曲歌
ろれが中よも唯一夜。鮓のめと盛押かけて。商なふ戀の管

枕ろの有増を宿帳の帖となしたるハ。空尻の殻無體なる。
ほんの咄との問屋場もどき。ハイ頼みます。このみますと
此本の鹿島立に序するところかり。

維時亨和二載壬戌孟陽吉旦

十返舎一九

○彌二墓誌銘

彌二字、愚傳三世祖彌六、爲紙屑買會伯祖彌一、爲屋敷折助、與北
內、爲山、內、此、俱、得、罰、酒、爲中風而死、親爺彌八、以買女郎、棄番町、辻
番、爲山谷、船頭、其、後、以、口、說、內、藝、者、失、船、頭、內、藝、者、住、替、柳、橋、乃、託
入、復、爲、船、頭、號、爲、酒、啞、突、所、與、游、皆、其、近、邊、我、利、々、妄、者、彌、二、少
俠、常、垂、一、本、鼻、涕、嘴、親、爺、之、髓、事、買、食、一、町、內、子、供、赫、然、爲、餓、鬼、大
將、衆、謂、彌、八、有、惡、餓、鬼、矣、其、後、以、吹、笛、叩、太、鼓、舞、踏、所、備、三、河、島、授、
馬、鹿、囉、囉、方、錢、離、潔、好、爲、馳、走、卒、令、仲、間、屈、名、聲、大、振、一、時、皆、慕、與、
之、爲、兄、弟、分、葛、西、兄、龜、井、戶、親、方、等、聞、之、賴、人、吳、錢、爭、欲、令、入、我、仲
間、揃、口、吹、唱、兄、々、焉、寬、政、七、年、由、親、爺、之、薦、至、葛、西、授、突、出、面、役、春
三、月、德、川、將、軍、獵、於、下、總、小、金、原、葛、西、當、傳、馬、彌、二、輩、被、課、彌、二、謂、
已、篋、棒、江、戶、子、唯、何、爲、雲、助、真、似、鈍、吉、拔、作、女、代、出、助、鄉、二、人、不、悅、
爲、喧、嘩、一、村、相、談、終、逐、出、彌、二、不、能、歸、三、河、島、斷、然、翻、心、爲、狂、歌、師

鑿手斧、納言墨金、權助居閑、刻苦學在、歌又習、都々逸、嘗與、藝婢、有、
私、偕、奔、住、於、本、所、吉、田、町、無、產、不、能、食、飯、獎、藝、婢、爲、夜、鷹、藝、婢、呆、返、
即、日、歸、在、所、相、摸、八、年、有、富、於、湯、島、天、神、彌、二、嘗、得、金、百、兩、氣、傲、
然、日、夜、猪、口、不、離、口、女、郎、不、去、側、旬、餘、將、腎、虛、自、歎、曰、君、子、樂、清、貧、
遂、天、命、我、爲、有、金、振、棒、命、不、若、別、與、友、立、貧、野、郎、爲、本、之、木、阿、彌、
即、日、往、貧、乏、人、巢、穴、下、谷、山、崎、町、神、田、橋、本、町、芝、新、網、町、等、五、日、而
悉、無、茶、之、喝、呼、彌、二、雖、白、痴、漢、不、求、不、義、富、貴、猛、省、賑、恤、友、達、今、夫、
賴、傳、信、爲、餘、儲、錢、則、高、亭、大、榭、五、采、之、池、塘、竹、樹、珠、玉、之、出、有、馬、車、
入、有、妻、妾、而、與、同、役、平、居、相、慕、酒、肉、相、與、撲、散、量、簡、相、示、貼、印、紙、誓、
一、生、附、合、不、相、背、眞、若、無、間、違、一、旦、其、人、戴、免、之、字、向、他、若、不、相、
人、上、內、實、祝、而、悅、者、皆、是、也、此、宜、冠、人、間、皮、所、我、慢、不、出、來、而、其、人、自
視、以、爲、得、計、聞、此、彌、二、之、風、雖、餘、程、鉄、皮、癩、骨、亦、可、以、少、愧、矣、彌、二
其、後、以、無、一、文、依、神、田、御、伯、母、姐、持、家、八、町、堀、叩、寄、席、太、鼓、糊、口、有、

人自遠方來。曰北八乃以舊相識。置食客。居數月。以彼妊婦之故。夜俱走。取路於東海道。出掛京大坂。及大和。廻實享。和二年二月十二日也。其紀行詳于膝栗毛。就見。二人之去。悠悠々々。而謂身代不殘。包風呂敷。彌二永持金。究不極。雖有奇々的事。必不能其妙々的。骨折。以致必傳於後世。如膝栗毛。變法。爲上也。天保八年。天下大飢。彌二在大坂會大鹽平八作亂。以爲此義舉。乃向鉢卷。抱天秤棒。入其仲間。以三月二十六日戰死。于天滿橋畔。時年六十八。後人曰。無掛搦而出。喧嘩場。彌二馬蓋。始于此。北八肩遺骨。東歸。葬鼻下谷。隨德寺。彌二一家親類。已亡。並無子。其得葬也。實雖係北八。算段又多。出假名垣。爲文翁。々々。勇於爲人。立約束。與彌二爲友。達彌二亦爲之。盡故。有西洋膝栗毛。種矣。竟賴其力。予固非彌二親類。而嘉爲其人。因不受賴。此作墓誌曰。

嗚呼彌二。以自惚與梅氣。雖固一身。自隱樂男。猶爲天下刮臍之。

本店。豈可與彼落語馬鹿詞家。同時而話哉。吾聞。逐轉其魂。尙稱。棒篋。江戸兒。且驅突痴理。鈍云。留精魂於天地間。將俟其同氣相求。道樂野郎。而援之。古之所謂死而不亡者。其彌二之謂耶。噫。微斯滑稽人。吾誰與歸。

花柳御門

醉多道士撰文

○累解

或人問ふ。彌次郎兵衛。喜多八の。原何者ぞや。答へて曰く何でもなし。彌次唯の親仁なり。喜多八これも駿州江尻の産。尻喰ひ観音の地尻にて。生れたる因縁よりてか旅役者。花水多羅四郎が弟子として。申童となる。されど尻癖わるく。其所に尻すはらせ尻の仕廻ひの尻に帆をかけて。彌次も隨がひ出奔し。俱に痴氣を盡す而已。此發端の兩士が東都神田の八丁堀に店借し居たりし中。のどを著し終に旅行の發起とぞる所以の馬鹿らしきとを作者が寐酒の飲料と餘計の著述をなすものならし。

○凡例

○驛々風土に隨つて音律は清濁の差別あり。俚言方語の通稱に異なることあり。笑ふべきに非ず。古代の言詞の却て田舎に残れりと徂徠翁の謂あり。たとへば駿遠兩國にて行といふを。行ずといふの行んぞるなり。酒を呑む飯を食むといふ。皆呑んを喰ひんするなりと。物類稱呼を見えたり。

○恐しむといふ事を。相州にては。れつゝなりといひ。駿州にては。ききといひ。遠州に

てこのいといふ。同國にて。九ツナけ、ねつといひ。心なしといふを。けされしといふ事。古今集に「かいが手をさやよも見しかけ、れなく。よみをりなせるさやの中山とあり

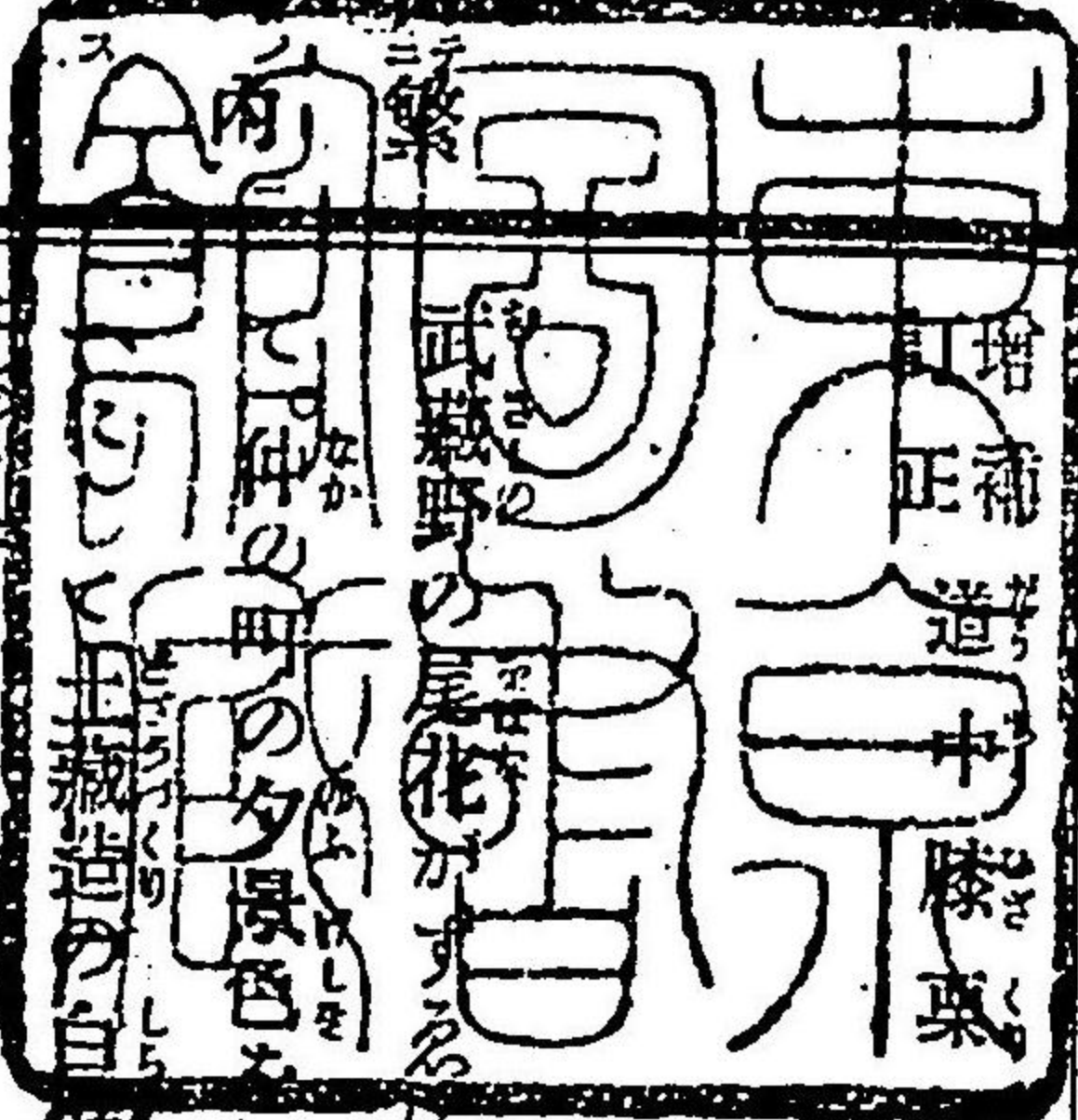
○おぞいといふに。尾張にて。物の悪敷事をいふ。駿河邊にては物事賢。事といふ和字正澄に。からすてふ大おそぞりの歌を。おほぞぞりと濁音によませせておし鳥の事とい入り。おそといふ。是なり。いハ助字なり

○相豆駿遠にてますいといふ。味からその下字をとりて。ますといふ。いハ助字なり
 ○都て道中管根より伊勢路まで馬をおまといひ。又いまといふ(日本記)に馬をいませよませり。仍て相通じてれませといふ

○なせといふを。あせといふ。万葉(あせとも今宵よしるさなぬとあり
 ○うらといふは我等の轉語おれらをうらめてあらといひ。又轉じて。うらといふ
 ○驚くことを相豆にて。たまびるといひ駿遠に。おびるといふ。たまびる。「源氏」「魂消と有り」○なでうといふ言詞(紫日記)になてう女のまなふみとあり

○愚なる者を駿遠よて。ひやうたくなを云○にして云ふり主なり。にとぬと通へば也
 ○相豆に。とつともなるといふ言詞ハ「性理大全」に塗轍と有なるべし。駿州にハとひやら
 もないといひ。遠州にハ。しやうくもないといふ
 ○どはることを。かうまるといふは。禪家に久しく座する事を行座といふ行の字ハ久しき
 義あり仍てかうまるといふ。まるハ居の心にて。ぬまるかしこまるの。まる也
 ○此等の外擧るに暇あらず。只此巻中にあらはしたる言詞のみを爰に解く仍て排設の趣
 ハ○俚俗の訛言方語のまゝと記して。其おかしみを純にす
 ○逆旅木賃泊の惨慄なる体。六部順禮。ぬけ参の愚者。雲駕馬士。護摩の灰等の始末もらさ
 ず載て下情を知らしむ

十返舎一九職



増補 道中膝栗毛 七巻 端

酒のもと麴町 十返舎一九著
 此よお神田 醉多道士笑評

○由繁
 華二井
 蛙生
 ○自ハ納
 食之目
 可レ思フ鳥
 賊様
 ○一九
 假ニ其生
 國一起レ筆

かゝる白雲と詠しは。むかしく浦の苦屋。鳴たつ澤の夕暮に愛
 武蔵野の尾花がする。しらざる時の去となりし。今は井の内ハ鮎を汲む。水道の水。長な
 仲の町の夕景色。しらざる時の去となりし。今は井の内ハ鮎を汲む。水道の水。長な
 して土蔵造の白壁建續き香の物桶明俵破れ傘の置所まで。地主唯ハ通さぬ大江戸の
 繁昌他國の目よりは。大道に金銀も持ちらし。あるやうにねもはれ。何でも一稼ぎと心ぞ
 して出かけ來るもの幾千萬の數限りも。なき其中に。生國は駿州府中枋面屋彌次郎兵衛と
 いふもの。親の代より相應の商人にして。百貳百の小判には何時でも困らぬ程の身代あり
 しが安部川町の色酒に。はまり其上。旅役者華水多羅四郎が拘の鼻之助といへるに打。こ
 この道に孝行ものとして。黄金の釜を堀出せし心地して悦び戲氣の。ありたけを盡し果は身
 代まで途方もなき穴を堀り明て留度あく。尻の仕舞は若衆とふたり。尻に帆かけて。府中
 の町を欠落するとして

語ニ曰ク故

郷難レ忘

叙未レ脱

俗

○穴尻

字妙

○同病

相憐

○奈不

餘活計

何

○彌次

借金は富士の山ほどあるゆへに

そまで夜逃げを駿河ものかな

斯足久保の茶なるまを吐ちらし。頓て江戸にきたり。神田の八丁堀。新道の小借家住居し。すこしの貯へある任せ。江戸前の魚の美味。豊島屋の剣菱。明櫓はいくつとなく。長家の手水桶に配り。終は有金を吞み。是ではすまぬと。鼻之助に元服させ。喜多八と名乗せ。相應の商人かたへ奉公遣りしが元來さいはじけものにて主人の氣にいり忽ち小錢の立まはる身分とあり彌次郎は又國元にて習ひ覺へたりしわぶら繪などを。かきて其日ぐらしに春米の當座買。た、き納豆。あさりのむきみ。居ながら呼込で喰てしまへ。びた錢遣文も残らぬ身代。田舎より着つかけの。布子の袖。綿が出て洗溜の氣をつけ。る者もあく。これは餘りあるくらしと。近所の削り友達が打寄て。さるお屋敷にれす奉公勤めし女。年かさなる媒して。彌次郎兵衛に。あてがへ。破鍋に綴蓋が出来てより。狼の口あいたやうなふくろびも。ふさだてやり。諸事手健に人仕事などして。彌次郎を大事よかくる様子。此女房の奇特なる。心ざしに。彌次郎夜もはやく寐て。随分機嫌を。とりく

公千載

一遇

○下等

社會情

在二眼 中

○山神

之 靡力

可レ選

らしけるが。うかくとして。はや十年ばかりの星霜を經りけれども。薯蕷に成らず。相替らぬ貧報。されども屈託せぬ氣性にて。売晒落しやれちらし。近邊の。あまけもの共の遊び所ろと成りて。五合徳利の寝姿流しもとに絶へず。べこく三味線の音。不斷味噌桶の蓋を。あくる間とはなかりける。あるじ彌次郎兵衛は。るすとみへ女房あふつ。ながばらおちよま。ほそおひまへだれにて。たな。おちよま。モシおかみさんへ。御無心ながら。醬油が。すこしあらば。どうぞかして。おくんせへ。ホンニ。ゆふべり。大分。お賑やかで。ござりやした。わつちらが所の生酔ひどのを御覽じやれ。ただけへりやせんわな。此間だの晩夜更けて。路次の戸を。これるやうに。た、いたとつて大屋さんの。おかみさんが。あの口でこてへ。そうに小言をいひなすつたが。わつちらが所の野呂馬殿も。のろまなりやア。あのまたおかみさんも。あんまりじやアござりやせんかへ。ナント店賃の一年や二ね。溜つたとつて。一生やらすに。おちよましめえし。それをやかましくいふくら。溝板の腐つた所も。どうぞするがい。じやアねへかへ。そして犬の糞も。てんどの内の前ばり。後つて長家のものはなんだと思つて居るやら。ノウおくんさん。トひかふのうちの驥衆へ水をひけるとあがり

○猿之
影笑



口にかたわしおろして子供にち、をの
ませてゐる女房やがておりて出かけ
おくん モシエあんまり大きな聲をして。
そんなことをいひおさるな。奥のおけん
つうが。今手水にいつたよ。アノ おしやべ
りも又大屋さんのおかみさんへ。いつそ
追従ふばかりいつて。長家の事をどうめ
へつたからめつたとい、苦勞性じやア
ねへかへ。それに聞なせへ。此間からあそ
この内へ来て居た居候はアノかみさんの
妹女だといふまつたが。ナニあれがお屋
敷に奉公してゐたもすさまじむ。ちよつ
と見てもしれてありやす。ありやアあへ

○此山
神亦氣
強
○亭主
白之

徐へ。ばんくるわせものだよ。昨日もどこか下谷のおやしきへ。目見に行つてつくりた
つて出ていつたが。ナア。よその隠居はまへ。妻よいくので支度金が七兩来たとき。いや
じやアねへかへ。あの顔で妻も氣が強い。わつちらもこの額のはなつてうがなくて。耳の
際の痰瘡がもふちつと。ちいさいと妾にでも出て。支度金をとるがものを。ハ、ハ、ハ、お
かきさん。彌次さんはまだかへ。チャ、ハ、ハ、影がさすと。ソレ旦那がお歸りだ。ト
たりおのがうちへひつこ。彌次郎 エ、この畜生めは。願にかけておらがところの裏口に寝
てゐらア。おふつ茶はわいてあるか。ふつ。ヲヤおまへ酒計で。おまんまはまだかへ。彌次郎し
れてゐる事さ。居酒屋へはよつたが。居飯屋へは寄なんだ。おふつ。そして喜多八さんの所か
ら。なんで度々呼びにくるのだへ。彌次郎 おれに金をかしてくれろとつて。おふつ。ヲヤ馬
鹿らしむどうしたのだへ。彌次郎 あいつめが假宅へでもはまつたそふで親方の金をちつと
計りつかいなんだといふことだ。其尻がわれると。しくじるはあたりまへだが。こゝでし
くじつては理屈のわるい事があるといふ。何だをさいたら。あそこの番頭めが。此間痴氣
が天窓へさし込んで。それなりに天窓が。しやつきりとなつて死だといふことだ。それに親

○先、殺
一人

○彌次
之目尙

變三懸北
入

方は。年寄の癖に美しむ若いかまもをもつて。腎虚してもう。今日かあすかといふくら
 る。これも今にめでたくなるは必定。そふると喜多八めが其後事を請け合て。手に入る
 仕様があるといつたがあるほどそふいけつめは。おかまをおすはなしだが。そ
 めではおいらもわりの事は無し。どうぞまゝで。しくじらさねへやうよしてへものだがし
 なたがねへハナ時飯にしよう。何ぞ禁はねへか。おふつ。さつきのひきみ殺汁さ。彌次ナニ
 扱身が喰れるものか。しかしこいつも。さらすとすれば。さづけへなした。とこの内日も
 んどうをともし。彌次郎ちやづけをくひかゝる時侍イヤ卒爾ながら。駿河の府中から
 年のころ五十あまりの侍。たびしやうぞくにて。さつた彌次郎兵衛殿は。爰元でおどるかヤア。おふつ。ハイ。こつちらで。どざりませすが。どつ
 ざらお出なさいました侍イヤ。ハイ氣遣ひな者ではおさんないヤア。つれて。はいり。こ
 しをかくるをみて。彌次コレハ兵太左衛門さま。妹御を連れて。何んとして御出府で。を
 次郎さまをつぶし。兵太。あんとしたア曲がない。このいんもふとめを貴様の所へ。嫁入りに。つ
 ざりませ。兵太。あんとしたア曲がない。このいんもふとめを貴様の所へ。嫁入りに。つ
 れてまいたのでおどる。ヤア斯ばがし申てり合点がまいるまい貴様國元にて。これなる
 身どもが。いんもふとの。お蛸と。密通をせられたといふこと。おとにて聞て腹立り。いた

○阿蛸
吸付不
離名誼
自稱

したれども。たんだひとり。いんもふとがと。どうした縁でが。貴様であくは添ぬを
 申すもへ。不便に。おもつて堪忍の胸を撫て。すいた男に添せずと思ひまはめ。態く召し
 つれて参つて。おどる。ヤア。此上からの随分といんもふとめを不便がつてやつて下さ。ま
 まづ祝つて冷酒でなりと。盃をさせずに。サア。はやく。おふつ。ヤア。おまへさ
 んい。どなたか知りねへが。とこの國からめつそらな。惣体へ男といふ者。女にあつて。
 二世の三世のと。眞實らしく。いひかけて欺してみろ。女をおとす。おさだまりの口上。
 それを。まんまことにして駿河から。わさ。其男に。添はそふとつて。つれておこしな
 るといふ。馬鹿氣きつて。ゐるじやアござりませんか。又妹御も妹御。満足な男でもある
 とか。わたしはしかたなしに添て。ゐますけれど色が黒くて目が三かくで口が大きくて
 髭だらけで。胸先から腹中に。癖がべつたりで。足は年中雁着で。ざら。して。イヤまた
 寐た時寐息の喚い男。彌次。ヤイ。く。こいつめが。亭主を羅利骨灰にしやアがる。おふつ
 オホ、。それでも男といふものは。すたらねへ者で。女とさへいやア眼一でも鼻欠で
 もた。は通さぬ氣性。さだめし念頃知られた人も。邂逅にはありましたらうが。あんまり

好もしい。男でもござりませんから。おまへさんがたの。やうに。跡を追て来た人い。ひつとりもござりません。此の狭い内に。女房がふたり三人あつたら。大屋から根太がたまらねへ。店を明ろと追出されるでござりませう人の知らねへうちに。はやくつれてお歸りあされませ。兵太 エレハイ最前からつべら。こべらと。此女中よくしやべるが。其方先きに者だい。おふつ アイわたくしかへ。彌次郎兵衛の女房でござります。兵太 アニ女房たい。見たくでもあいヤア。これ彌次郎兵衛。お身女房をぬつたか。エレく是非に及ばない。繩をの、れ。國元へひいていかすに。トくわいちうよりはるわを取出。彌次 ナニ繩を。か、れたア。どういふ理屈。わつちが女房を。もちやア。繩をか、らにやア。なりやせんかへ。とほうもねへ。モンエ鯨切りを二本さしきまつた。とつて其が恐ろしい。ものでもござりやせんわな。兵太 イヤお身。がぬにかさ高にをでやる。コリヤよくさけ。今度いんもふとを。めしつれたわ。家老中の指圖に依て罷り越たぞ其譯と。いふ相役の横須賀利金太かたより。此いんもふとを。婦妻に貰ひたきよ。嫌を以て。申てした。身にとつては過分の贅ゆへ。早速よ同心して結納まで受をさめる所に。いんもふとのは一筋に。こなたと夫婦の契約をした上

○彌次
有直打

は。たどへ親兄弟の差圖でも。ほかへ縁につかずこたア。いやだといふ。みども魂消まいものか。ア、せず事がないと。それから其利金太かたへ使ひをつかはし彌次郎兵衛と申すもの。妹めが密通を致せし事。神もつて存せず。それゆへ。結納も受納致せし所に。いんもふとめは密通の男ならでは。添あいと申す然れば妹か首をさつてこなたへ持参仕らふ。それにて御一分を立られ。御了簡頼み入と申遣せしに先方も諸親類はじめ傍輩どもへ。兼てこなた妹御を妻に申受る等と吹聴せし上は。世間体へ對し申譯の無い仕合。女の首一つ受たとして。何の役も。た、ぬこと此上は其元と相果す。より外分別あし。明晩安倍川原に於て。勝負を決せずとの返事。元來身共も覺悟の前。いかにもと挨拶せし所に。家老中より雙方を召れ。年來御主人の御知行を頂戴いたし居ながら。私しの宿意をもつて。討果さんどは殿へ對して第一不忠妹が兄にかくして。夫を持ちを知らずして。利金太に契約せしを。不届とはいひ難し。いまだ婚禮もせないうちのこと。互に一分のすたるとは無い等自今以後兩人遺恨を棄て御奉公を大切に勤められよ。また妹あた子ことは。借初にいひ約束せし男の外。他へ縁さ。つくまじとは寔に貞節の至りと殿も不便と思召され下地より馴染

○女房
有先見
五十三
次隠耻
因縁有
于茲

たる男に添せよとの御意。有難御受申て。それよりこれまで罷越たる所さの男今女房を
持居故。すこくと妹をめしつれ歸りましたと。ア、ハイ兵太左衛門ともいはる。侍が。生
顔さけてかへらさずかヤアサア妹のを妻に致せし其通りいやだといへば。是非とも繩を
かけて國元へひきつれ。家老中へ此段を披露し。一旦約せし利金太方へ。己を渡さねば。兵
太。衛門武士がた、ないサアせがことがないと諦めて繩をか、れ但し踏附けてめしど
らずかヤア彌次ハア成程。そうおつしやき。聞へましたか。しかしそれは。おめへさまの
方の得手勝手。たとひ此身は三枚におろされ切割まれて惣辛にせらる、とも。我を大切に
して。艱難辛抱する此女房を捨て。妹御を女房にもたれるものか。しかたがねへ。どうとも
御勝手にさせへまし。トかくごして両手をうしろへまはせは。兵太左衛門立か、り。と。お
ふつ。モシ、段々の様子を承たまひりますれ。御尤る事去ながら現在夫が繩めにの、り
永の道中に耻をさらし。お國で。もしも命に拘るまとやあどあつては。わたしの悲し。モ
シ今おまへの。いひなさるには。たとへ此身はどうなつても。艱難辛抱した女房の。すてら
れぬと。いひなごつたが私よ千倍。もふなんよ。いひませぬ。またしに。隙を下さりま



せ。あの妹御の。駿河からの馴染とあれば私
よりのさきの事。添ふとおつしやりも無理で
はない。サア期わけて。いふうへよ暇をもくれ
ず。お侍さまの手にかゝる了間なら。まつわた
しからさへ死にます。トきくくみかしも
て。ひわくり廻とを彌次コリヤ、何をする。
彌次郎おさへて。馬鹿ものめが。あふつ。イエ、それでも彌次ハ
テさてそれほどに。思ひつめた。ことならしか
たがねへ。ちつとの間暇をとつて。親分の所へ
でもいつて。ゐてくれ。大事の女房を今去ふな
ど、は。夢にもおもはねへ。はかねへ別れま
ると。みんな己が。わりいからだ。トさすがの
ぼうの手まへ氣の毒さに。かたかげへを縁さ
て。いろくいだましつ。そかしつ。いひふく

○百石
之傾分
必是釋
時

め。すゝりばことりいだし。三くだり半を。かきてやれば。びんぼう人のきさんじき。きの身きた儘。くまばこに。ふるしきづ、みひとつ。ひつかへて。なみたながち。しほくとして出てゆく。と。兵太左工門。ヤレ〜重荷を。おろした。ナント彌次さん。わしが仕打大小をとりてほうりいだし。彌次 駿河もの、詞恐れ入た。田舎侍の立出。いかな後家の質屋へ見せては妙でありませう。彌次 百石どりと直打する男を。棒手振の芋七にして。おくは惜いもの。それにこのまた。矢場のお鮎が田舎娘の身振。妙であつた。皆れれが自作の狂言で。兩人を頼んで女房に一ぱい。くわせ。追出したも。あの陰氣ものに飽果たからの事。ひとつは急に拾五兩と云ふ。金が無ればあらねへことで。芋七ささまへふつと咄したら。ささまの云には。ソリヤアさいはるの事かある。去る所の隠居が内の腰本に手をつけ。孕したゆへ。聾や娘の手前へしれぬささよとて。表向いとまを出して。請人の所へ内証で。預けておかれぬが。どふぞ腹の子ぐるめに。金拾五兩つけて。かたづけたいと。わしが頼まれて居るから。調度よいが。しかし女房の在上へは。どふもと。咄しについて。をれもその拾五兩はしい最中たとへ腹は鬼の子が。やどつて居ようが。金さへもつてくれば。年増女房に飽た所。こいつは妙だと此狂言をのいて。貴様たちふたりを頼んで。まんまと上首尾にやりはやつたが。彼持參金の

しろものは。ぬよ〜急に來る筈か。どうだ〜芋七 イヤくる。はづとも〜。ためへも金
が急ぐといふ。さきでも。腹が落さうだから。一刻も早いが宜と。せきこんでゐられるから。
とこで今夜更てから。そつと駕でこ、へ向て來る。はづにしておひた。ちよつと酒でも
出さにやアなるめへが。内よとつたのがありやすか 彌次 ヤア〜今夜來るのか。エ、それ
は又早急な。それとしつたら。今日髪月代でもしておまうものを。ドレちよつと。髭ばかり
でも剃て來やう。芋七 ア、コレ〜。今頃どこに髪結床があるものだ。そんなことよりか。
酒の支度でもするが宜コレサ〜おめへ何をまど〜する 彌次郎 イヤ何もしねへが。ち
よつと爪でも。とつておまう 芋七 ナニ婿もねへ。そんなことは。しねへでもら、じやア孫
へか 彌次 イヤそれでも十本みんなとらづとも。せめて二本の爪ばかり 芋七 ハ、ハ、ハ、お
さやアがれ。大わらひだ。ト此内にはかにそこらとり片付るやら。火鉢にけし炭を。おまし
まらふてはおかしいと。三人はあつさめはせ。のみか 芋七 ヤヤもふ來たそうな。トかどの
とあけてと。ヲットお、だ〜。駕の衆御太義〜。コレデーばい。のんでござれ。トあり
した錢を遣て駕のものをさつそく追かへし。芋七 サア娶御のお出だ。お酒盃〜 彌次コ
のつて來た女の手をどつて。ともなひはいり

○ 於壺
出先妻
取おと
あを

レ。ソ。からおせは 芋七 サアお壺さん。そけへ。おはりおせへ。そまでおめへが。一ツのん
 で御亭主へさしなせへお鯛お酌く コリヤア 四海浪静かにと。云てへが謠ひは知らず。
 明日来て潮来でも。やらがしませう。ト此内だんくさかづき おたこいも七さん。わつ
 ちらアもう。おひらきに。いたしやせう 芋七 ソレくこの狭い内よなが居のおそれだ。コ
 レお壺さん。今夜は。ゆるりと休みなせへ。まためした御目に懸らう たいとまをひしお
 ち出つれば彌次郎おくる。彌次 コレ芋七。持參金の。またがあいがどうする 芋七 そこは。
 ふりして。表に立ち出で。ぬからぬへの。今のさき駕から出たとき。そつとさいたら明日の。晝時分。隠居のほうから。
 くる筈に間違がひば。ないといふことだ。ソリヤア請合ひきづけへおしに。今夜のしつか
 り樂しみなせへ 下彌次郎がせなかと。ひとつくら見せ 彌次 コリヤア寒くなつた時に茶
 漬でも喰糸へか おつほイ、エ。よろしうござります。彌次 そんならもふ寝ようか お壺お
 とあをとりませう。彌次 ヨイくあれが出して。やらう 下戸棚より。やぶれぶごんに。か
 もての戸を。ドン 彌次 エ、今ごろは誰だく 下い、つ、も。さては今おひだした。女ば
 來たるならんか。但しとおやぶん。いさくさをいひよ來たるか。なによも 彌次 コレくひ
 せよ。見つけられていめんどう也と。今の女ぼうにむかひこゝるにて

○ 張子
泰山吹
欲飛

よんなことがある。此長屋の作法で。長屋の者が娶を取ると長屋ぢうの。ものが來て其娶
 の尻をさすつて見るが定法。今とあたの來たことをどうして知つてやら。それでさすりに
 きあつたに違ひは無い。そなたは懷妊のよし。おなじくは。まだ今宵は來ませぬと云つて。
 見せ度ねへが。どうであらう おつほ ヤやくわたしのいやだのふ。殊にたゞの身では無し。
 しらないお人に。此おむとを撫させる事はいやごねへ 彌次郎 そんならとこそへかくして
 へものだが。此通り二階はなし。ヨットあるぞく。窮屈ながら。ちこの間の。此所へく
 下賣残しのあき半櫃さいわい。ふたをわけて。彼お壺をいれもとのごとくふたしてお
 彌次 ヤア喜多八かエ、今時分にどうして來た 北八 イヤもうく。内に落着てゐられやせ
 ぬ此間からぬめへ頼んだ拾五圓の金の事。翌日ハ店御しよかふる故。是非くわすの朝
 まで。わつちが遣ひ込んぶ穴を埋ておかねをなりやせぬ。それが出來ねへと。忽ち百日
 の説法尻ひとつ。おめへのいふには。隨心分當たりがあるから。讚談してやろうと。いひな
 さつたよよつて。じつと待て居たが。今以て沙汰が無から。あんまり氣づけへさに寢處か
 らそつと脱てきやしたが。いよくその金は。出來やせうかねへ 彌次 した事よ。あした

の晝までには。さつと出かしてやる。そこへいつちや男だ。なんぼあんなに。しみつたれな
 暮し。して居ても。さアとらへ。拾兩や拾五兩の目くさりおね工面せうといつたがせうが
 にやア。ちげへは糸へから。落着て居さつし北八。そいつの有難。そのかはり百倍にして此
 恩を返しやも。此のひだからいふとをり。番頭はなくなる。親方も今に目出度ありやすか
 ら。跡で後家御を手にいれさへすりやア。そぐよわつちが旦那様どうか芝居の敵役がいふ
 ようなこつたが。おれバつかりの違ひし。極々内々のところはおもふ出来か、つて。居やす
 から。今が大事の所こ、で拾五兩の金のねへと。しくぢつて。此もとらす蜂もとらすだの
 ら何卒お頼みやしやも。彌次。おれも手めへを思ふ。身をおもふだから。其咄しのをとりよ
 いまへ入ると。互の爲だ。あすの晝時分には。耳を揃へて十五兩きつと間にあはせて遣
 ぞ。トこの咄のうち。半櫃於壺。ヨシ。くどうぞとてくださりませ。腹が痛くて。どうやら
 産そうになりました。ア、苦しむくく。ト無症にうめき出せば。彌次。エ、そいつは困
 つたものだ。コレくく北八。てめへ子を産女の手傳をしたと糸へか。北八。ナニとんだ
 とを。イヤかみさんが。いつの間に孕んだのぶさつぱり知なんだ隣のかみさんでも起して



来てたのむが宜。彌次。イヤくちつと譯があつ
 て隣へも沙汰あしに。こつそりとやりてへ。マ
 アそこへ湯でもわかしてくれ。北八。それ承
 知だが何あんな窮屈な所へかみさんをいきて
 置のたのだ。サア。く出させへ。トはんび
 ら女の手をひつぱりて。引出さん。あつば
 としけるに。おつば北八を見て。ヤア
 ヤアおまへか。嬉しや。わしが産み月を心
 むとなさに。爰まで尋ねて来てくださりまし
 たか。トしがみつくに。北八はびつく。彌次郎
 コリヤ北八。手めへ此女どちかづさか。あつば
 ハイ私を。あの喜多八さまのござる内よ。おま
 んまださをいたして居りましたもの。いやだ
 といふを無理無躰よ。北八様に口説れまして

○泰山 遺地 之旨無 申分奇

ツイ逢まして。こうした身になりました故。お隙を貰ひ。親許へ歸りましても。物堅い親。うちへ入れず。北八さまのもらひ分にて。親のてまへを引取れ。余所の内預られて居ました。が。此事親方さまの耳に入らぬうち私に拾五兩の金をつけて。外へ片付たいとの相談。わたしの逆も斯なるから。いつまでもはなれぬ氣でゐましたけれど。それでいあなたの御爲よなるまいと。得心づくで思ひきり。心にそまぬこへ嫁入して來ましたのでござります。トくるし中になみだ半分いさ彌次ヤアくそんなら親方の内の引負ひ拾五兩なくては。償はれぬといつたは。引負ひではなくて。まの女を片付代の拾五兩か。北八さやうく。彌次エ、おさやアかれ。此べらぼうやろうめ。よくおれをとんだめにあひせやアがつた。北八ナニとんだめにあふものか金さへ借ねへけとやアい、じやアねへかへ。彌次い、どの何のとだコレ其金ゆへに。おらア女房をさらけ出してしまつて。今夜からひとりで寝にやアならねへは。北八そのかはりました。若い女房を譲つたから。申分はあるめへ。彌次たのこつとくしやアがれ。あの女のつらが。ふた目とも見られる顔かいめへましいやろうめだ。トまつくろになつて。はらたて。一ツ二ツいひつりて。彌次郎こらへず北八にぶつて懸る。北八もやつきとなつて。からかつて居るうち。お壺はしきりにむしがかぶ

○佳話

るとみへウんくうなつてくるしがるのも。かまはず。こなたにのやみくもどつかみあふてゐるうち。夜明て煤灼の芋七。商賣物のかいだしはゆくとてこの内へおとづれたるが。何やらうちには。ばつたたくされとて。女のうめく聲もきこゆるにや。芋七こればと。そとより戸をわけんとするに。あかす。叩てもわけざれば。やにはに。そとよりひつばずしてはいると彌次彌次ヤアいも七か。よくもく此やろうめと馴合て。おれをはめたなく合点しねへぞ。すまねへぞ。芋七ナニはめたとは何のまとな彌次なんの事だもすさまじひふてへ奴らだ。トまた芋七取てかゝると。いも七はらを立て。小ぢからのあるにまかせ。こほんをふみくたくやら。どびんの茶をぶちまけるやら。三人やたら。みつちやに。さわぎたつる物音に。きんじよとなりの人々あひくかけつけ。かれこれと取りさへるうち。おつぼはそこらをのた打まわり。くるしむるに。北八ヤアくお壺どうしたくコレ芋來てくれ。可愛そらに。どうかしたそうあ。芋七コリヤく目をまはしたのだコレ。水だ。北八お壺ヤアイ。とありのていしゆ。おつぼさまとは。たれのことだ。モシ愛のかみさまは。芋七コレ此目をまはしたか。かみさまとなり。ハア彌次さん。ぶめへのおかみさまか。彌次郎アイわつちが女房のやうでもあり。またないやうでもあり。とあり。ハア聞へた。喜多八さまのかみさまか。喜多八アイわつちのかゝアのやうでもあり。又ないやうでもあり。とあり。マアなんにしる。どつちのだか知れない。おかみさまヤアイ。芋七コリアつめた

○先殺

二人

くあつた。もういけねへ 北八 エ、いぢらしいことをした。彌次さん醫者をよびよやつてく
 んなせへな となりの亭主 わたしが元宅さんでも呼んで来てあげませうの 彌次 その序はお
 寺へもいつてもらひてへる トこのうち醫者がくるやら灸をすへるやらよつてたかつて
 り。さつぱりいきたへたるやう喜多八 かはいや只の身でいなし。今のさわだに血があが
 すに。北八おもはず。なきいだし
 つたのだらう。しかたがねへ。時に彌次さんおめへも腹立だらうが。どうぞ。了簡して此の
 取り始末をしてくんあせへな 彌次 おれをバ色々目に逢せる 北八 何程勘當同然にした女
 でも斯なつて親の所へも知らせずば成めへ誰を遣たものだらう 幸七 ソリヤアわしでもい
 つてやろうか。せんでへこれのどういふわけかさつぱりわからねへ。おらが新道の肴屋に。
 預つて居た女。余所の隠居の妾だか。片付たい。世話してくれろと頼れたから。この内へ
 仲人したが。今聞けば。おめへの女房とはどうした理屈だ 北八 マア〜あとでわかる其の
 肴屋といふはわいらが。親方の所の出入。預けておめへはやつぱりわいら。マアそれより
 か早く親の所へ知らせてへ。それもその肴屋まで報知せると親の内へあるところからしらせ
 てくれる。幸七 そんならいつてきやせう トいも七は出行くんじよの人々手傳ひて。そ
 こらとりかたづけ。めい〜くやみをのべあ

○先殺
 三人
 尤生涯
 之環瑾

さつして。みぢ〜北八 何にしる。わつちのちよつといつて来やう。おふべそつと出たま
 ひとまづかへるよ
 たから。あとは宜やうに頼みませ けんとする所へ。ほうばいの與九八きたりて
 九八 ヲナ〜北八殿よ、にか。親方がとう〜今朝がた。御臨終おされた 北八 そうだらう
 とも 與九八 それにつゐて、おかみさまがおつしやるには。北八に暇とくれる。あれは平生
 心ざしのみだらちもの。旦那殿がしなれたら猶の事。女の主と侮とつて。どのやうな不埒
 をせまいものでもないからさう〜請人の所へ引き渡してやれとの事それはと傍から。
 さまく取り成をいつて見たが。どうてもきさまはかみさまへ。何ぞいやらしい事でもい
 つこと見へる。さうかして日頃からいけすかねへ。煩の皮の厚い男。顔を見るもいやだと。
 貴様の事をわるくいつて。七里潔敗いやだ〜といつてござるから。しかたがねへ。モシ
 彌次郎兵衛さまは。あるたか。只今御聞の通りでございますから。きた八どのは是てお渡
 し申す 彌次 承知いたしました。コレ喜多八ものとりだの。それはい、か 北八 イヤもふ
 よくてもわるくてもしかたかねへ。しかしその等ではね〜つもりだに彌次 くれ〜もい
 め〜ましむ。業ごら〜野郎めだ。いつそのこと何も角。もぶちまけやうか 北八 マ、コレ

○嵐蜂
 哭飛去

く誤つたおがむく 與九八 また折を見て。訴訟のしかさもあらう。なんよし。今日の
 内がとり込て居るから。又その内よ トあいさつそこよして與九八の出で 芋七 サア
 く親元へいしらせて来たか。是から買物をせずなるめへ 北八 御苦勞 逆ものにとに
 私ちといつしよにきてくんねへ ト彌次郎に渡した貳歩を取て芋七を引つれば いも七 サ
 アくこの元氣で佛を桶へさらげこんでしまあふ時に寺はどこだ 彌次郎 馬鹿アいへ。お
 いらがうちに寺が。あつてたまるものか 喜多八 そいつのつまりねへ 彌次郎 かもふことア
 ね。なんでも持ち出しさへすりやア何處かしら寺があるだろふ 喜多八 それだとして葬禮
 を昇ひて。寺町を呼つてあるひたとつて買入があるめへ いも七 イヤそれもおもしろかる
 う。わしは寺町へばかり。あさきひにゆくが呼びよふが町とは。ちがいやすマア今頃のし
 ろものさら死んでいこくくゆるれんさうや。 分 葱 ばけきや。卒都婆の干物に。石塔の
 たちりなりぞい。よく賣るから葬禮も買入がありませうハ。 喜多八 かわへそふよ晒
 落どころじやア終へ。サアくはやく片付けてくんなせへ トなまなふたいせいよつてた
 ら出ほらだいな事。しやべりあから。やどけをおけの中へおさめて。香 かつて。むだやらしやれや
 華を手向けるとさうへ お詣のてしあや。湯さふさくたつねきたりて アイゆるさつし



やりまし。私やハアおつばの親でござらア北
 ハこれは。よふことまつあちらへ親ヤレく
 愛とをしまりましたわしやハイく田舎者で
 ござるから義者ばつてむけちなく。ぼる出し
 ました。こんあふ成べいたア。思ひ居ませあ
 んだ。ドレく おすめ 娘の。どこにゐります。ちよ
 つくり類サア。見せてくれさつしやりまし 彌
 次 エ あめへ。もふちつと。ひやく來されば
 い。よ。もふ桶の中へ。さらげこんで。しまつ
 たもの。のう芋七 芋七 イヤしかし。とつさん
 の身で。見たいは道理くくどうりよ狐
 の子じやものをとげつかる。ハ。ハ。ハ。さらば
 御開帳いたそうか ト棺桶の香をどとと。あけ
 てみすれば。あやちめがね

をかけたつて親 コリヤハア違つたアもし 彌次 ナニちがつたア何が違ひ申した親 佛がちが
 へと見て 申した此佛にやア首が。ござらない。そしてわしの娘は女でござるに。コリヤハア男の
 死人と見へ申て。髪髻が。はへてござらア 芋七 ナニ首がさないとはいれ。はんにコ
 リヤア首がねへ彌次さんをめへどうした 彌次 ナニおいらが知るものか。そこらにをちて
 はねへかへ親 ヤレハア此衆はとんだ人達だサア。うらが娘はどうさつせへた死んだの
 あんのと嘘ばつかしつかつしやる。サア娘を爰へ。出しなさら 彌次郎 だせとつて。外にや
 アねへ。とやうもねへおやぢめだ親 コリヤハアすまみい。北八 なる程とつさんのいふ
 のは。尤だ何にしろ首があくちやア。つまらねへ親 インチ。田舎もんで。こそあれうら
 ア頭百姓もしたもんだ。お家主殿へことわつてゑすいめに。あわせてくれべい 下段々こ
 なり。やかましくいふゆへ。そばに居あわせし。いろく。大や サテ。今
 めてもいつこう聞いれず。大やさまが。このやうをいさにきいてかけ付 大や サテ。今
 さ、ましたが。大變なとでござる。何よいたせしんだもの、首の無いといふ。トはや桶
 のぞき イヤ。くをやぢ殿。氣遣いさつしやるな首はあります。親 みるとはどまよあり
 ます 大や コリヤア佛を逆さまに入れたのでござるハ、ハ、ハ、親 ハアそれで落着きました。コ

○佛ヲ入
 釋迦様ニ
 此女成
 佛無疑ト
 爾無阿
 彌陀佛
 爾無阿
 彌陀佛
 彌陀佛

リヤどなたも御太儀で御さる。トこれより夜に入て葬禮をなし。あどねんごろにとむらい
 を出されて。また彌次郎の方に居そうらうとなり。だがひよつまらぬ身の上にあはて。
 いてそのど。まんるを。ふたりづれで出かけまいかとの。さうだんから友達にたのみ
 のなればより伊勢さんぐうとおもひたち東海道へと出かける

鹿島立の狂歌

難波江のよしめましとま旅なれば

おもひたつ日を吉日とせむ

増補 道中膝栗毛發端終

增補 笑評道中膝栗毛初編

酒の元麴町

十返舎一九著

酒の神田

醉多道士笑評

○發語

○古製

兵器至

今無半

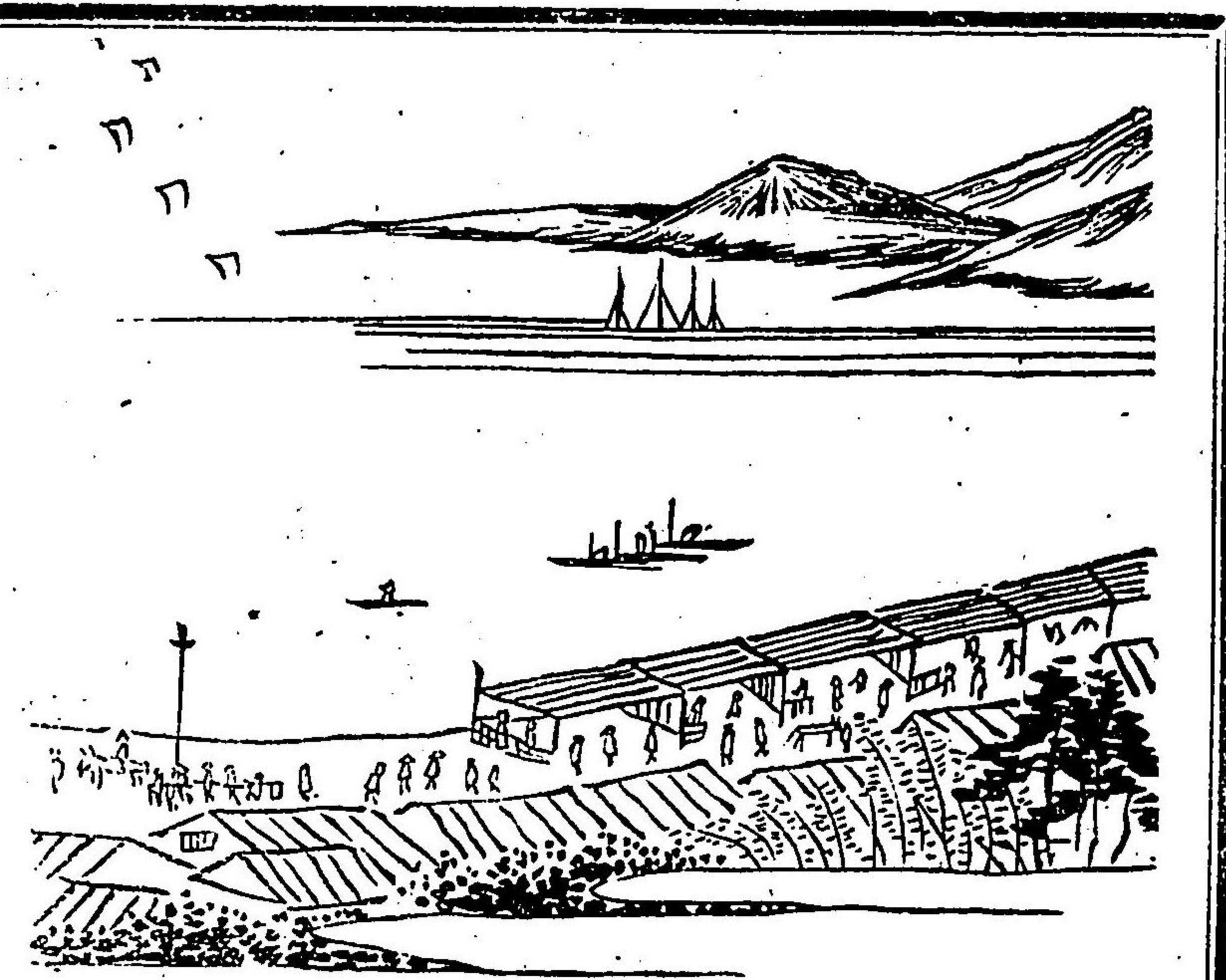
文價亦

目出度

矣

富貴自在冥加あれとや。營々たてし門の松風琴に通ふ麗らかさ。實や大道は髪はつの如しど。
 毛すぢ程も動かぬ御代のためしに。雞か鳴く吾妻錦繪に。鎧武者の美名をのこ残し。弓も太刀
 も額にして。千早振の廣前におさまれる豊津國のいさはしり。美舞のいにしへ。延喜の昔
 もまのあたり見る心地よなん。いざや此時國々の名山勝地を巡見して。月代にぬる。聖代
 の御恩徳を。藥鐘頭の茶香咽しに貯はへん物をと。玉くしげ二人の友だちいざきつれて。
 山鳥の尾の長旅あれへ臍のあたりに打替の金をあた。め。花のお江戸を立出るは。神田八
 丁堀邊に。獨住の彌次郎兵衛といふ。のをらくもの。食客の北八もろとも。朽木草鞋の足元
 軽く。千里膏の貯へは何員となく。船のむさみ絞りに對の浴衣を吹かくる。神風や伊勢
 參宮より足引の大和巡して。花の都に梅の浪華へと。心さして出行程に。早くも高繩の町

○大和
國多山
標道路
險故巡
廻者皆
疲勞是
以有足
引冠辭

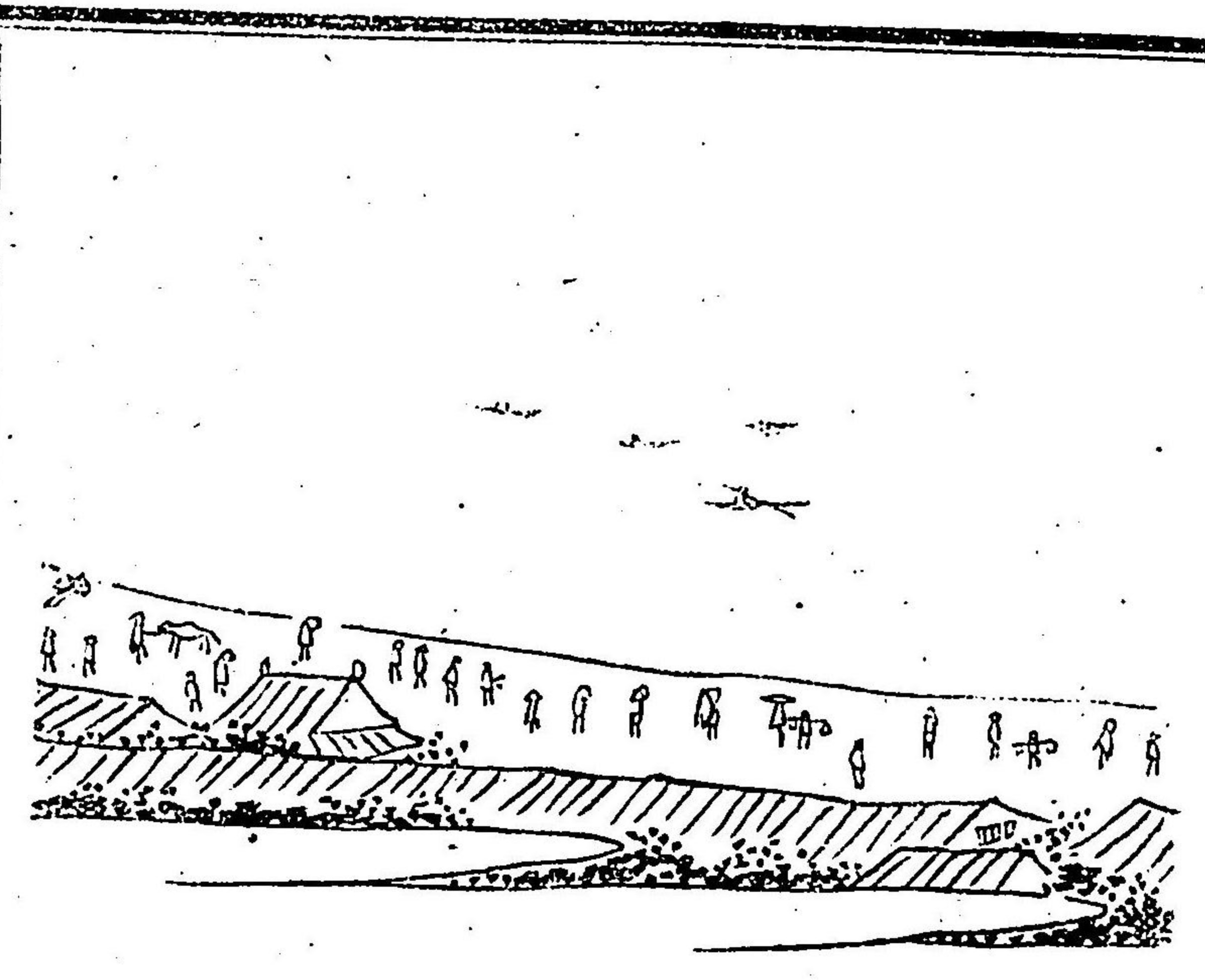


に來か、り。川柳點の前句集をもちひいだせり。

高繩へ来てわすきたる

まとはかり

とよみたれ共我くは。何一ツ心が、りの事もなく獨身のささんじは。鼠の店貸出すもついでと。身上のあらず。風呂敷包とあしたるも心安し。去きながら旦那寺の佛餉袋を和らかに。つめたれば。外に百銅地腹を切て往來の切手ももらい。大屋へ古借を濟したかわり。御關所の手形を請取。ふめる物の見たをしやへさづけて。金にかへ。がらくた物は店請よしよはせて。禮を請。漬



菜のおもしろ炭かき。庖丁の隣へのこし。ちぎれたれ共繩をだれと油壺は向へゆずりて。何一ツ取残したる物もさく。まだも心が、りは酒屋と米屋の拂をせず。だしぬけにしたればさぞやうらみん。さのどくながら。もこれ古き歌に

さきの歌よ。かりたをなすか今かすか。

いづれむくひの有とおもへば

打笑ひつ、彌次郎兵衛狂詩を口ずさむ
雖非亡命。可奈何。借金不報。樂尻過。夫居。木貫。掛乞。衆。將。是。是。川向。成。子。戈。一
うち興じて程なく品川へつく彌次郎兵衛

海邊をばなと品川といふやらん

と難じたる上の句に北八とりあへず

さればさみつの。あるにまかせて

いと面白く歩行ともなしに鈴が森にいたり彌次郎兵衛

おそろしやつみある人の首だまに。つけたる名なれ鈴が森とい

大森といへるの麥藁細工の名物にて家とにあらなう

飯に焚麥わら細工買たまへ。これの子供をすかし屁のため

それより六郷の渡しを越て萬年屋にて交度をせんと腰をかける 萬年やの女をばようござ

います 彌次郎兵衛 二膳頼みます きた八 コウ彌次さん見なせへ今の女の尻の去年までハ柳

で居たッけが。もう白になつたア。どうでも杵にこづかれると見へる。そしてめんような。

道中の茶屋では。床の間に。ひからびた花をいけて置の。あのかけ物を見給へ何だ彌次ア

リヤア鯉の漉登りよ北をらア鮒がそう麵を喰のかと思つた 彌次 コウひだをいわすと。は

やく喰はつし。汁がさめらア 北八 ヲヤいつの間は持来た(ドレ)トあらちやを(き) 彌次

○ 向好

肉杵一者

御膳

彌次無

振目

もふおはちがれい落した北八 又さきへいつて。うめへ物をしてやらふ(トそれより二人は

立出て行向よりお大名の行れつ先拂の男一人ハ六十) 先拂(下ア)にくかぶり物を取ませ

ラア 北八 かけ落物は下座をしねへでもい、と見へる 彌次 あせ北八 はて。かむり物を通り

ませうぞといふは 先拂 馬の口と取ませうぞ 北八 馬の口も。とりはづしができるのかハ、

ハ、先拂 跡の人せいが高いぞ 彌次 おいらがとか。高いはづた愛宕の坂で九文龍とかた

をならべた男だ 北八 しやれなさんあ。どんなめにあはふせ 彌次 アレ見やれどれもい、奴

だ。巻はじよりでどうせいに尻が並んで。何のとはねへ(後町新道の土用手といふ物だ 北八

をや) 弓をかついでいる。人の笠を見ねへ頸と延引して居らア 彌次 としてあの羽織の

長さの暖簾から。金玉がのぞいてゐる 北八 殿様はい、男だ。さぞ女中衆がこすり付るだろ

う 彌次 べらばらめ。色くいな事よ。せはをやくハあなたがた。とつてやたら。そんな事を

してつまる物かへ 北八 ナせそれだとして。お道具を見ねへあの通りに立ずめだ。ハ、サ

アお駕が通たから行ふ(たつて行過る)馬方 親方戻り馬たが乗てくんなさい 彌次 安くば乗

べい 馬方 酒手で行ふじばで乗てくんなさい (馬の直段もそうだんができ彌次郎も北八も

○馬士
社會言
語寫出
馬士矣

しやんく馬向よりくる馬方へエちくしよめ早いな。こちらの馬方くそを喰らへ。馬方うぬけつ出もしやぶれ。ト是がこのていの行違ひの換さつたがひにあくた馬方コレ伊賀よ昨日手ゆめへと香てゐた。やろういアリヤア上の宿の房州だな。この手やい常に名を呼北八を乗せた馬。先度の晩げにな。アノ房州めが女房がな。己らが親方の脊戸口に尿を。まいて居たと思へ。何がシヤア〜といふ音を聞とらも氣かわるくなつたもんだ。て。こいつなアかまう事アねへ。ぶつためてやろふと思つて。打喰つたげんきて。いきなりに腕ヲねぢやアけて。そこへぶつたをしたとおもへ。とふすると。女房めが。さもをつぶしやアがつてコリヤア。何をすると。ぬかしやアがつたから。エ、あよをするも犬のくそもいるもんかへ。ぶつてしめるのだ。まつてけつかれと云と。あにがアノ体たへだから。ひとへ力の有女よ。野郎みやアと。己をつ、こかしやアがつたんで。エ、とふしやアがると。よこ面ア一ツぶんなくつて馬屋の壁へれつたをして乗か、つたと思へ。またこ、とをぬかしやアがるから。己か親方の子にやろふと思つて餅よ買て來がけだから其餅よヲ二ツ三ツ女房めが口へぬぢあんたら。むしやく〜と喰やアがるから。其内よぶつちめた。とふ

○温刺
身亦有り焉

すると最つとくれろと。いやあがつたんで。うらもそこらアさぐり廻して馬の糞たア。しらずに何いつが口へ押込んだら。胸よチビるかつて。はらア立やアがるまいか。うらもあんまり可愛そうだんてとう〜焼杉の下駄ア一ツあつたをくれたいな。いま〜しい。此は二人りも大きに奥をもよ何。夫より二人とも馬をかりてたどり。行程に神奈川の臺よ來しはや神奈川の棒鼻へつく。夫より二人とも馬をかりてたどり。行程に神奈川の臺よ來る。伊は片側よ茶屋軒を並へ何も座敷二階造欄干付の廊下棧橋など渡して浪打ぎわの景色いたつてよし。茶屋の女。お休なさいやアせ。温たかな冷飯もございやアす。煮たての肴のさめたのもございやアす。そばの太いのをあげりやアせ。うどんのおほきなものもございやアす。お休なさいやアせ。二人いこ、よて一ぱい氣とつ。彌次 北八見さつし美しい太へもんだ。北八ハ、アいか様い、娘だ時に何が有。さだ八そあらを見廻し肴をさしづして酒を言めてう〜娘。これはお待どふ様でございやした。彌次 あめへの焼た鱈なら味かるふ。娘フ、歪もち出。これはお待どふ様でございやした。彌次 あめへの焼た鱈なら味かるふ。娘フ、あがら表のはふを。娘。お休なさいやアせ。奥が廣ございやす。北八 奥が廣いはづぶ安房上総向て呼なからゆく。彌次 北八見さつし此肴のちとござつた目元だ。打かへ。彌次 ござつたど見ゆる目元のお肴のさては娘が焼くさつたか。

北八是を聞いておなじくこじつける

味そふに見ゆる娘に油断すな。さやつが焼たる味のささに

彼是を興じて愛を立出色く道草を喰ふ馬路の氣さんとは高聲に咄ものしてたどり行程

に此宿はづれより十二三才の伊勢参跡になり先にありて伊勢参旦那様一文くれさい彌

次やろふとも手めへどこだ伊勢参わしら奥州北八奥州どこだ伊勢参笠に書て有申す彌

次奥州信夫郡幡山村長松△、幡山かおいらも手前たちの方に居たもんだはた山の與次

郎兵衛殿の達者で居か伊勢参與次郎兵衛といふ人ざアしり申さあい與太郎殿さらわしら

が隣さアに有申す彌次ヲ、その與太郎よ其又内に呑ん太郎と云ふ年寄のぢい様か有はづ

だ伊せ参ぢいいは有申す彌次として與太郎殿の女房は慥女だつけ伊せ参おかつ様ア女で

御ざりまうすよく知て居めさる彌次今じやア何といふかしらねへがわいらが居た時分は

各主殿は熊野傳三郎といつてナ其女房が内にゐつておいた馬と色事をして。にげたつけ

がどふしたしらん伊せ参それよさアよくしつて居めさる。庄屋殿のおかつさまア。内の

馬右衛門といふ男とつぼしり申した北八妙々彌次コリヤ小僧よきせ跡へさがるくたびれ

○長松
緊餅逐
能使彌
次一彌餅



たか伊勢参わしつ。ひだるくてあり申さ

ない彌餅でも買てやろふこひく餅五

ッ六ッ買てやりなが彌次何と小僧能く

らいよくづにのり伊勢参アイく餅をし

知て居るだろ伊勢参アイく餅をし

此内つれの伊勢参おれも十ヲ、イく

四五の前髪跡から呼かける長松ヤイく奴の伊勢参

レう主やア餅をおれにもくれさい伊勢参

先へ行人に買てもらへ。あんでもわの衆

が國さアの咄をするをヲイくといつて。

ゐると直に買てくんさるはチャアッレノ

わしにも餅を買てくれさい彌次手め

あろふ伊勢参先餅を買てくれさい。そふせないけりやア。こんたのいふことが當り申さ

あろふ伊勢参先餅を買てくれさい。そふせないけりやア。こんたのいふことが當り申さ

さなき 彌次 おらやアがれハ、ハ、北八 こいつはかつがれた。ハ、くト打笑て行程
 に早程ヶ谷の驛につく。両側より旅雀の鉗鳥に出して置泊女の顔のさながら。面をか
 ひりたることく。眞白に塗立。いづれも井の字かすまの紺の前垂をびたるは。借こそい
 にしへ爰ハ帷子の宿といひたる所なん聞へま。旅人を乗たる馬士。馬方富士の人穴馬で
 もはいる。あぜにお方よや穴が無ドウ。泊女馬士どんお泊かな。馬方イヤ旦那ハ武藏屋
 だが。お前の顔を見たらソレ此ちくしやうめが泊たがらアソレ。馬ヒイン。くく
 行過ると又あど。泊女 申お泊かへ。引とらへ。旅人 エレ手がもけらア 泊女 手ハもげ
 より旅人二三人。泊女 申お泊かへ。引とらへ。旅人 エレ手がもけらア 泊女 手ハもげ
 てもかふ御ざい舛お泊 なさいませ。旅人 馬鹿いへ手かなくちやアお飲まが喰れねへ
 泊女 お飯のあがられねへほうがお泊申ちやヤ猶勝手さ。旅人 エ、いめゑましいはなさ
 ぬかと。又あどからくる旅僧。泊女 お泊かへ。旅僧泊女の。旅僧イヤもちつと先へ参ろ
 ふ。ト此跡よりく。泊女 お泊なさいませ。田舎 旅ごさア安かア泊ますべい。泊女 お旅ごは二百
 ツ、田舎 イヤくそらは出し申さない。そんたい湯のぬるくてもよくござる。平はついで
 替てくつた事ア御ざら無が。飲と汁はたつた六七はいッ、も喰やアそれてよく御坐るは。

そんたいにやア。明日の晝食は此柳ぐりに一づいつめてもらへばもう外に何んも。入申
 と無。旅ごの百十六文ツ、出し申さう。泊女 そんなら外へお泊るさいませへ。田舎 ハア泊ご
 行まぞべいト。過る 彌次郎兵衛北八此体を見て始終興に入又あどつつける歌。
 お泊はよい程ヶ谷と泊め女。戸塚前てのはなざざりけり。
 と打笑ひ過行程に信濃阪といふ所にいたる是なん武州相州の境なりと聞ば。
 玉櫛げ二つよわのる國境所かれば信濃阪なり。
 すではや日も西の山のはにちらつきければ。戸塚の驛にきん泊べしといふとき行道をが
 ら彌次 コレ北ヤ。待つせへ。咄があらア。何でも道中の飯盛をす、めてらるせへから。こ
 で一ッばかり事が有いらわ親仁なり主やア廿代といふもんだから。親子と言ても。い
 、位だによつて。是から泊くでは何と親子の分にしようじやあねへか。北八 ヲ、これは
 妙だなる程それじやア。す、めねへでいひそんなら親父さんといふのか。彌次 そうさ貴様
 は諸事を息子きどりだが承知之助か。北八 よしくそらいつて亦い、たぼでも有たら此息
 子を出しぬくめへよ。彌次 エ、馬鹿アいわしヲやもう戸塚だ。笹屋にしようか。北八 親仁や

○北八

不_レ免_レ彌

次之子

分_一

彌次 何んだ北八 爰じやアねつから泊なせへといつて引ばらねへの 彌次 本に其筈爰は
 どなたかお泊と見へて皆宿屋に札か張て有北八 コウ向の内が風流だぜ 彌次 コレ姉さん泊
 てくれる氣は無いか 旅屋女 イエ今晩のお泊で合宿は成ませぬ 彌次 南無さんそうだろう
 〔ト段々宿をさがせども皆ふさかり泊
 〔れぬゆる大さよこまりまごつさあるく〕
 泊めざるは宿を痴氣としられたり。大金玉の名ある戸塚よ
 夫より宿はつれにいたるに漸く旅人屋の合宿無きてに見ゆるわれば。やがて爰に立よ
 りて 彌次 何とわしらを泊てくんなせへてい主 お二人りかへ。お泊なされませ。當宿は宿屋
 は皆ふさかりました私が私方ばかり當りませぬ 彌次 あんなにきれいな内をなせあてねへの
 てい主 我方は新宅でござり升。それお鍋お湯はどうだ 〔此内女盥に湯を汲て来りやなぎ〕
 北八 コウ彌次さんじやアねへ親仁おめへ草鞋もいつしよにしておこふ 彌次 ヲ、そしてお
 れが脚半もぎつといすいでおさや 北八 ナニ脚半を。いすげか 〔顔を見ると彌次郎兵衛目つ
 をいひながら脚半〕北八 姉さん茶を一宛くんな 〔ト座敷へ通る女盆よ〕女 直にお湯にお
 を洗ひしまいて 彌次 コウあの女の面をみたか。真中がへこんで何の事かねへ。踏げへしの馬
 召るさいやせ

○北八
 不_レ平_レ可_レレ
 應_フ

踏石といふ物だ北八 そりやそらと彌次さん 彌次 ソレ女がきたは北八 ヲット親仁。湯へ這
 入糸へか 〔此内女盆を〕彌次 ヲ酒か江戸者と見と。どこでもこうするにはあやまる 北八
 ナゼ酒を出しやア別に錢を取か 彌次 しれた事よ 〔トいひながら手拭を取湯へは入〕女
 一ツめしあがりませ 北八 是は御馳走だ。コウおゐらが親父に早く揚らつせへといつてく
 んな女 ハイさよウ申ませふと 〔立て行此内彌次郎兵衛〕彌次 ハ、ア何だ。コリヤア呑る。コ
 レ手めへ早く湯よ入てさや 北八 イヤ呑でからいろふ 彌次 エ、てめへもいちの。きたねへ
 もんだ。這つてきやナ 〔此内北八湯〕てい主 出て是は何も御座りませぬが一ツ召あがりませ
 せ 彌次 イエ御亭主さん是ではめいわくだ 亭主 イエ時にかよウで御座り升 〔私方は今迄外
 商賣を致して居ました。此度旅を屋に成まして。すなはち今日が見世開で御座り昇。ある
 方は始てのち客ゆへそれで祝て一ツ差上舛ので御座り升から別々御酒代をいた、くの
 では御座りませぬお心置無召あがつて下さりませ 彌次 イヤ夫は先お目出たい。しかし御
 馳走に成ては。近頃どのどくだ 亭主 ナニサ御遠慮なら今よお吸物も出来升 彌次 イヤもふ
 おかまいなまるな 亭主 へ、御ゆるりと 〔トい、すて立つて行〕北八 よウすは残らずあれ

○聞_レ只_ト
 憑_レ氣_揚

〔此内女盆を〕彌次 ヲ酒か江戸者と見と。どこでもこうするにはあやまる 北八
 ナゼ酒を出しやア別に錢を取か 彌次 しれた事よ 〔トいひながら手拭を取湯へは入〕女
 一ツめしあがりませ 北八 是は御馳走だ。コウおゐらが親父に早く揚らつせへといつてく
 んな女 ハイさよウ申ませふと 〔立て行此内彌次郎兵衛〕彌次 ハ、ア何だ。コリヤア呑る。コ
 レ手めへ早く湯よ入てさや 北八 イヤ呑でからいろふ 彌次 エ、てめへもいちの。きたねへ
 もんだ。這つてきやナ 〔此内北八湯〕てい主 出て是は何も御座りませぬが一ツ召あがりませ
 せ 彌次 イエ御亭主さん是ではめいわくだ 亭主 イエ時にかよウで御座り升 〔私方は今迄外
 商賣を致して居ました。此度旅を屋に成まして。すなはち今日が見世開で御座り昇。ある
 方は始てのち客ゆへそれで祝て一ツ差上舛ので御座り升から別々御酒代をいた、くの
 では御座りませぬお心置無召あがつて下さりませ 彌次 イヤ夫は先お目出たい。しかし御
 馳走に成ては。近頃どのどくだ 亭主 ナニサ御遠慮なら今よお吸物も出来升 彌次 イヤもふ
 おかまいなまるな 亭主 へ、御ゆるりと 〔トい、すて立つて行〕北八 よウすは残らずあれ

「い〜どうする〜」此内彌次郎北八もあき出ればやがて膳も出て、にも色〜あれど
 こゝを立出ると向よりついで「人足は略す夫より二人はそま〜に支度して
 て来るお大名長持引もさらす」箱根サア八里ハイなア。あッあ〜あッ〜どうだか
 北八 彌次さん見ねへ重そうな物を能か〜げアノ尻を揮さまア 彌次 あの手やいが尻
 を振まのすを見たらチトふさいで来た 北八 あぜ〜 彌次 死んだ女房が事を思ひ出して 北
 八 おきやアがれ。ハ、〜 此内向よりちらんがれ坊主破れ 坊主 ヒヤア御繁昌の且
 那方一文やつて下しやいませ 彌次 付あ〜 坊主 とま〜〜よいとこな 北八 コレ付くな
 といふに錢はね〜の 坊主 ナニない事が御座りやしやう。道中なさるお方にはなくてかは
 ぬ錢と金またも杖筭錢桐油。なんぼしまつる旦那でも。足一本でい歩かれぬ。其上田町の
 反魂丹こりや幸手屋のしらみ紐。越中ふんどしの掛が〜も。あ〜てはならぬ其替り古
 やつは。手ぬくひにおつかひなさるが御徳用 彌次 エ、やかましいッレやろう 坊主 トはや道よ
 りだ 坊主 コリヤ四文錢とい有がたい 彌次 ヤア四文錢か南無さん坊。三文つりを貰せ 坊主
 ハ、〜 彌次 いめへましい 此内早藤澤につきければまづばう 北八 バアさん團子ハ。
 つめてえか。チトあつためてくん 茶屋ば々 ドレ焼直して進せ升べい けし炭の火をかき
 さがし灰の立をも

○山 龍

大 山

かまわすぬをぎ立る此内二人りのほこりをはたさ〜煙草吞ぬると 親仁 モシちつと物
 六十位の桐油を着て風呂敷しよつたる親仁此見せ先に立とまりて 彌次 おめ〜江の島〜行あさるか。そんならこり
 を問ますべい。江の島〜いさます 彌次 おめ〜江の島〜行あさるか。そんならこり
 よマまつ直に行てノオ。遊行様のお寺の前に橋が有から 北八 本に橋といやア慥其橋の向
 だつけいきな女房の有茶屋が有たつけ 彌次 ソレ〜去年からか山〜行た時泊た内だアノ
 女房ハ江戸物よ 北八 どうりで氣が死いていらア 親仁 モシ〜其橋からどう行升 彌次 其橋
 の向に鳥居が有からそまを眞すぐに 北八 まゐると田圃〜おッ落やすよ 彌次 エ、手め〜だ
 まつていろへ。ッノ道をずつと行と村はづれに茶屋か二軒有所か有 北八 はんよ夫よ。よく
 腐つた物を喰はせる茶屋だ 彌次 ソリヤア手めてのいふのは右側だらう。左側の内はい、
 はナ。去年をらが行た時。ピチ〜する鯛の焼物。夫よ大平が海老のは糸出るやつよ。玉子
 とくわいと。大椎茸にして 親仁 モシ〜私はそんな物は喰すとよう御座る。そまから又
 どう行升 彌次 そこそずつと行當るを石の地藏様が有やす 北八 アノ地藏様の願が聞そ
 うだ。あらが方の。へた茄子があれで直つた 彌次 本よ瘡といやア新道の金箔屋の狸吉めは
 草津〜行たけが。どうしたしらん 北八 あれハ大福町に所帯を持て居らア 彌次 大福町とい

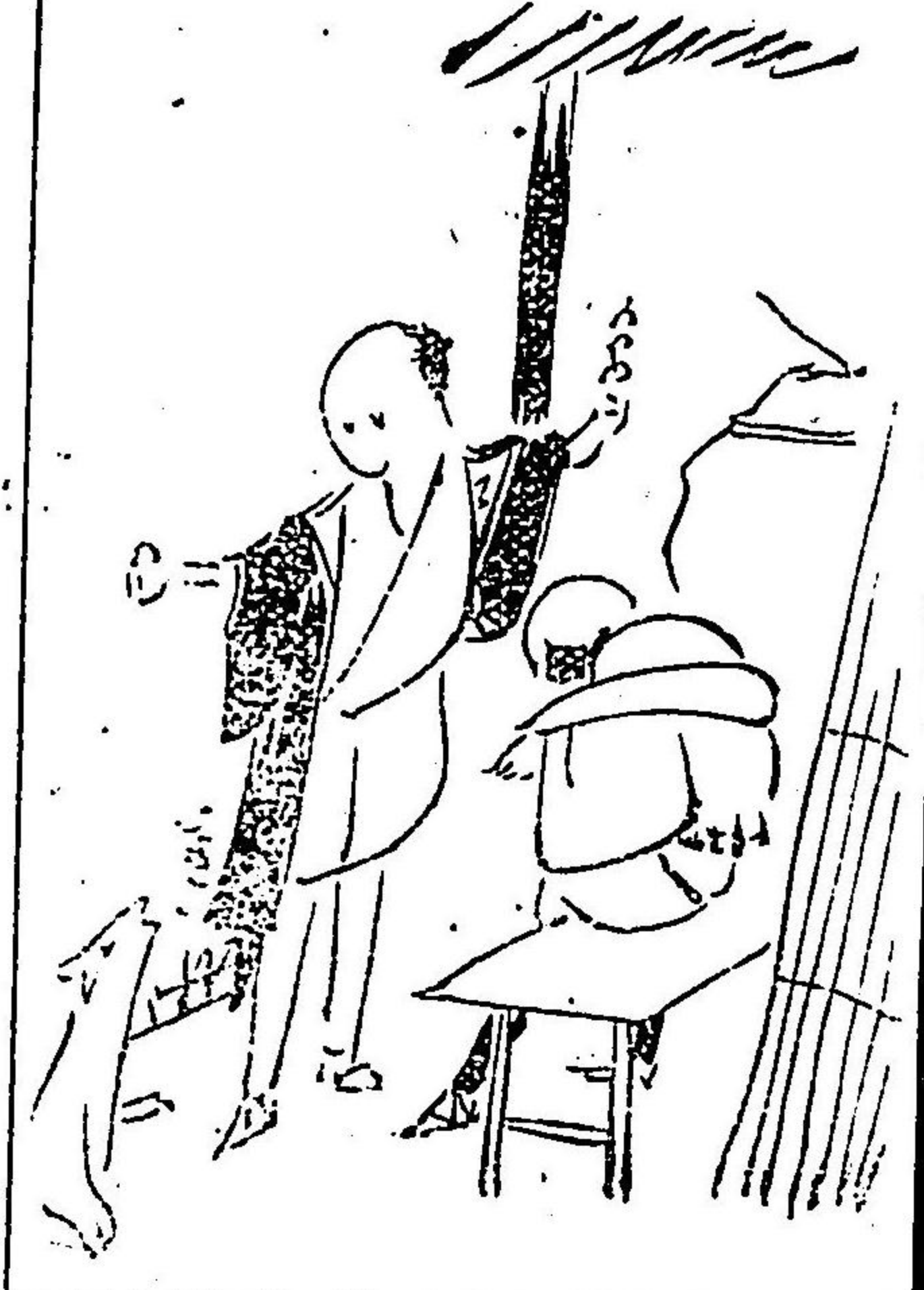
○親 仁

勘 忍 強

於 石 地

ふはとまだ 北八 大福町へいらが通りを真すぐに當座町へ出て判取町から店賃町を通過。
 地代屋敷の筭盤橋を渡るとそこが大福町だ 親仁 そんな事よりやア。江の島へ行道をおし
 へてくんさい。彌次 本にそうだつけ其地蔵様から大福町を真すぐに行くと、親仁 江の島一行
 にもそんな町か御座るか 彌次 イヤ、こりやア江戸の町だつけ 親仁 エ、此衆にお江戸の
 事ハ聞申さない。らつちもない衆だドレ先へ行って開升べい。トぶつくと、北八、
 此内バ、は團子を四五く 彌次 こいつの黒い團子だ。トいひあがらトくし取
 團子よくついているゆゑわざと火のついて 彌次 コレ手めへ。こげたやつがよからう 北
 居るをかくして北八の方へさしだして 彌次 八ドレ、ア、ッ、くくくばアさんアッ、くくくんだめにあわせたコレ團
 子に火が。くつついてア、びりくする 彌次 ハ、くくく手めへあつたかなのが。よろろ
 うとおもつて火の付て居たのをやつたは 北八 エ、いめましいベツ、 彌次 サア行ら婆さ
 んお世話 ト茶代を置爰を出て藤澤の宿へ茶や女 お休あさいやアし酔あい酒も御座りや
 アすばりくする強めしを上りやアし 馬方 旦那生た馬のどうだ。安くやりませう。馬は達
 者だ。はねる事は請合だ 籠のきかた 籠よしかの旦那戻籠だ。安く行ましやう 彌次 籠はいくらだ

○此籠
 必不進
 蓋戻籠



此ごろのひよりもさくや花の旅

出来彌次郎兵衛工こ、 棒組や旦那はかたいせ 跡棒 しつかり搦ていやしやる。もん
 より駕に乗て出かけ 此内茶屋の亭主駕か 亭主 ヲ、イ、梅澤の佐渡屋え。ちよつくり。そふいつてく
 だんて 此の名をよひなから 今度から酒をちつと交てよこし
 んさい。此中の新酒はあんまり水乃交よふがすくさい。 駕かき アイ、トがつか、彌次 コウ
 てくんさい。ト、つてくんさいヨ、ソレ何かあちたア

それがしれる物か 彌次 しれざア言てきかせよふ。是を色男が自分の帯を取て女も帯とらせると解北八 どうぎにむづかしい其心は 彌次 ハテ解た上で又解せるから。なんど奇妙か。サア〜酒を買〜 北八 まちなよ意趣げへしをやらかろう。おれがのもちつくり長い。マアかいつまんだ所かこうだ。かいら二人りが國助也。掛て是を豕が二疋犬ある拾疋と解其心は。豕二ながらさやん拾者。是又色男が自分の帯を取て女にも帯をとらせると解其心は解た上で解せるから。サア是ナアニ 彌次 ハ〜〜〜とほうもねへ長い謎だぞ 北八 とうだ彌次さんしれめへが。是を衣術のふんどしと解やせ 彌次 其心はどうかだ 北八 解ては掛〜〜二人ハ〜〜〜

〔打笑ひつゝ、あひとはなくいつの間にか曾我の
中村は八幡八幡の宮を打すき酒匂川にさしか、
りけ〜〕

我〜の二人り川越二人りにて。酒匂の川にしめてよつたり

〔此川を越行ば小田原の宿引 あちた方はお泊で御座り升か 彌次 貴様小田原かおいらア小
宿引早くも道に待受て〜〕
清水か白子屋に泊つもありだ 宿引 今晩は兩家共お泊が御座り升からどうぞ我方へお泊下さ
りませ 彌次 貴様の所のきれいか 宿引 さうで御座り升此間建なほしました新宅で御座り升

○此相
談成乎
否驛路
已謂小
田原也

彌次 坐敷は幾間有 宿引 ハイ十疊と八疊と見世が六疊で御座り升 彌次 そい風呂はいくつ有
宿引 お上と下と二ツ宛で四ツ御座り升 彌次 女は幾たり有 宿引 三人御座り升 彌次 きりやう
は 宿引 すいぶん美しう御座り升 彌次 貴様御亭主か 宿引 さやうで御座り升 彌次 神様は有や
すか 宿引 御座り升 彌次 宗旨は何だの 宿引 浄土宗 彌次 寺は近所か 宿引 イエ遠方で御座り升
彌次 葬禮は何時だ 北八 コッ彌次さんおめへもとんだ事を云もんだ 彌次 ハ〜〜〜ツイ
口がすべつた。ハ〜〜〜
〔下段々打つれて程なく小田原泊女 お泊なさいませ〜〕
立呼
る聲かしましく彌
次郎しばらく考
彌次 宿引の名物とてや泊女。口を酔くして旅人を呼ぶ

〔此宿の名物らいろ 北八 ヲヤ此の内は屋根に大ぶ凸凹の有内だ 彌次 これが名物のらいろ
ら見せ近くありて〜〕
うだ 北八 一ツ買て見よう味へかの 彌次 味へだんか。頤が落らア 北八 チャ餅かと思つたら
薬見世だな 彌次 ハ〜〜〜もうもあろうか

ういろを餅かど味くたまされて。この薬じやと苦顔する
〔やがて宿屋へつきければ亭主〕てい主 サアお泊だよばアさんお湯を取て揚る 宿女房
先へかけ出しては入りながら

○げん
あま謂
現金
○北之
叙慮甚
不穩

○可憐
彌二陷
計略

の事ふさぐだろうと。夫がだうも氣の毒だ 北八 ヲヤほんよかいつの間に約束した 彌次 そ
ん事。じよさいの有のじやねへ。さつき手めへがゆへ這入て居る時げんなまで先へお
務を渡して置たから。もう手付の口印迄やらかして置た。何ときついもんか。へ、く、く。
そう云ても色男はうるせへの、。もう寝ようか (ト手水よ立て行此内) 北八 コレ姉
さんおめへおらが連の男よ何か約束をしたじやアねへか 宿や女イ、エヲホ、。北八 笑
ひ事じやアねへ。コリヤア内しやうの事だが。あの男はおえねへ瘡かきだから。うつらぬ
ようにしなせえおめへがしよては氣の毒ぶから云てきかすが。かからずさたなしたよ (ひ
、者で眞事らしく言へば女きも) として足は年中馬瘡で何の事はねへ。乞食ばう主の背
をつぶせしよすに北八づに乗う) 宿の女 もうお休なさいませ (トそら) 立
笠を見る様に所々に油紙のふたがして有。夫に又アノ男の胡鼻のくさ。そのくせ。ひつ
こい男で。かぢり付たらはなしやアし孫へ。めんようあアノ瘡かきと云者は口中のわるく
さい者で。おいらも並んでめしを喰さへいやでならねへが。しかたおねへ。思ひ出しても
虫づが走るベツ (ト其内はや彌次郎てう) 宿の女 もうお休なさいませ (トそら) 立
敷へ這入直よ夜) 彌次 ドレふところを。あつためておいてやろふ 北八 いぬいましひ今夜の
着をかぶりて

○彌次
一刻千
秋
○立者
獨り非ズ腹
而已

ように。うまらねへ事いねへ。やけどをして貳朱金のふんだくられる其。アノ美しひや
つを側で抱て寐られてやんよ踏たりけたりな目に合は 彌次 へ、へ、かんにんさつし。今
夜ア一寸請にくからふ。ちくしよう目こたへられぬへ、く、く。コレ北八もう手めへ寝
るの。もつと起ていねへ (北八いさい) 北八 コウ、く、く 彌次 もふきそふなものだ (ト一人
てまてども) 音も無しなまなかなか先鏡をやつて棒に振かど氣が氣でいな) 宿女房 お呼
くこらへかねてむしよふやたらに手をた、きたてると宿屋のかみさん來り) 宿女房 お呼
なさいましたか 彌次 イヤおめへではわかるめへ。さつきまこ、女中にちつと頼んで置た
事が有からどふぞ鳥渡よこしてくんねへ 女房 ハイあなたの方へ出ました女の雇人で御
座り升からもう宿へ歸りました 彌次 エ、ほんにか。そんならよし 宿女房 ハイお休あ
さいませ (ト勝手) 北八ハ、く、く 彌次 べら棒め何がかりしい 北八ハ、く、く イヤ是で
地にし。もう安堵して寐ようか 彌次 勝手にしやアがれト哀なるか 彌次郎兵衛。北八が
奸計と露しらす。貳百懸しやうらめしのか洒落か無洒落かあたら夜を是非なくまろり
と。つぷしければ。彌次 おかしく又一首
ごま鹽の真からさ目を見よとてや。おまわに掛し女うらめし

彼是與じてふしたりけるよ。早くも聞ゆる遠寺の鐘。一睡の夢の覺て夜明ければ。そがて
あき出そこくは支度して立出けるに今日は名にあふ箱根八里早とろくどつま上りの
石高道をたどり行程に風まつり近く成て彌次郎兵衛

人の足に踏どた、けど箱根山。やん堅ぢある石高のみち

北八 コレく明松を買ねへかま、の名物だ 彌次 べら柿めもう旭の出る時分明松がナニ入
物か 北八 夜が明てもい、はる。おめへ買てとぼせ心宣夕夜の代りに彌次 おききアがれ 北

八ハ、くくく 又こ、に湯本の宿といふ兩側の家作。さうらびやかにして。いづれの内にも
美目よき女二三入ツ、見せ先に名物の挽物細工を商ふ。北八一軒くこのぞき見て

北八 ヲヤくあらい粉のかんばんを見るように顔と手先斗り白い女が居らア 彌次 何ぞ買
娘 おみやげお召なさいませお這入なさいやんせ 彌次 コウ姉さんそこに有物を見せあせ

ト云に娘は又外の客と合手に成て商 彌次 ハイノ、是で御ざり升か 彌次 ではふしやう
ひして居る勝手より婆アはしり出 彌次 ちの顔つきにて

彌次 夫じやアねへコウ姉さんそつちらのを見せねへ 婆 ハイく是で御ざり升か 彌次 エ、
夫でもねへ。コウ姉さんおめへの手に持てるは何だ 娘 ハイくお煙草入で御坐りやん

す 彌次 コレく此事サ時まいくらだ 娘 ハイ三百で御坐りやんす 彌次 百ばかりにしなせへ
娘 お前さんあんまりな。あなた方のお蔭でかやうに致して居り升ものを掛直は申やんせぬ
彌次 郎をじろりと見る 彌次 そんなら二百に 娘 もうちつとね召なされて下さいやせ
より忽ちのろくなりて 彌次 そんなら三百く 娘 もうちつとね召なされて下さいやせ
もるい事を笑て彌次郎が顔を又じろり見る 彌次 そんなら三百く 娘 もうちつとね御
坐りやんすヨホ、くく面どうな四百く 出して買とる 北八 サアいから、ようお出
あさいやんした 北八、くく三百の物を四百に買とはわたらしい 彌次 夫でもあしく
ねへアノ娘はよつポドおれに氣が有たと見へる 北八 をきやアおれハ、くく 彌次 夫で
も初手からおれが顔ばかり見て居たわ 北八 見て居た筈だアノ娘の眼を見たかや。殿にら
眼だハ、く (こ、にいが栗頭の) 子供四五人にて 權現様へ 檝代參 登文やつて下されチャ 北八 ナニ御
代參とは何だ 子供 こんた衆の代りに參るは 北八 ナニおいらが代りに。いづれを見ても川
家をだち身代りとする面らが有ものかろくな首は一ツもない。イヤ時又アノ鉦は何だ 彌
次 さいの河原へきたぞく

辻堂はさすがにさいの瓦屋根。それとも鬼は見えぬ極樂

○目下

書生連

往々舞

此二舞

○鼻と奥

口之距

離容易

難測量

お茶漬のさしの河原の辻堂よ。しめたやうな形の坊さん
夫より御關所を打過て

春風の手形を明て君か代の戸を、ぬ關を越る目出たさ
斯祝して峠の宿に覺びの酒汲かわしぬ。

○第二編

長明が東海道記に曰く寢に雅琴の調子有浪よ鼓の音ありと息杖の竹笛を吹ば助郷の馬太
鼓を打。疎栗毛二編の序開。ヒヤリく〜てんつく〜すつてん〜。狂言詞か。此様に候者は

○一九
口頭亦
有法螺

あ江戸の神田の八丁堀邊に住居せし彌次郎兵衛北八と申すなまけ者にて候借も我々伊勢
へ七度熊野へ三度愛宕様へ月參の大願を起し。ぶらりしらりと出かけねつから。急す候
ほどに。ゑいやくと箱根の驛に着て候。諸た。玉くしげ箱根の山の九折く。げにや久方の醜
費屋。山しよ魚の名所多き山路か。あまさけ賣親父。名物あがらしやいませ。あま酒飲まし
やいませ。北八 彌次さんちよと休やせう。ヲイ一盃くんな。親父一盃汲て出す。北八 こい
つゝ黒い〜 彌次く 黒いようてあまいは遠州濱松じやアな〜か北八 わりい〜コウおめへ

あぜ香まねへ 彌次 おいらア。いやだ。ソノ茶碗を見や施主の氣がさかねへよ。朝顔形にで
もすれぱい、に 北八 そうさは是じやア強食の香の物も奈良漬じやア有めへの親父。香のもん
の御さらねへが梅干よヲ進せ升べい。皿もある梅。北八 ヲイ〜いくらだ〜サアお世話
ト錢を拂出でてゆく。向より来る小荷駄。馬士唄。富士の頭がつんもへる。なじよにけむ
りがつんもへる三島女郎衆に。がら、打込。こがれをじやつたらつんもへたア。しよんが
白ドゥ〜 (こちらから行く馬) ヒヤア出羽宿の先生どうだ。向よりくる馬方 べら棒めお
れが先生ありア。うぬいそつ、けだア馬 ヒイン〜 (又向より来るはお大名のお國からお
づれさ見ぎつれて) ヲヤ〜ゑらい〜 北八 やんよ是は皆生た女だ奇妙〜。ナント
彌次さん。つかねへこつたが白い手拭をかむると。顔の色が白く成てとんだいきみ男に見
ねると云事だがほんとうかの 彌次 ソリヤア違あしよ 北八 よしく〜 (トたもとからさらし
とはうかむりをするを通りすがひに女中たち) 北八 ナントどうだ今の女供がいらが顔
北八の顔をのぞきて見て皆〜笑ひ通り過る) 彌次 笑つたはづさ手
を見てうれしさうな笑つて行たは。どうでも色男はちがつたもんだ。彌次 笑つたはづさ手
めへの手拭を見て木綿さな田の紐がさがつていらア 北八 ヤア〜こりやア手拭じやねへ

越中ふんどしで有た彌次で手めへ夕べ。ふろへ這入時ふんどしを袂へ入て夫ありにぬすれたいおかしの大かたけさ手水をつかつて。顔も夫で拭たうらう。またねへ男だ北八そうよ。どおりこそ。わるくさい手拭だと思つた彌次。ぜんてへ。手めへがあだじけ糸へから。あんな恥をかくな北八あぜ彌次木綿をしめるから手拭と取違へる。レおいちを見やれ。いつでも絹のふんとした北八。夫だつて家根屋が長局の替替へ行やアしめへし絹をしめる事さすめへ。エ、ま、よ旅のはぢい。かさづつてだ斯もあるうか

手拭と思てかひるふんどしへ。倍こそ恥を晒すなりけれ

夫よりかぶと石をよめる彌次郎兵衛

たがこゝに脱捨あきし兎石掛る難所に降参やして

斯て山中と云へる建場よいたる。爰は兩側に茶屋軒を並べてお休なさいまアし。下り諸白もお座りやアす。餅よアあがりやアし。いち膳飯よアあがりやアし。お休なさいやアし。彌次北八ちつと休でいから。ト茶屋へ這入る此内の庭につき立てたるへつゝ、ゐのまゐるも有り或は寐ござ赤合羽などをきてよりこそり火にあたり居。おへねへひゆうたくると表の方より竹のきせるをくわねて一人の雲助さつといはれり

○景状

穿得黄

絹幼婦

れどもだ。赤熊やどぶ八めが峠迄長持でやつたアな。ひとりの雲助。ゑいは其だぬあの手が。あんどんに。げんこは。ふんだくるべい。此長持と云ひ六百の事なり。今一人コレそりやアゑいが。コノ野郎がむじやらくを見ろへ。しつかり紋付を着がつた。酒をもをきて居る雲助。昨日小田原の甲州屋で。やらやつと一枚もらつて着たが。あんまり裾が長くてお醫者様のようなだとけつかる。丸はだの。野郎めら工面がゑい柄好お物を着やアがる。おらア此ぢう内からはだのでひりやアがら吉婆がぬかすにやア古傘をやらうから。ひつべがして着ろと。けつかる。べら棒め。野郎の猪じやアあんめへし。そんな物が着られるもんかと云たら。すんからこりよア着ろと言てゑいみしろを一枚うつくれたと思へ。其みしろを。さんによろの晩げに。畑で湯に終這入るとつて。ひん脱でおゐたら。聞きやれ。だいの着物を。がら、おまに喰れてしまつたア。いせいましひ。彌次郎北八此手やひの咄を聞てゐて。大きに死ように入旅人一人紺の木綿合羽をきて風呂敷包と。旅人十吉。あなた方はどこで御坐り升。彌次。ちら。江戸。旅人十吉。私も江戸でござり升。あなた江戸への邊でござり升。彌次。神田。旅十吉。神田には私も居ました。どうかあかた方は見申たようだ。神田へまで御座り升。彌次

○彌次
北ノ得意
可シ想フ

色の赤きいとの入たるたて纏の布子に是も帯の太織のあいびろらどべ木綿（北八）北八
のふんどしちらくど出しかけ黒きらやのきせるを手に持て坐敷へすわる
く（爰へききせい時）女中膳はひいて酒にしやせう宿女ハイ今に出し升（ト膳を引てし
きもち）宿女サア一ツ上りませ彌次（ト一口呑で下に置と）お竹（まい銚子盃肴
いで）サア一ツ上りませ彌次（ト一口呑で下に置と）お竹コリヤハアわし
にかへ（トのむまねをして北八へ）おつめおたつ殿ハアをりよげへだもし北八一ツ呑ませ
へつめわしらアはアがい呑しねへ。ヤレさて此衆がいに。おつぎやるとよ宿女お竹
さんお前ちのとまじやアみんなこりよう差て居の（トお竹のつむりに差てゐる銀ちが）お
竹コリヤハアお江戸でも流行げでの。わちらがとこの金彌さんが野尻の彦十さんに買て
もらたげエ。がいに自慢らしく内ぢうのもんじ。ひけらかすから。わしもハアあの衆の差
物をさ、ないでもくやしひから。立引すくで。からく二十四文うつちやつたアもし宿
女おつめさんお前の櫛を見なさろ（ト取に掛るを）つめおらアいやだわくく（顔を
けるをむりにとつて見れば朱塗の櫛に）宿女（はあちやアコリヤア札の辻の太郎左衛門
金ふんに抱若荷の紋がついてゐる）宿女（はあちやアコリヤア札の辻の太郎左衛門
さんの紋所だアよおつめ）しつてちやだかやア（トひつたくり櫛にて叩くまねをしてつむ
たを見てへ是の皆あつちの言詞あり皆くおかしさをかくしだんまりに）宿女（もうち
てきて居る。こ、にもいろくあれどもあまりくだくしければ略す）宿女もうち

○彌次
魂遙在
有頂天
○錢術
兩白痴
亦大持
案

べりなさいませ旅十ホンニわしは次の間へ寝やせう彌次ナニサいつしよにこけへ旅十コ
レハめいわくな宿女サアお前方も着替てきなさいまし（トよぎふとんをはこびとまを取
るど二枚折の小屏ぶにて間をし）お竹モウそべらしやりましたか。がいにさむい晩だアナ
もし彌次もつとあつちへ寄なせい。何もえん慮は終へからちつと。嘶しでもしなせへお竹
見しらがようもなア。お江戸の衆にやア。こつばすかしくてなにも。かたるべいたア
御座んなへもし彌次ナニはずかしひも気がつよいおめへもういくつだお竹わしやハアお
月さまの年だよ彌次、十三七で甘才と云とか。でへぶ。おしやれたの。お竹ヨホ、く
くわしらア此のぢう違分さアから来て。おれのとこの客衆さア。あじわうしたらよかん
べいか。なほかしお江戸の衆よやア。さがつまつて成ましない。帯のう解なさろとして。此
足さア私が上へのつけなさろ彌次ヨイ、く、く。かうか、く、く。お竹ヤレハアねづらぬ
まんだよ。そしてがいに跡へさがりやるとよ。もつと空へつん出なさろ彌次ヨット承知
く（トよぎをすつぱりかむりしぱらくむごん此内北八が相方の）早其夜も更けゆくま、
に助郷馬の鈴の音もたへて。脊戸に啼犬の遠吼。猪を追ふ鳴子の音迄吹おくる夜更の

最早其夜も明ければ寺の鐘も潮行の聲。もろ共に響渡り。求食鳥の軒近く啼渡るに皆
 ノ、眼さめて。おら出れば勝手より膳も出。夫、く、に支度する内、前女、お一人リ、どこへ
 いきなさつた。北八、ほんま十公はどうした。彌次、大かた雪隠だろう先へやらかせ。
 喰初め十吉ははやいつの間にかうらみちよりよけて行きたればい。コウ北八。アノ十吉
 くらまつてもくるはづ、あし彌次郎あたりを見廻し、ふじぎさうに。ハテがつてんのいかぬ。
 とやらア何だらふ。北八、彌次、ハテがつてんのいかぬ。アノ野郎が風呂敷包も笠もね
 へ。大かたおいらが寝て居る内立てしまつたと見へる。北八、ヤアそんなら何を無なりやア
 しねへか。見まわし。何も別條はねへか。彌次、イヤ、く、別條が有ようだ。トふところからど
 て見れば紙につ、んだやつが。彌次、ヤイ、く、北八、どうした。彌次、どうした。彌次、
 つたり、落るあけて見れば皆石ころ。彌次、ヤイ、く、北八、どうした。彌次、どうした。彌次、
 か金が石、成てしまつた。エイ、く、北八、こいつは大變、く、彌次、く、やし、今の野郎め、にす
 り替られた。コレ、女中御亭主を呼んでくん。早く、
 聞て宿の亭主ねま。今受玉、りました。儲、く、とんだ事で御ざり升。彌次、イヤ、貴様御亭主
 だの。コレすまねへぞ。あんなごまのい、に宿をかすからにやア。こなたもうはまへ
 を取たろう。なせいらにさたなしに。先へた、せた。亭主、コレ、けしからぬ。連様と存て

○孔子
 日有樂
 必不有悲
 余於彌
 次亦謂
 焉

泊たので御座い升。今朝た、しやたもさつぱりしりませぬ。大方裏道からでも、彌次、裏道
 からでもすさまじい。そんなで、行のじやアねへは。あんで。アノごまの灰を出せ、く。
 コレ、エ野郎を見、く、なつたか。お江戸でも神田の八丁堀で、とち面やの彌次郎兵衛様と云
 ちやア。おそらく。おれが近付の人に、餅しらぬ者は、糸へ。悪くふざさやアがる。と、家裏
 骨、を叩きこはして。合羽干場の地請に立の。足元のわかるい内。サアごまの灰、め、を、
 へ、出せ、ア、く、だせ、く、
 是は御難題。さりどては、お氣の毒、彌次、ナニお氣の毒
 の人丸様だ。イヤ、四斗樽様が、あ、されらア。サア、四斗樽、め、を、こ、へ、出せ、亭主、ナニ、
 とは、彌次、イヤ、ナニ、四斗樽、を、が、つて、んで、泊、る、から、に、や、ア、貴、様、も、一、ツ、穴、の、狐、だ、亭、主、
 体、な、ナニ、お、し、ら、が、四、斗、樽、を、泊、せ、せ、う、彌、次、泊、ね、へ、事、が、有、者、が、夕、べ、
 から、今、の、先、送、こ、の、内、
 に、寐、て、居、た、は、亭、主、ア、ノ、四、斗、樽、が、か、へ、彌、次、ヲ、サ、ノ、四、斗、樽、
 ン、イヤ、く、ご、ま、の、灰、だ、く、北、八、
 コ、
 レ、彌、次、さん、マ、ア、し、づ、か、に、し、ね、へ。か、は、へ、こ、う、に、御、亭、主、の、し、つ、た、事、じ、や、ア、ね、へ。
 道、迷、に、し、
 て、き、た、の、い、ま、つ、ち、が、わ、り、い、ど、う、も、し、か、た、が、ね、へ、と、あ、さ、ら、め、な、せ、へ、亭、主、
 左、様、く、是、が、私、
 ごと、の、い、へ、御、座、つ、て、の、相、待、な、ら、ぶ。お、つ、し、や、る、も、尤、も、だ、が、何、を、云、も、い、つ、し、
 へ、に、御、座、つ、た

者を申さばお前立の御鹿相と云者だ 北八 違いなし。コレ彌次さんおめへりさんでも初
 まらねへどうもしやうがねへはサ (トいれて見れば彌次郎も成やどと思たところがつ
 北八 彌次さんア飯でも喰ねへ 彌次 飯も喰ぬ。ナント北八。かうだ府中迄いけ。ちつた
 アさんだんてる。あても有から先壹文あしで出かけよう (トつかい錢の錢をあつめてやう
 にわづかのはした錢の残りたるをたより。そうくこ、を出かけ道々も心がけてさま
 の灰の行をたづぬれ共一向しれず。しやれもむだもどこゑやらたうかくとたどり
 らな) (トつかい錢の錢をあつめてやうにわづかのはした錢の残りたるをたより。そうくこ、を出かけ道々も心がけてさまの灰の行をたづぬれ共一向しれず。しやれもむだもどこゑやらたうかくとたどり)

北八 彌次さんそんなるに力を落しきさん高がこうだ
 うき沈みある世は次第不動尊いのれるかいもなき護摩の灰哉
 彌次 北八 北八 ナニサ 歸るとが有もんだ。梅杓をふつてもお伊勢様迄行てこにやア。外分がわり
 い 彌次 夫でもモウひだるくつて歩行れねへ 北八 ハテ待ささい。こ、に江戸から。とづかつ
 てきた十二銅が有から先へ行たら餅でも買て喰なせへ (トいひつ、二人ながらつゑにす
 がりうつらくとゆくと向より状



かま (エイこりやア。さつさく) 彌次 ア、くいたい。何の因果で。こんな目にをふか。
 はす (エイこりやア。さつさく) 彌次 ア、くいたい。何の因果で。こんな目にをふか。
 おらア死に度成た 北八 エ、馬鹿ア云なせへッレ馬がきたア 彌次 馬士どん。先の宿迄は。ま
 だよつぼど有かの 馬士 ナニじつきに。そまだア 彌次 いくら程有へ 馬士 たつた三里廿四五
 丁も有だんべい 彌次 ハッア、 (ト段々たどり行程に頓て釜が淵と云所にいたりてかゝる
 なれば) (ト段々たどり行程に頓て釜が淵と云所にいたりてかゝるなれば)

箱をかつ (エイさつさく) 北八 何だ。野郎
 ぎし人足 (エイさつさく) 北八 何だ。野郎
 の章駄天様を見るようよ。ひやまとのけてさや
 アがる 彌次 ア、うらやましおあんなにかける。
 いさほいだから定めてお飯もふんだんに喰だら
 う 北八 エ、おめへも乞食じみた事を云ものだ
 (御状箱) エイさつさく 北八 ソレあぶねへこつ
 ちへ寄る 人足 エイさつさく (ト通りすがりに
 次郎が小びん先へ) 彌次 アイヌ、 (人足は
 がつたりとあたる) 彌次 アイヌ、 (人足は
 いさい

名を聞てほしや小金の釜が淵。口に孝行したき故に耳

此所にて餅などど、のへ。少しは腹の虫をやらない。たがひよ力を付合咄しものして漸々沼津の驛につく。こゝにて先足を休めんと宿はづれの茶屋へ這入茶屋女 お早う御座い升
チャ。お支度でもしなさいませぬか 北八 イヤ跡の建場でうんといふほど喰て来やした(ト内両掛を人足にかつがせ供を運たる侍を國ふう大たぶさ。木綿) 茶や女 お茶上りませ侍
を片面は染たる小紋のぶつさき羽織を着たるが此茶屋へ這入) 女 何だの 茶や女 ハイ八ッでも御ざりやしよ侍 よい酒があらばちくと出しささろ 茶や
女 ハイく三十二文の上ませうかやア 侍 今すこし下直なのはなんぼじや 茶や女 廿四文
のも御座い升侍 しからば。ソノ廿四文の酒と三十二文の酒と等分に割て一合五夕斗だし
なさろ 茶や女 ハイく(ト勝手よりちろり盃を持来)侍 コリヤく此養付よつた。肴ども
の價はなんぼじや 茶や女 卅貳文で御座い升侍 こちらは茶や女 十二文侍 ム、よいくコリ
ヤ傳助わごりよも一ツ飲やれ 供傳助 テイ侍 コリヤ向ふに火を焚よるおち子供は奥田氏の
内室によく似よつた 供傳 いか様こちらの今笑ひよるおな子あぞもよいようで御坐升侍ど
れかくウ、アノ柱のぬさに。横たわつてをるおな子がよいく。けア傳助今すこしある

飲でしまへ 供傳助 テイく 勘定の致とう何はじや。コリヤく此魚どもは手はつけ無

ぞ 茶屋女

ハイく四十二文で御座い升チャ侍 ヲ、よいく

香で立) 北八 サア行ふ 彌次 アイお世話 茶屋女 ぞなたもようおいで (ト供の者に拂はせこ、を出
あがり) 先に成て色々咄し運てたどり行くにならの坂といふ所にいたり千本の松原にて北八がこじ付るうた) (ト夫より茲を立出二人
りハかの侍と跡にあり

この景色見ては休にやならの坂。いざ煙草にや千本の松

(侍此歌を聞

てかん心し) ヒヤアでけたく。お身立は江戸者だる 彌次 左様で御坐り升。私どもは夜

前の泊でどまの灰に取つかれて。大きき難儀を致し升侍 ハア夫の近頃氣の毒じや。成程

どまの灰のさしたのはいたかるふ。北八 イヤどまの灰と申は。どろ坊のことで御坐り升

侍 どろ棒とは何じや 北八 ハイ泥棒と申は盜賊の事で御坐り升侍 ハ、何か人の物を取

よる盜賊の事を泥棒と云か 彌次 左様で御座り升侍 ソノ又泥棒とどまの灰と云じやナ。成

程解せたく 北八 時に旦那へちとお願が御坐り升。私ども右の泥棒と相まして。さつぱり
路用は取られて。しまいましたから大きに難儀を致し升。府中惣參れば。いか様共致し升
が夫迄の所にこまり升。庶で材は身の差合せとやら。どうぞ是を賣どう御座り升が。お買

○可憐
彌次 覆
落不し出

ツくんな 蕎麥や ハイノ 彌次 ア、うめへノ 北八 吞ねへか ヲイノ 湯をくんな ヲツ
 トノ アツノ 口を焼けどした。あんなりあつイ。どうぞ 蕎麥をちつと。うめてもら
 いてへもんだ 北八 コレノ 若衆度々氣の毒だが 薬を吞からもう一ツ 湯をくんな 蕎麥や
 イノ 北八 コレたつぶりよ ヲツト由しかし 私しが 吞薬したじの 這入た湯でなければ。
 さかぬへから 迎もの事に 若衆したじをすこし 差てくんな ヲツトよしノ
 (ト 鯛の水吞よ
 ぶにぐうノ
 ぞ吞) サア行ふ 彌次でへぶ心が 慥に成た

今くひし 蕎麥は 富士やと 山盛に。すこし心も 浮島が原
 夫より 新田と云る 建場にいる。愛はうなぎの名物にて 家とに あをきたてるかば 焼の句
 ひに二人は 鼻の先をびこつかして

蒲焼の句ひを 嗅もうとまじや。あちら二人は うんなぎの旅

頓て 元吉原を 打すぎ 柏橋といふ所にいたる。此所より 富士の山正面に見て 裾野第一の
 絶景なり。彌次郎取あへず

餅の名の 柏橋として 旅人の。足をさすりて 休やすらん

○彌次
 貧病全
 快醫者
 應退手

○反討

斯て 吉原の驛につく。棒ばなの 茶屋女共。いづれも 黄色なる 盛ノ にお休なさいやアせ。
 酒をあがりやアし。米の飯をあがりやアし。こんにくと 葱のお吸物もおどりやアすお休
 なさいやアし 籠かき 駕よしかる 馬方 ヲイ旦那衆おアどふだ。戻りだから 安い 彌次 今迄
 乗詰よ 乗てきたから ちつと。是のらひろいやせう。よろびやせうがさいて あされらア (夫
 り此宿ハづれにやぶれあみ笠をさき) ウタイ いざノ 酒を吞をよ 借お肴は何々ぞ 頃しも 秋
 の山くさ 結纏るるかや。われもかうしおんと云は何やらん。道中になつらるまして 難儀を
 致し 升何とぞ 路錢の御合力を 願升 北八 イヤモウわつちらア。夕へごまの 灰に 路用をとら
 れて 壹文なした。どうぞもらい 溜があらばこつちへ 御合力願升 浪人 さんならコレつくな
 く (ト 早々に行過る二人もおかしき 打笑ひつ。たどり行ふ村はづれに 小屋掛けして
 とにわかになり) 観音經 妙法蓮華經 普門品 第始終 忽多聞。世間子息 大分遊興 每晚 三味線。音
 山 滅多無正 夜前 大食翌日 頭痛 八百羅利 古灰 笑止 千萬近遊 醫者 早速 御見舞 調合 煎薬 吞多良
 久多良 腹張多心 經チインノ 鼻の下。空殿の 建立お心ざしを お頼申升 北八 お經がおも
 白へから 寄進に付やせう 坊主 ハイ夫ハ 御勞お名を 記しませう 彌次 そんなら 彌次郎兵衛



五ッで二五の三文か。コレこ、はあくぞ 彌次 ヒヤアこいつは安い物だもう一ッ喰はう。コ

ト付なさい 坊主 ハイ俗名彌次郎兵衛 彌次 エ
、まだ死やアしねへはナ。坊主へイまだ死な
じやらんのかな。イヤ是へはお心ざしの戒名
を記し升 北八 ヲイそんならとけへ書てくん
な。釋の急難取つめた佛果菩提の念ソリヤ壹
文(トあげ出していき過る松原の中程に十四
五の前髪土手を崩して薬籠掛菓子など並
べて遊ぶ片手に)お休みあさいませく 北八
サア彌次さん菓子でも喰ねへか 彌次 ナト休
まう(ト土手のうすべりの上へ腰を掛) 北八
子僧此菓子はいくらづ、だ 子僧 アイ貳文ッ
、彌次五ッ喰たからいくらだ 子僧 わしはい
くらだかしりましさい 北八 そんなら。あうと

○謀反

露見財

符城腹

降

○北食

餅子僧

不食其

リヤアいくらだ 子僧 ソリヤア三文 北八 ドレくむめへく 子僧 先の錢はすんだぞ。跡の
菓子四ッ喰たから三四の七文五分かエイの五分はまけるく 彌次 イヤ餅も有な 北八 ど
れこいつの味へ此餅のいくらだな 子僧 ソリヤア五文とりよ 北八 五文ヅ、あらこうと二人
りで六ッ喰たから五六十五文ソレ還るぞ 子僧 イヤ此衆ハモウ塵劫記じやア賣ましさい五
文ッ、六ッくれなさろ 北八 ヤアくく 錢が有かしらん 子僧 こへ出なさろ一ッ二ッ三
ッ四ッ(ト五文ツ、一ッくにかぞえて。め) 彌次 こいつは大笑ひだ 北八 とんだ目にあつ
たサア行ふ(ト立上り四) 北八 アノ小僧の如才のねへ奴だ。アノ餅が。ナニ五文取物か二
文か三文の餅だろふに。高賣てしよてのそんをうめやアがつた 彌次 いまくしい今喰た
餅が。のどにつまつたゲツく(トおかしき半分子供とあなどつて) 夫より久澤の善福寺
と云へるに曾我兄弟乃石碑あるをわがとて北八
いま曾我ノ機縁を結ぶ我くいの。外ノ一家も一文もあし
富士川の渡し場にいたりて彌次郎兵衛
行水は矢をいる如く岩かどよ。あたるさいとふ藤川の船

彌次 言奇麗 事蓋滿 腹之贅

此渡しを打越ぐるに早日も西の山の端よりらつき。おのづから道急ぐ馬士唄の竹にとま
 る雀色時やうりく蒲原の宿にいたる。此宿の御本陣にお大名のお若と見へて勝手は今膳
 の出る最中。北八そとよりさしのぞきてコウ彌次さん鳥渡此風呂敷包を持っててくるな
 彌次 どうする 北八 イヤちつとの間だ (ト彌次郎に包を渡し御本陣へすつとはいり勝手
 女だんく膳を持はこび) (ト彌次郎に包を渡し御本陣へすつとはいり勝手
 大せいへとへると北八) (ト彌次郎に包を渡し御本陣へすつとはいり勝手
 八思ふさま喰てしまひ。すさまを見て手ぬぐひを廣げ腕盛たる飯を一膳やつと打明け
 手ぬぐひに引包み頓てそまぐとにげ出まごつく内彌次郎の向の軒の下にまぢたいくつ
 てし) (ト彌次郎に包を渡し御本陣へすつとはいり勝手
 北八か 北八 ナニきたねへ物か 彌次 夫だつて手ぬぐひが金玉や何かを洗つた手拭だ物
 き。ア、むねがわるい。ベック、北八、く、時に宿のすれへいつて。木賃と出よう (ト打
 した。しかしてめぬも實のねへもんだ。なぜあいらも連れていかぬエ 北八 イヤちめへにや
 アみやげをもつてきた (ト手ぬぐひに) 彌次 何だ飯か有がてへ。イヤ中々手ぬぐひがきい
 ているはへ。ア、うめへ (ト彌次郎に包を渡し御本陣へすつとはいり勝手
 きたねへ 北八 ナニきたねへ物か 彌次 夫だつて手ぬぐひが金玉や何かを洗つた手拭だ物
 き。ア、むねがわるい。ベック、北八、く、時に宿のすれへいつて。木賃と出よう (ト打

て此宿の棒ばあへ出ると彌次 コウどうぞいさな女のある内へ泊てへの 北八 ナニ木賃で
 らあたりをまごくして) (ト彌次郎に包を渡し御本陣へすつとはいり勝手
 泊内よいさもひやうたんもある物か。ハテどこだかしれねへ (トあつちこつちの内をのぞ
 の足を踏て大) 北八 アイタ、、犬 キヤン、の聲 鱒のすウし鯉のすウし 北八
 すすし屋さん。こ、らに木賃宿はねへかの すしや アイ向のとつばしの内よ 彌次 アイ世
 話 (トあしへられた) 北八 チト御免なせへ (トずつと這入見れば疊の四五疊も敷かれよう
 のしんだい。あるじは七十近き親仁。いろりのさわにわらなつて居る。じさいよて。つる
 じある。鍋に何かぐつ、煮るそばに。六部が一人順禮二人一人は六十余の親父。一人ハ
 十七八の娘おひづるときたま、あかぎれたらけの足をのばし火に) (トあつちこつちの内をのぞ
 あたりている。此家の婆々松の枝をへしおろりへくべあがら) (トあつちこつちの内をのぞ
 りませ 北八 わしらを今や泊てくんなせへ 親父 あがらしやりませ。ソレそこに水がある足
 よウゆすぎなさろ (足を洗) 北八 彌次さん見ねへい、順禮が泊て居る 彌次 ホンニ。こいつ。
 只いあかれぬ。ひだるい時よアまづい物なした (ト打笑ひ足を洗) 六部 サアは、へ来て
 あたりなさろ 北八 コウ彌次さんもつとそつちへ寄ちト (娘のそばへ割込でをわるあるじ)
 ば、サア彌次ができた皆な喰なさろ 彌次 ソレハ。あつたかでよかるう 婆バ インチこんた衆

のとじやア御座らぬ。コリヤア此衆の附だアよ順禮イヤ今日もらつた米ア。しいなぼつかしたんと有てそして半分は石ころだアのし。こりをヲ喰たら腹がおもたく成だんべい。婆六部さんののも三合ばわしやア。有だんべい。そこへ分て喰なごろ（ト此内順禮六部もて喰内。だし合の米あれば彌次郎北八たゝ見てゐる斗手）二人のお衆は定めしお江戸の衆もちなくつて煙草入の底をはたく六部の頼て喰しまい）二人のお衆は定めしお江戸の衆だろが私共ハお江戸でんこちもない目に逢たアもし彌次郎どうしなごつた六部わしがハア。此六部に成た因縁のう。語り申べいが。ヤレ諸人と云者なアはア。運が無ちやア。もち上べいにも。あんとしてうなづきやア上り申さな



私共ハア。若い時分よお江戸に居申たが其時あんでもハア。夏のどつゝさから。秋へぶつ掛て毎日く。づなく風の吹たをが有申た。其時分ハア。あんでも金もうけのウ。すべいとつて色く首さア。ひねくりまばいとどつけもないと思ひついたアもし彌次郎はての六部イヤサ箱

○殺ス猫ヲ
者、獨リ醉

屋をおつはじめ申たは。あにが重箱だアの。櫛箱だアの色々箱共を。づなく買こんで賣つもりだアもし彌次郎ハテ風が吹たによつて箱屋どのういふあんどだの六部さればさア。私共がハア思ひ付にやア。あにが扱まい日く。どひやうもない風が吹て。お江戸では。かに砂ほこりがたちアすからおのづと人さアの目眼へ砂共が吹込で眼玉のつぶれる者がたんと出来るだんべいと思つたから。そまでハア。私共が工夫のウして。せけん俄百が外よあじやうせうとはなしみんな三味のウ習はしやるだんべい。そうすると三味線屋共が繁昌して世界の猫共が打殺されべいから。そこで鼠共が。づなくおれて。あんでも世間の箱共のウ。皆あかじり亡すべいこたア目の前だアもし。コリヤハア。あんで箱屋商賣のウ。おつ初めたら賣れべいこたア違いはないと。あにがハア身上あり切箱共のウ。仕入たと思はつしやい彌次郎コリヤアい、思ひ付だ大方賣やしたらう六部イヤ一ツモ賣ましない。そこで私共ハア。是程迄に工夫のウして。せつびまうかるべいと思つた事がつ、ぼづれ申たから。しよせんハア。あじやうしてもいか無こんだ。發起のウして。六部に成申た兎角世界は思ふやうにヤア。ならないもんだアもし北八ハア感心お咄だ時に又順禮さん。

おめへはどふ云事から思ひ付て順禮にやア。出さすつた 順禮 コリヤハア私しも序よざん
 げ咄のウ。しますすべい。此娘はコリヤアムとりの孫で御ざるが。わし共はハア。かいつたこ
 んで佛縁のウ。結び申た。わしは日光の方で御ざるが。定めて夫さまだちも。咄に聞て居や
 り申ぞ。だんべいが。わし共が國などは雷が澤山で此二十年斗りも跡のとで有申たが。ふと
 夏でかく雷が鳴申て。わし共が背戸口さアへ。おつこちたと思ひなさら。そうするとハア。
 其雷殿が榎木の株つちいで。でかく尻をうち申て。疝氣がおまつたと。さわざやること
 よ。あにがそこで天竺のウへ。歸るべい事も出来ないから。わし共の内て養生のウして居
 る内。取さアのたり申さじやア。理が聞へ申さないが。其雷が私し共の娘と。がらい孫んで
 ろのウしまして。たがいよハアはあれべいよふすもおさんないから。直に其雷とのをむま
 に取たと思ひなさら。底でハア天づくの親方殿から夕立の時分の手傳てくれろとつて。夏
 中はたのまれて行やり申たが。ふと夏上がたさアへかせさに行くとして出たありけりて
 歸らぬと思ひなさる。あまつさい其時わしが娘のまつばらんでゐるし。あにがハア案じ
 をるまい事か。大かた。どこぞへをつまつて腰骨がナ。ぶんぬいて煩つてでも居るだんべ

○ 於レテ是ニ
 始テ知ニ紙
 鳴

いと思つたばかしで便聞へいにも。あてづ、ぼう也コリヤハア。あんたるこんだと思つて
 居る内友達の雷殿が来て。是のむこ殿はハア。熊野浦へまつこちて。鯨に。がら、呑れたと
 の咄しヤレ。倍悲しいまんだと娘も泣やる。わしもハア片腕のう。もがれたやうに思ひ。お
 りましたが。あんとすべい。せう事がある。そんだけにヤア娘がかみなり殿の種をおつ孕
 んだから鬼子でもうをさるべい。夫はア親雷の跡をつかせべいと。樂しんであんでも鬼
 の子を産ようにと。氏神様へ願のう掛て祈た所が因果あまたア。生れた子が此娘で御座り
 申。そこでハアわし共も力のウをととして。これ程祈たのに鬼は産せ。しかもこんをにま
 ん足な人間の子を産と云はよくくみ因果だともきりめて罪亡しにこりよをつれて順禮
 と思立たアもし。わし共何と因果な者ア無と思やア咄しよヲをるさへ。むねがつぶれ申は
 (トなみだながらに嘸す内ハヤ夜もふけ、れば) 婆バ サア皆ぞべらしやいませ内が。が
 (あるじの婆バ夫くよねござなどあてがいて) 婆バ サア皆ぞべらしやいませ内が。が
 いにせばいからわしと順禮の女の衆ハ天上へあがつて寐ますべい (ト九ツ階子を二階へ
 上る。六部の笈の内より紙帳など出しかぶる主の親父も順禮もうす) 掛て順禮の娘を連れて
 べらなる蒲團の様な物をひつぱり。いろりのはたへころけてねる) 北八 コリヤ小便が
 もるやうだ 彌次 かいらもいつしよよ行ふ (ト裏口) 彌次 ヤア順禮めぶつちめようと思つた

ふさぐのウ。小田原の泊では水風呂の底をぬいて貳朱ふんだくられ。又夕べは二階をぶんでぬらして三百をられたも。ちへがねへぞ 北八 イヤ面目しでへもねへ。しまくししが一首よんだ。

順禮の娘と思ひしのびしは。さてまそ高野六十の婆々

彌次 ハ、く夕べ戸まどひの云譯もをかしかつたが。ふんどしを鼠にひかれたとは。しひこじつげだ。イヤ夫で一ッ咄をあんじたがどうだ 北八 コリヤ面白へ聞てへの 彌次 まづこうだ夕べのよう順禮や六部と一所木賃泊をしゃした時に手めへが夜中におきて。何かまどつみややす。そうすると皆なが目を覺して。コリヤあめへ何をしなると云とてあへが云に。イヤわしはふんどしぞ。鼠にひかれやした。たしか二階の方へ引ていつた様だと云と。順禮も六部もそう云なされべ。わしも枕元又置たふんどしが見へぬイヤわしがのもの。こへ置たがない。コリヤア皆鼠に引れたもんだらう。なんでも二階へ行て見やせうと。皆連立て階子を上りやす。そうすると二階の角のほうで。三味線の音がする。イヤこいつはふしぎだと上り口からすかして見れば。鼠共が大勢寄て皆のふんどしを

廣げて見て。一疋の鼠が云には。たいらがひいてまた六部のふんどしは振うと三味線の音がするは。どうしたとだやらがつてんが行ぬと云ながら。其ふんどしを口にくわへて振て見ると成程チ、ン、チン、く、くなどとなりやす。そこで又外の鼠が云には六部のふんどしよかぎつて、三味線の音がするもふしぎだ。物はためし。おいらが引てきた順禮のふんどしをも振て見ようとききく口にくわへて振うと是もチ、ン、チン、く、くと鳴やした。こいつは妙だと。又一疋の鼠が。おれは北八とやらいふ。男のふんどしを引てきたが。コリヤア越中だから短い丈で鼓弓の音がするだらうと。くわへて振て見ば。ツ、ン、ツン、くと義太夫三味線の音がしやす。そこで鼠共が。こいつはふしぎだ六部や順禮のふんどしは。皆かわいらしい歌三味線の音がするよ。なぜ北八とやらがふんどしは義太夫三味線の音がするだらうと云と角つこの鼠がしばらく考ソリヤア其筈だはへ。ナせその筈だ。ハテ北八とやらは大かた太棹だらふよ 北八 ハ、く、く、く奇妙く (ト此咄のうち油井の宿よつ茶や女 お這入なさいやアせ。名物砂糖餅よを上りやアせしよッぱいのも御座いヤアと休なさいやアせく 彌次 エ、やかましい女ともだ

呼たつる女の聲は髪そりや。さてこそこゝの髪由井の宿
夫より由井川を打越倉澤と云る立場へつく爰は鮑螺繁の名物にて鮫人直は海より取來た
りて商ふ爰にてしばらく足を休めて

元は賣るはさぐの壺焼や。見どまろおほき倉澤の宿
夫より薩陀峠を打越たどりゆく程に俄に大雨降いだしければ。半合羽打かつき笠深く片
ぶけ。名におふ田子の浦清見が關の風景も降うづみて見る方もなく。砂道に踏込し足もあ
もげにやうやく興津の驛よいたり爰にあやしげなる茶店よ立寄北八ヲイ婆アさんソノさ
な粉をつけた團子を二三本くんあせへ。彌次 倍くくしぶりで目への顔を見たはいつも
お達者で目出度時に。此子はちいさなと見たよりかア。大きく成た姉様は達者かの 婆
わしは子供はお座んない 彌次 そんなら孫か 婆 インチ子がなけりやア孫もお座んない 彌
次 ハテノお目への孫でなけりやア儲どこのか孫で有た 婆 インチ馬士じやアお座んない
隣の駕屋の子でおざる 彌次 ハアそうか。コウあの子團子が二ツあまつたソレ喰な 駕屋子
うらアやアだ 彌次 ナゼいやだ 駕屋子 ナニ糠アつけた團子のやアだ 彌次 ナニ糠をつけた物

○奇兒
不食團子

○見不
練彌次
恋學馬

か。コリヤさあ粉だ 婆 インチわしらがとこじやア糠アつけて賣申 彌次 エ、どうりで。さ
らくすると思つた。ペッくそんなら犬にやろふコイくく 犬 わんくく 彌次 コ
レヤ。やるはあんといへ 犬 あん 彌次 ア、おしいもんだ (ト殘らず犬にやつてしまふ胸を
程になは雨はしきりに降り續きて一向しやれも。むだもいではこそた。とほ
くとあゆみあやみて程なく江尻の宿を打過けるよこ。にて雨もいれて
降くらし富士の根ぶとを打過て。江尻よ雨の霽あがりたり

雨やみたきばおのづから行かふ人の足もかるげに。からしり馬の鈴の音もいさましくシ
ヤンくく 馬方唄 よんべナア。しのんだらアエ。おさんどあア。まづいあせさねてい
たから。いよあへの飯がすぎで。つふしたア、へ引エ、此はてつばらア又ばりを。こき
やアがる。序でにうらもやらかすべしシヤアくく (先へ行馬方跡) 次郎ヤイ。にしがお
馬アだがおまだ (行馬方) コリヤア下町の酒屋のおまよ。彼所の野郎めが。がんに無上。つ
かやア、がつたんで。おまア強氣。きんにやうも清水(四)くら行て歸ると役が當つて府中
迄とつばしらかしたア。駄賃は皆んあうらが呑でしまつてから。おまに喰せせい物アあし。
丁場の脊戸につゐいておいたら。雪隠の家によ。がらく皆なくらやアがつた先へ行アノ

酒屋の女房めは。しよつばいやつよ。うらがあしして居る時分よやア飯の中へすさを交て喰しやアがつた。夫にあんだかハア。うらを見るにむせうふ字を書習への。イヤ筆盤をかぢれのと。いろくな戯言を。つきやアがつてうらをあしよの伴頭に仕ようと。いやアがつた其手を喰ものか業ざらしなドゥ〜 北八馬士どん火をかしてくんなせへ 馬方アイ、お前ちヤアお江戸だな。お江戸衆は氣がつまい。さんによ。うらが府中から江尻迄二百でのせた旦那がお江戸衆でる旦那よ。長沼迄くると其旦那が云にやア。江尻迄三百じやア安いから酒手を二百ましてやろう。其代酒はべつに。こつちから買て吞せると。小吉田の的場で。たらふく酒を振舞じやつた。夫から又云しやるにやア。コリヤ馬士。主やア一日おまを引てあゆんで草臥たろう。是からうらがあつて。にしを此おまに乘せようと云はじやる。コリヤハアあんなるこんだ。うらア乗こたアやアだど云ても聞ない旦那よ。ぜつぴうらに乗とつて。そんたい乗賃を二百やろうと梅の木立場からとうくうらさぼい乗て江尻へくると。興津迄おまあ取のたが草臥たろうから。おまあどつたぶんで駄賃やろうと又二百下さつた。あんなあゑい旦那は。めつたにやアないもんだ

(ト咄の内此馬に乗て居る旅人馬の上にてそら

○此客

馬方

謎解不

附馬士

○通馬者

いびさ(コウ)馬士ヲイ旦那あぶない。目を覺しなごろ(旅人おまあはれ)馬が埒があかぬから寝ぶけが出た。昨日三島から乗た馬はよい馬であつた。そして馬士がとんだ氣の能男よ。三島から沼津へ百五十でねをして。乗た所が馬士が云には旦那。こんる早い馬よ。乗て今に墮ようか。イヤめつたにぬねぶりもならぬぞと、心遣して居さしやるだらう。夫が氣の毒だから駄賃はモウもらい升まいといひおる。夫から三枚橋へくると。旦那は馬のくらで腰かいたまませうとどおりてお休なさい酒でもあがるさ酒手はこつちから上ませうと。馬方の方から百五十くれて。沼津へくると。先の宿迄送てあげたいが。わしが馬ははね升から外に馬は取て乗ていかしやれ。駄賃わしが進ませせうと。又百五十たゝくれたりあんな氣のよい馬士も無もんだ(ト噺の内此馬をひく)コウ〜ニア〜此噺に彌次郎北八も大蛇にけうに入り歩む共なしに府中の宿につく先傳馬町に宿をかりして夫より彌次郎がするべの方へたづね行と爰に金子のさいかくと、のひ大きにいさゝ出しかけまさんと。北八もろ共其したくをして宿の亭主をまねき(彌次 モシ御亭主わちつらア是から二丁町とやらへ見物に行てへもんだが。どつちの方だね 亭主のべかわ 安部川の方で御座り升 北八 遠いかね 亭主 爰から廿四五町バかしも有升何なら馬でも雇て上ませうか 北八こ



いつい、彌次から尻に乗て女郎買もかもしろ
 いく頓て爰より殿尻馬に打乗行程に。かの安
 部川町と云るは安部川彌勒の手前にて道筋より
 すこし引込て大門あり爰にて馬をかり廊に入て
 見に両側に軒を並べて引立るすが、さの聲賑し
 く見せつさのおもむきは東都の吉原町におほよ
 そ似たり。客とをばしさが黒き木綿に紋の付た
 る羽織おど替て手拭の先を結ずしてかぶり。お
 くりゆく茶屋の女は焼杉の駒下駄を引ずり。客
 人乃神と見へしは。多くの股引草鞋にて。いづれ
 も祖父バしよりなり。そ、り手やいに前垂掛の
 鏡あれば棒の先にもつこうちどく、り付てか
 つぎ歩行。ひやかしあり。行こふ男女の開帳参の

○田舎
冷客眞
面白

人のごとく更に風俗定まらず。又教習はいふ斗無し(向よりくる地廻りと見へてかたの鳥
 のしくき角下駄に竹の皮の鼻をすげたるをはき) 晒の手拭をいくびにかぶり往來の人に行當りて(あんだイコノ。御ぢいは眼をはたけて通
 りやアがれ。あせおれにぶつ、かつた) 跡からく(ヤイ市イあんとした。そいッへまたらし
 てやらすい) (之はへこませ) 先の相手 闘がりてツイから、行合ました勘忍ささい (ト行
 夫より此手合格) 地廻 アノ壁のきしに居る女のつらい浅間様の天の面のようだ。アリヤ
 子先をのぞき) 地廻 壁のきしに居る女のつらい浅間様の天の面のようだ。アリヤ
 立て行ア。せいのみじかい女郎だ。梶原のおまが喰た笹葉を見るように半分しかアそだ、
 ないは(今一人の) お、の内の着物はみんな七軒町の硯ぶたのようだナア (此梶原の馬が
 云は。狐がささの梶原堂の故事也又七軒町の硯ぶたと云はさじろ色に油葱の書) 彌次ナ
 である駿河細工の硯ぶたの事也着物の模様を油葱に見たて、のしやれ成べし) 壁の方
 ントどこぞへあがるふ 北八 まちなよたじかにあ、は帯分と拾目と貳朱だけあ。壁の方
 にしよふ。大方拾文目だろふ。何の暖簾は何だ信濃屋まちらが丁子屋ま、が大和屋だな。
 しかしどうして上るのだから勝手がしれぬへ (ト格子先をうろついて居る内) 北八 よしく
 サア爰にしやせう彌次さん見たてぬへ 彌次 ヲットきまつたサア上ろう (ト連立て。づ、
 入と) 是は能お出なさいました先上へ (ト二階へ案内する二人の見立た女郎を注文すると
 若者) 是は能お出なさいました先上へ (直其部屋へ連れて行あよりを見れば床の間には琴

○兩白
痴不記
三島之
敗北早
已氣取
大盡目
今亦多
此部類

も有り花も生て有給て吉原小見世の部屋御酒はどう致しませう北八酒も出して貰な若持の如しこ、酒代別に掛るとみ多若者ハイくとつて上ませうト此内彌次郎が相方。名は小笹野。上田の小袖。編褌子の帶空縮緬の打掛何れも皆紅裏也。北八が相方伊佐川。縮緬に金もうるの帶黒附と木地いろの煙草盆をひかへて。小笹野よく御坐いました。いさ州エ、見たくでもない。アノがさやアまだ煙草も入ない。ヤア小さめヤアく引彌次サアお目へ方。最とまつちへ寄なせい。若衆酒を早く若者若者畏まりました只今硯ぶたを持ち出し。お定まりの盃も夫くにしすん彌次若衆一ツ呑な若者ハイ彌次ツレ肴ト南條一若者是はハイトいたゞき替りてかひろ小さかひろアノヤ。今吉濃屋から磯次さんがおどいまして。お前に用が有め駈て来たりて

○彌出
倍奇

しい北八コノ重箱は何だ。ハ、ア阿部川の四文取か。是が貳朱の返し。記の字屋の臺と云物だの。ツ、くくト此内廊下に何かさはがし大勢の聲にてす北八そうくしい何だいさ川何でもお坐りましない。アリヤア性の悪い客衆をめつけて。連てきたのでお坐い升ヤア彌次あいつはあもしろい。アレトふす間を少し明て隣坐敷をのぞき見女郎お前此中からこつちへはなぜきまじない今一人丁字屋へばつかり御坐るから。とこ夏さんが腹ア。つ、たつも。無理じやア御坐りまじない此客人はヤレ扱わし。ハイ一昨日も昨日も来ずくと思たが。がらい。用が出来てこられなくなつたソリヤア。ハイ丁字屋へも川鍋の伯父殿の附合で行すこたア行たけれどアニハイ愛の常夏あんねへと申かいしたこたア有し。日天様掛て不味心じやアおどらあいヤア女郎はあチャ。夫でも丁字屋の花山さんに馴染で行すまたアちがひはれ坐りまし無ハ客アニハイとんだこたア無こんだが。づあくそふ云アせそとが無トしをれかへつて居るこ、の内の姉女郎名は常夏打掛を常夏彌次さんこん中から合まじないが能おどいしました客よかアきまじ無。堪忍しあさろ常夏何もかんにせずこたアお坐りまじない。わしもハイ此内での。あんねいく云は

○ 舊花
街 法律

れる女郎でお坐い升。こんなアに顔をへしつぶされちやア。はうばい衆の前へ。立す様がお坐りまし無逆もハイ。是れ切の縁なら。お前様の様な性根の悪い客衆は見せしめの爲わしがせざるを見さつしやいまし。ソレ夏菊さん先刻の剃刀を持ってお坐いまし客ヤレそりやア。おしよアどうせずと思て。どこ夏 どうせずもんか。髪を切らずにヤア (ト剃刀ヲ持てはうろたへあた) 客 ヤアレコリヤ。猪待あさろく (新造共) またずとはございまし客まをかへて) 客 ヤアレコリヤ。猪待あさろく (ちぐち) (トにげ出すを取巻で。にがさむと寄て掛つてあたまをむしりちらかす。いつたは此客) 人えけんつうよて皆付髪あれば。まげもびんも落てしまひ客のあたまをみまはして) ヤアこりやアハイ。あたまをむしり無したは (女郎み) ばあチャ。ヲホ、く 客 ヤレ笑所じやアない。コレわしはハイ丁子屋へは行きいからあたまを出してくれあさろ 常夏 わまやア。しりましない客 アレハイ。夏菊殿がかくした。サアあたま早く出しなさろ 常夏 おまい。ハイ是でも丁子屋へいかずか 客 モウいかあい 常夏 ほんとうにかヤア 客 天照皇太神宮様掛て行ない 常夏 すんなら夏菊さん出して上さつしやい升 (ト常夏のさしづにわ

たせ) 客 ヤアまだ。たら無。夏菊 モウ夫はつかし客 アニハイまだ片小びんがそみらにやア無か尋てくれなさろ 女郎 コレカ有ヤア 客 夫だ (トむしんにあたまをさぐりまはしてまげ先をよこちよにくつ付溜いきを) 客 ヤレくゑるさい目にあつた 皆々 ヲホ、く (ト是より中直りの酒に成て色) くれバ略す彌次郎北 彌次郎 何くのうらでも有やつだが。よつほど面白つた。丁度去年の春一九が中田屋の勝山にしばらくた時あんなさまで。有たどうざらし (ト此内) 若者来) モウお床に致しませうチトあつちらへ (ト北八の自分の相方の部屋へ行と其内若者) 斯て一睡の夢は覺て。あかつきの名残りをれしみ彌次郎床を起出れば北八も目を摺ながら。爰も来りて打連立ち階子をわりるよ皆々送り出て挨拶そこくひき別れ。傳馬町差て急死歸り來りければ早くも宿に朝飯の用意と、のへ膳を据るに支度あらましにして。やがて此驛と打立けるが。今もどろし道を真すぐに程無彌勤と云るにいたる。爰は名にあふ阿部川餅の名物にて。両側の茶屋いづれもきれいな花やかなり。茶や女名物餅をあがりやアし。五文どりをあがりやアし。彌次郎 ちいらアタベ貳朱が餅を喰て来たからモウ爰では食めへ北八 そうさ (ト此内阿部川の川) 日那衆お登りかな 彌次郎 ヲイ貴様何だ 川越 川越で御坐

○五文
餅金二
朱彌次
等可搗餅

り升安くやらずにお頼ん申升北八 いくらだ川越 昨日の雨で水が高いから一人前六十四
文北八 そいつは高い川越 ハレ川をまアお見なさる (ト打連て川) 彌次成程どうせいな水せ
いだコレ落すめへち川越 ナニおまいサアそつちよをつん向なさる (ト二人をかた車に乗
入) 北八 ア、南まゐだ々々々目が廻るようだ川越 しつかり。わしがあたまへ取つきみさる
ア、コレそんなにわしが。目をふさがつしやるな向ふが見へない 彌次成程深い。コレお
として下さるな川越 アニ落すもんかへ 彌次夫でも。ひよつと落したらどうする川越 ハレ
落した所が。たかでお前の流してしまわしやる分のことだ 彌次 エ、流てたまる者かイヤもう
きたぞくヤレく御くろうく (トかた車より) 彌次ソレ別に酒手が十六文ツ、川越
ハイコレハ御機嫌よう (ト川越の直に川上のも) 北八 アレ彌次さん見ねへおいらをば。ふ
かい所を渡して六十四文ツ、ふんだくりやアがつた
川越しの肩ぐるまにて我くを。深いところへ引廻したり
夫より手越の里に至るに。又もや俄雨降出てたちまち車軸を流しければ半合羽取出し打
かつぎ足を早めて程なく九子の宿に至る爰にて支度せんと茶屋へ這入北八 コウ飯を喰ふ

○蕩子
買女郎
摺身代
箸之摺
芋不足

か爰はとろ、汁の名物だノ 彌次 そうよ。モン御亭主とろ、汁は有やすか 亭主 ハイ今出さ
す 彌次 ナニ出来ねへか。しまつた 亭主 アレビツきに拵へすに。ちツと待たさる (トにはか
もむかずしてさつ) 亭主 お鍋ヤイく此いそがしひにぬによつして居るちよツくり
と、おろしか、り (トせはしく呼立るに裏口よ小言を云ひながら来るは女房と見へ。髪はおどろ
まい) (のよふにふりかふりたるが。脊中に乳香子を脊おひわらぞうりひきすり来り)
今彌太アのとこの。おばアとんと咄しよをして居たにやかましひ人だヤア 亭主 アニハイ
やかましひもんだ。コリへ。そこへ。お膳を二膳拵らへろ。エ、ソレ前垂が引ずらア 女房
前い箸のあらつたのウ。しらぞか 亭主 アニおれがしるもんか。コリヤ、イ其箸よよこせ
ヤア 女房 是かい 亭主 エ、箸でいもが。さられるもんか。摺こ木のとだハ。コリヤ儲まどつ
くな其膳へ附るのじやア無は。こ、へよこせと云ふとよ。エ、らちのあかない女だ (ト摺
を取てひろく) 女房 ソレおまい摺こ木がさかさまだ 亭主 かまうあ。おれがことより。う
ぬがソリヤ海苔がこげらア 女房 ヤレくやかましひ人だコノ又がさやア。おんあし様に
はへらア 亭主 コリヤ摺鉢をつかまへて呉ろ。エ、そうもつちやア摺られあいは。おへなぬ
ひやうたくれめだ 女房 アニこんたがひやうたくれだ 亭主 イヤ此あまア (ト摺こ木で一ツ
くらはせると女

○夫婦

霧論却

摺多少

錢一

○遭二川

留二兩個

暫一振一降

藤枝一

房やツき)此の野郎めは(ト摺鉢を取てなぐるとそまら)亭主 ヒヤアうぬ(ト樽こ木をふり
と成て)しがとろ、汗にすべり)女房 こんたにまけて居るもんか(トつかみか、りしが。是もとろ
ていつさりとどころぶ)様かけて)ヤレチャ又見たくでも無ひいさかひか。マアしづまりなさろ(ト
来たり)コリヤハイあんたるこんだ(ト三人がからだ中とろ、だらけにつるくしてあ)向ふのかみ
るんで)彌次 こいつははじまらねへ先へ行くか(トおかしさをこら)北八 とんだ手やひだ。アノと
ろ、汗で一首よみやした

喧嘩する夫婦は口を尖らして。驚とろ、にすべりこそすれ

夫より宇津の山に差掛りたるに。雨は次第に篠を亂し、鶴の細道心ぼそくも。杖を力に十圓
子の茶屋ちかく成て。彌次郎思はず、阪道にすべりころひければ

降しきる雨やあられの十圓子。ころげて腰を宇津の山道
(岡部の宿の)お泊で御坐ますか 彌次 イヤわつちらア今日川を越さにやアあらねへ 宿引大
宿引待受て)井川は留まりました 北八 南無さん川がつかへやしたか 宿引 さやうで御坐い升。先へ出
なさッてもお大名が五ッ頭ら島田と藤枝にお泊で御坐る升からあるた方のお宿へ御坐り

ませぬ。先岡部へお泊るさいませ 彌次 そんならそうしようか 北八 お目へ何屋だ 宿引 相良
屋と申升。直にお供致しませう(ト打連ていそぎ行ほどに早くも大寺河原の)
豆腐なる岡部の宿につきてけり。足に出来たる豆をつぶして

(先此驛に宿をとりて川の明までし)
ばらく旅のつわれをぞやすめける)

○第三編

名にしやふ遠江灘。浪たいらかに街道の並松。技をならさず。往來の旅人互に道を讓合泰
平を唄ふ。つゝ、馬の小室節置に宿場人足其町場を争はず。雲助駄賃をゆすらずして。盲
人おのづから獨行し。女同士の道連。ゆけ參の童迄盜賊かどわかしの愁にありす。かゝる
有難き御代よこそ東西に走り南北に遊行する雲水のたのしみ。ゑも云はれず。爰よかの彌
次郎兵衛北八は太井川の川支よて岡部の宿に滯留せしが。今朝御状箱渡り。一番越も濟た
る由。聞とひとしく。そあくに支度して旅籠屋を出立けるに早諸家の同勢往來の貴賤櫛
のはき引がごとく問屋駕ちちをかけり。小荷駄馬飛で走る街道の賑ひいさましく。二人
も共にうかれたどりの程よ朝比奈川を打越八幡鬼島を過白子町に至る爰は建場にて雨

○起頭
燦然綴
得昇平
之象一

側の茶屋女お茶ア参るの。一膳飯よを参るはア。お休なさいまアしく、(馬士)うらがあ
 長松のか、アハ。たこよ。チアおぜさ蜻たとおもしゆるへ。八間真中に足だらけ。しよんが
 ヘドウく馬ヒインく馬方旦那しゆお馬アいらなにか二百だが安いもんだア。なんな
 ら銭さへくんなさりやア。たゞでも行ず北八エ、二百出しやア夜の馬に乗アくそた
 れめが馬方ヤイクそつたれたア。あんだイ。うらがいつくそく馬ヒ、ヒンく彌次ナ
 ントちよつぼり香で行か。コウ姉さんい、酒があらばちつと斗出してくんな(ト茶屋)茶
 屋の女ハイかんをして上ケボかヤア彌次そうさ時に肴何有やす亭主アイねぶかさま
 ぐろの煮たの斗かし北八イヤねぎまの風呂吹ッレよかるふ亭主インテ風呂吹じやア御座
 らない。たんだ醬油で煮たのだアのし(ト云つてうし盃を持出)彌次バ、ア葱まじ云か
 ら江戸でするようだと思つたらコリヤア雉子焼を煮たのだなよし北八初めようヲッ
 トくくイヤまの肴いおだ佛だぜ。コリヤ昨日のまぐろだな亭主インテハイ昨日の魚
 じやア御坐らないの彌次それでもさつぱり食ぬく亭主ハアさんによろのがわるかア一
 昨日のを進ませうか。そんだいにやア酔たア請合だ申北八エ、酔てたまる物かそし

て此酒は半分水だ。メツく時にいくらだ
 の亭主ハイ肴が六十四文酒が廿八文彌次味
 くねへ替りに高ひもんど。サア行ふと錢を
 拂ひ爰を立出早くも錢が淵と云ところにい
 たり例のそきの道あれば彌次郎兵衛取あへ
 す

は、元の鞍の鐘の淵なれど
 踏またがりく通られもせず
 夫より平島口田中を打過藤枝の宿近く成て
 街道の松の木の間よ見わたるは
 これ紫さきの藤枝の宿

(此宿の入口よて風呂敷包。ちよいとかたに
 掛たる田舎の親父馬のはねたるにをどろ
 き逃るひやうしに北八へつき當ると北八水
 たまの中へころげて大きにあつくかりおき



上りて田舎者き北八 コレ親父の眼が見えぬへか寒鳥の黒焼でもくらやアがれ 親父 コリ
 ひつどらへて ヤハイ御免なさい 北八 ヤイ御免なさいじやア。濟まぬいはへ。コレ野郎は小粒ても。きア
 つと云から金の虎魚をにらんで産湯から水道の水をあびた男だ親父 インチ。ハイ水をあ
 びたならようござるが。そなたのこけた所はお馬の小便溜りだア 北八 エ、其小便の溜つ
 た。所へあぜ。つ、こかしやアがつたへ 親仁 そりや。ハイわしも。がらひお馬につ、ばねら
 れて。そなたに行やつたのだどうもせずことがない。かんにさつしやい 北八 何だ堪忍しろ
 いやだはへ。ほんのこつたが。大江山の親分が鐵棒引で渡りにこようが。石尊様か猪のく
 まの似づらをか、せた灯燈で路次口から溝板の上へ。はいか、んで。さても。さかねへと
 云ちやア。久米の平内を居さるそくに。やつたよりかア。又びつくともせぬ奴様だア 親仁
 ヲリヤア。ハイおにか七六かしひまどを云つしやるが。わしらにやア。ハイがひもくにし
 れ申さぬ。おしも。ハイ此近在の長田村ぢやア名主役も勤た家筋だんで。今でもお地頭様
 の年頭にやア。上席のウセる男だ。あにもがいに心れなく雑言のウしめさるこたア御坐ん
 ないやア 北八 エ、悪く。しやれらア。尻がかい、はへ頭の缺でもひろませてやろふか 親仁

エ、そなたア。ゴない人だヤア。わしにもハイ荒神様がついてゐすよのいにおとがひのウ。
 た、かしやんな 北八 エ、此摺こ木め（トくらはせに掛る彌次郎兵衛）彌次 北八もう了節し
 ろへ。親父お目へが。ゼンてへ鹿相しちがら氣がつエ、もういひから行させへ（ト北八を
 内親仁は面ふくらかしふせ）
 うくに行過ると彌次郎
 頭に乗て北八に今た、かれし。藥罐あたまたの親父へこんだ

打笑ひつ、瀬戸川を打越夫より志多村大木の橋を渡り瀬戸と云所にいたる。爰に建場よ
 て染飯の名物なれば

焼物の名もあう瀬戸の名物。倍こそ米も染附にして

斯て此町はづれの茶屋に先刻の田舎親父休むたりけるが二人を見つけて呼かけ親父 コレ
 く先刻にやア無禮のウしました。おしもハイ有ようは一盃否だ元氣で。ぶなひ事も云申
 したが。其方衆が了簡のウしてくれさつから。へこたらずに歸村のウしますは。マアあ
 んでも禮に酒ウ一ツ進ませませう。こ、へ寄らつしやわまし 彌次 ナニわつちら酒も香で來
 やした親父 エレチャア折角わしが思ひだアのし。せつひ一ツよからきにコリヤく御亭

○瘦我
漫兩個
之喉已
愚微々

主味よひ酒ウ出さつしやのまし北八 イヤお心ざしは忝なひがサア彌次さん行ふ親父ハア
コリアじやらのこわる人だヤア。じつきに。やらすに。ちよつくり寄てくれされやア(トむ
彌次郎北八が手を取て引摺込二人もな)彌次 ゑいん。北八一盃やらかそふか。然し親父さ
る口ゆる酒と聞て少し心ひかされて
んお目への御ちそうじやア氣の毒だ親父 ハテコリヤ。よいと云のに御亭のく肴アじよ
うにつん出してくれさい。時にコリヤハイ愛はわんまり端つぽだ奥坐敷へ行ずかヤア 茶
や女 サアあつちイ御坐らしやのまし (ト出し掛た銚子盃を奥へ持て行と三人も中庭から
衛) サア親父さん初めあせへ 親父 アイすんだら毒見のウしませす。ヲト、くよからず
さて先若いのへ進ませせう 北八 アイわつちやア酒よりかア腹がへつた 親父 アニ腹がへつ
た。ソリヤア飯を喰つしやい。じつきによくある 北八 イヤ先酒にしよう。ヲット有升く
時に此吸物は何だ。た、み鯛のせんば煮か大うたこの跡じやアかぼちやの胡麻汁か。薩摩
芋のよごしか出るだらう 彌次 サア悪く云ぜ。コレ此海老を見や。こをばぬかへつた所はど
う天井の天人と云身がある 北八 イヤ豊後ぶしの。とがアいなア、引といふ所も有やす
ハイくく時に親父さん上やせう親父 インチ。へさいましやう今肴がこすに。コリヤあ



ん姉く先刻からハイ。へし折るほど腕をた
くにあせ肴アつん出さない 茶やの女 ハイ
く只今上げずに(トようくと大平)彌次や
らやつと持て来た。平は何だア玉子のぶはく
か 彌次 をそひ等だ今産のを待て居たと見へた
北八 こいつは無難だ奇妙々々 親父 たんと呑で
くれさつしやいそんたア私が爲にやア。命の
親だ。よく先刻ヤア了簡のウしてくれさつた
のし北八 イヤわつちもツイ虫の居所が悪くつ
て云通しました眞平御免彌次 そこの旦那殿も
野暮じやアねへ。若こいつりどうせ味噌へつ
たり焼せうがといふ男だから。しやう度はあ
しよ (トたゞ呑酒ゆへつゐせうだらく關雲
に引掛る此内勝手よりも色々持ち出し

○悪口
鴉之黒
露之報
見何房
々々之
目

膳も出て彌次郎北八すこしは氣の毒ながら北八 ヨウ彌次さん目へこの割合を。おれ
是も喰てしもうと親父小便に立て行跡にて) 北八 ね前どうてきにやらかしたせ 彌
によこしなせへ。おゐらがアノ親父をむじめられたれこそ。ね前どうてきにやらかしたせ 彌
次 おきやアがれそう云ても。万ざらじやアねへ。アノ親父のこぬうち後に吞分もやらかそ
う 北八 おらア此茶碗についでくん。ヨットきたくきたさのくく。讃岐の金毘羅高
が高瀬の船頭の子じや者。おさへてどうするジャンくく。彌次 エ、引山に切ころはし
た松の木丸太の様でも妻と定めたら。萬ざらよくもあるまゐし。やとさのせく面しろ
へく時に此親仁の。べら作りはだうした 北八 ホンニ長る雪隠だ。モシ女中爰に居た爹様
ハ何所へ行たの 茶や女 たしか外ての方へ 彌次 ハテノこいつ何かへんちきだりへ (トまで
て共此親父何所へ行たか一向に歸) 北八 モシ女中今の親父が爰の拂をして行たか 茶や女
らず雪隠をさがせ共行方しれず 彌次 ヤアくく 北八 一べい赤飯にかきやアがつたな。追駈
イ、エまだいた、さませぬ 彌次 ヤアくく 北八 一べい赤飯にかきやアがつたな。追駈
てぶちのめそふ (トとんで出たれ共どつちへ行しやら一向雲をつかむが如く殊に親父は)
彌次三どうもしれぬいとんだ目にあつた 彌次 仕方が終へ手めへ拂をしや。アノ親父めが
くやしん棒で。手前に意趣返しをしたのだはな 北八 それでもナニおれ斗りかぶるもん

○思之苦
厄拂一宜
諦

いまくしい折角酔た酒が皆な。さめてしまつた 彌次 次郎殿の犬と大郎殿の犬と皆を醒
てしまつたの 北八 エ、。しやれなさんな其所じやアねへ。マア何もしろいくらだね 亭主ハ
イ、く九百長五十で御坐り升 北八 かたりに合たと思つて往生して拂ひやせう。云ア云程
ちゑのねへ咄だ 彌次 そう云てもあつな親父だ、事をしやアがつたコウ北八手めへの顔
で一首うかんだ
御馳走と思ひの外の始末にて。腹もふくれた顔もふくれた
北八 へ、。どう腹な生馬の眼を扱やアがつた
有かたい忝じけないと禮云て。一盃たべし酒の御馳走
斯よみて北八も笑ひをもよほし田舎者とあなどりて。とんだ意趣返しを。しられたるもお
かしく。爰を出てゆく程に大井川の手前なる島田の驛に至りけるに川越共出向て旦那衆
川ア頼ん升 彌次 貴様川越か二人いくらで越す 川越 ハイ今朝がけに明た川だんて。肩ぐる
まじやアあぶん無蓮臺でやらすに。お二人で八百下さるませ 彌次 とはうもねへ越後新潟
じやアあんめゐし。八百よこせもすさまじい川越すんだらいくら下さるヤア 彌次 何程も

摺木もいらねへ。おいらがじきに越は川越チ、川流れやア貳百附て寺へやるから。何なら
 そりさつしやる流た方が安くあがらアハ、くくく 彌次ばか 馬鹿アぬかせ問屋へ掛つてお越
 るさるは(トい、捨て)彌次 ナント北八あいつらよ。からからが面どらだからいつそのと
 問屋へ掛つて越ふ。手目への脇差を借しやれ 北八 奇せどうする 彌次 侍に成は(北八が脇差を
 れが脇差の引はだを跡の方へ延し)彌次 ナント出来合のお侍よく似合たろう。此風呂敷包
 を手めへいつしよよ持て供に成てきや 北八 こいつは大笑ひだハ、くくく (ト彌次
 が荷物を一しよにして。北八肩に引掛やがて川)コンリヤ問屋共身共大切な主用で罷通る
 問屋よ至り彌次郎兵衛お國詞のこわいろにて) 彌次 ナニ同勢な 問屋
 川越入足を頼むぞ 問屋 ハイかしてまりました御同勢はおいくたり 彌次 ナニ同勢な 問屋
 ようで御坐り升。旦那はお駕か馬かお荷物は何駄ほど御坐り升 彌次 本馬が三疋。駄荷が
 都合十五駄程ありあるが。道中邪魔だから江戸表にふるてきた。其替り身共駕の六尺が八
 人そこへ記めさる 問屋 ハイお侍衆は 彌次 侍共が十二人鎗持抜箱ぞうり取。よいかく合
 羽籠竹馬のがう上下三十人余りじや 問屋 ハイく其御同勢は何所にかり升 彌次 イヤサ江
 戸表出立の節は残りす召連たが。途中で追く麻疹をいたしあるから宿くへ残り置た。

そこで只今、川を越ふといふ同勢は上下合せてたつた二人じや、越越に致さう何ぼじや 問
 屋 ハイお二人あら蓮臺で四百八十文で御座り升 彌次 夫は高直じや。ちと受けやれ 問屋
 、此川の賃錢にせけると云はないヤア。馬鹿云すと早く行がよからずは 彌次 イヤ侍に向
 つて馬鹿云なと何じや 問屋 ハ、くく
 がいに頭ないお侍だヤア 彌次 ふいつ武士
 を嘲弄しある。ふと、千萬元 問屋 こん
 た武士が刀の小尻を見さつしやい (ト云は
 次郎兵衛ふり歸りしろを見れば刀の小尻
 につかへて引はだ斗の所二ツに折てゐる皆
 次郎面目無くしよげ反てだんまり) 問や刀
 の折たのを差武士が何所よ有者だ。まんだ
 衆問屋をかたりに来たなとんでい。ハイ



濟せないぞ 彌次 イヤ身共ハ三保の谷四郎國後の末孫だから。夫で刀の折たのを差あるて
 問屋 たわこと云とく、し揚るぞ 北八 コウ彌次さんお納らねへ早く行ふ (ト手を取て引つ
 られ彌次郎兵衛

○三保
 谷子孫
 被壓頭
 根子

夫をしほにとこ問屋ハ、くくくとほうもあゝい氣違だ彌次ツイ。やりそこ成たいまゝくそくけに出す

出来合の生くら武士の印とて。刀の先の折てはづかし

此狂歌に双方大笑ひとり。彌次郎兵衛北八爰をのがれ。いそ川端に至り見るに往來の貴賤すき間もなく此川の先を争ひ越行中に二人も直段取極めて蓮臺に打乗見れば。大井川の水さか番。目もくらむ。今や命をも捨ふんと思ふ程の恐じき。壁ゆるに物なく。まことや東海第一の大河。水勢早く石流て。渡るになやむ。難所ながら。程なく打越て蓮臺をおり立嬉しさいわん方なし

蓮臺に乗しはけつく地獄にて。おりのた所がやんの極樂

期打興じて。金谷の宿に至。兩側の茶屋女お休あさいまアしく。駕やもどり駕乗ていじや御坐い北八コウ彌次さん駕わどうだ。彌次イヤ氣がない手めへ乗なら乗ていかつし北八そんなら日坂迄乗るか。ト駕の直段極て打乗たるに折節雨降り出しければ。古ござ一枚駕(二三)ふだ樂や岸打浪の御熊の。アイね駕の旦那文下さい北八附あく。順禮御道中御

繁昌の旦那此中へたつた一文北八エ、附なと云ふべら棒め順禮夫にべら棒が入んか。そつちがべら棒だ北八コノ乞食めが(トりまひはづみいかに。しりん駕の底がす)アイ

タ、くくく順禮ハ、くくく駕やエレく怪我アさつしやりませぬか北八コレ手めへたちやア。なぜこんな駕に乗た駕屋ゆるさつしやりませ。あんどせろもんで北八何所ぞへ行て。い、駕をかりて來さつし駕屋こかあ阪中で。かりす所が御坐らない。イヤよかどがある棒組。主のへことばづせ棒組アせ。どうせる駕やハテあれがせるとがある見され

分のふんどしをはずし棒組のふんどしと二タ)ヤア乗ていじや御坐れ北八とんだ事をす筋にてござの上からかこのどう中をく、りて)ハア乗ていじや御坐れ北八とんだ事をす。是で乗らざるもんか。駕屋ハテ外にせる事がある。そんだいにやア。寝ぶ度ならしやつ

ても此へこで落す様が御坐らあふ不肖して乗つしやませ(ト氣の毒そらに云。北八もば彌次)ハ、くくく白のふんどしで駕胴中をく、つた所は。しつかいお屋敷の葬禮郎兵衛)と云物だ北八エ、いまくしいそんな事を云なさんな彌次ハ、ア駕の内物物を云から佛

でもねへ。こいつ聞へた科人だや北八エ、猶いまくしい。おらアもうありて行り駕をかりて爰迄の貸錢を拂駕を歸したどり行よ。雨は。しきりに降出しければ阪道すべりてやうくと佐夜の中山建場に至。爰は名にあふ餡の餅の名物にて白餡餅に水飴をく

るみてい出す。此二人酒呑なればやうやく一ツ二ツ喰ける内雨つよくなりたるに

こゝ元の名物ながら。我くは。降出す雨の餅食ましたり

傳へ聞無間の鐘の其寺に名のみ残りて今はなしと

此寺に無間の鐘もつきて無し今は晦日に嘘やつくらん

夫より此坂を下り日坂の驛に至。頃雨の。次第につよく成て今の一と足も行れず。あたり

も見へわかぬ程。しきりに降くらしければ。或旅籠屋の。軒また、すむ彌次 いまくしい

どうてきに降のく。北八 花屋の柳じやア有めへし。いつ迄人の門に立ても居られめへ。ナ

ント彌次さん大井川は越すし最此宿に泊らうじやアねへか 彌次 ナニ。どんだ事と云。まだ

八ッにやア成めへ今から泊てつまるものか 宿や婆々此宿じやア。行れましむい。泊らしや

りませ 北八 イヤありや泊たく成た。彌次さん見ねへ奥にたぼが大分泊て居る 彌次 ヲヤド

レくこいつ咄せるはへ 旅籠は、サア。おまいち泊らしやりませ 彌次 そうじやせふ(トこ

て彌次郎北八。足を洗ひ)彌次 コレく女中素湯がわらば一盃くん宿女ハイく。いん

直に奥の次の間へとふる) 彌次 コレく女中素湯がわらば一盃くん宿女ハイく。いん

ま上下す 北八 飛龍づが聞てあされらア 宿女 ハイおさゆ 彌次 よしく北八昨日の薬種をく

りやな北八何だ。しんりいめんらん丹か待あよ蟻の戸渡りから。ひねり出してやるん 彌次

エ、馬鹿ア云やんな。腹がいたくてならぬ 北八 ソリヤアおめへ。ないらのねまつたのだ。

豆を喰やアをる 彌次 エと悪敷しやれずど。早く出してくれろへ 北八 そんなら真目目に。

ソレ田町の反魂丹手を出しな 彌次 ニツ斗りくりやれ。コリくくコリヤ胡椒だアハ、。

辛いく 北八 ハ、くく待なよ。イヤ最ない。イヤこゝに錦袋圓が有ッレよしの 彌次 唐

紙の影でまつくらだ(ト包紙を明て)ガリくくく。ア、又向を喰しやアがつたベッ

く 北八 ドレ見せな。イヤア是の観音様だ 彌次 ほんよ観音様の頭アかみくだいて仕舞た

ハ、くく 宿女 御膳を上げませう 北八 イヤ三膳喰ア澤山だ 彌次 能口を叩く男だ。やか

ましひ。だまつてしやべれ 北八 静にさわけが。あされらア(ト此内膳も出て色く) 彌次 時

に女中奥の客人は女斗りだが。ありやア何だ 宿女 皆な巫女で御座りませア 北八 ナニ巫女

だコリヤ面白へ。ちと生口を寄て貰ひてへもんだ 彌次 もうおそかるふ。七ツからの寄ぬと

云とだ 宿女 ナニまんだ八ッ少し過で御座りませア 彌次 そんなら聞て見てくんあ。おいら

が山の神を寄て貰をふ 北八 コリヤおかしい 宿女 いんま聞て上ふすに(ト此内。膳も濟。女

奥の間へ行。かの



て。今では石塔も堀の下の石がけと成たれば。
 折ふし犬が小便を。しがける斗りついに。水一
 ツ手向られた事ハ御座らぬ。ほんよ長死をす
 れバ色くなめにあい升ぞや 彌次 もつどもだ
 く 巫女 其つらい目に合あがら。草葉の影で
 其方の事を片時わすれぬ。どうぞ其方も早く
 冥途へきて下され。やがてわしが向に來ませ
 うか 彌次 ヤアレどんだ事を云遠ひ所を。かゝ
 らず向に來るにやアおよばぬ 巫女 そんならわ
 しが願をかなへて下され 彌次 ヲ、何成とく
 巫女 此此子殿へお錢をたんとやらつしやりま
 せ 彌次 ヲ、やるともく 巫女 ア、名残おしや。
 かたりたひ事。とひたい事敷かぎりはつきせ

ねごめい途の使しげ、れば彌陀の浄土へ(トうつむきて巫女は)彌次 コレハ御苦勞で。御
 座り升た(ト鳥目二百文ばかり)北八 くら間の取を。どうくあかるみへ。ぶちまけて仕
 廻たハ、くく 時に彌次さんおめへ。とんだふさぐの。ナント一盃呑じやねへか 彌次 そ
 れもよかるふ(ト手を叩き女をよ)巫女 今日はお前様方ア何所からお出あさりました。彌
 次 アイ岡部から來やした 巫女 夫ハた早ようお座りました 彌次 ナニのつちらア歩行事ア章
 駄天様さ。サアト云と十四五里宛ハ歩行さやす 北八 其代り跡で十日程は役立やせぬハ
 くく(此内酒と肴)彌次 ちと上りませぬか 巫女 わたしハ一向下さりませぬ 北八 あち
 らのお方はどうだ 巫女 か、さんお出サア。お釜さんもお來あさいまし 北八 ハ、アおめへ
 のおふくろか。エ、こいつはめつたなこたア。云れぬはア先上やせう(ト是より酒盛ど
 さへつ此巫女共思ひの外のかひぬけにて。いくら肴でもしやアくとして居る彌次郎兵
 衛北八は大きに酔が廻り色くおかしきしやれあれ共餘りくだくしけれバ略す北八巻
 にて)何とおふくろさん今夜おめへのお娘を引つちに貸てくんなせへ 彌次 イヤおれが
 りるつもりだ 北八 どんだ事を云。お前こそ今宵は精進でもしてやりなせへ。可愛そりに死
 だ喉衆が。あれ程に思てどうぞ早めい途へこい。頓て向にこようと深切に云じやアねへか

○彌次
無一言

彌次 ヤレ夫を云てくれるを向ひにこられてたまるものか 北八 夫だからお目へ由なサア
 おふくろ此方よきまつた(ト巫女の娘にしあたれ) 巫女 およしなさりませ 巫女のば、娘が。
 いやならまたしてハ 北八 最ふこうなつちやア。だれかれの見さかひない(ト夢中に成て
 勝手より膳も出て色々爰もあれ共略す。早酒もふさまり彌次郎北八も次の間に歸り日
 が暮るやいなや床をとらせ寝かける奥の間も草臥にやもう寝かける様子北八は隣にて
 何でも巫女の薪造めが。いちこつちのはし。寐た様子だ後遺掛てやるふ。彌次さんお目
 へ寐たふりなどは通り者だぜ 彌次 おきやアがれ。おれがしめるは 北八 氣のつへ、大笑だ
(ト云つ、兩人ながら) すでに夜も五ッ過四ッ廻りの柏子木の音枕に響き所に明日の支
 つと夜着をかぶりぬる(ト云つ、兩人ながら) すでに夜も五ッ過四ッ廻りの柏子木の音枕に響き所に明日の支
 度の味増指音もやみられバ只犬の遠吠のき聞へて物淋びしくふけ渡る(北八時分ハ好
 出。おくの間を規へば。行燈さへて。まつくら開。そろくと思ひ込。さぐり廻してかの
 巫女のふところへよじり込と思ひの外此巫女の方よりものを云す北八が手を取て引摺
 寄る。北八こいつは難有と其ま、夜着をすつぽり手枕のころびねに假のちぎりをこめし
 跡ハ。二人共前後もしらす鼻つき合せてぐつとぬ入。彌次郎兵衛一トぬ入して目をさま
 し。をき) 最ふ何時だしらぬ手水に行ふ。コリア真つくらで方角がしれぬ(ト小便に行ふ
 あがりて) 最ふ何時だしらぬ手水に行ふ。コリア真つくらで方角がしれぬ(ト小便に行ふ
 の間へ這込北八が先を越たとは露しらすさぐり寄て夜着の上から。もたれか、りくらが
 り紛れにかの巫女と思ひ北八がムニヤクいふ口びるをねぶり廻し。わんぐりとかみ附
 く北八きもをつ) アイタ、くくく 彌次 北八か 北八 彌次三かエ、きたねへッく(此聲
 ぶし目を覺し)

○北八
一生之
榮譽死
當無恨

○彌次
尙振此
婦々之
醜可想
見

八と寝て居る巫女も目を覺して) コリヤハイおまいちは何ださうくしい静にしなさろ。娘が目を覺せに
(ト云聲を婆々の巫女北八は二度びつくりこいつ取違たかいまくしいト這出) お前此
(こそく)と次の間へ逃歸る。彌次郎も逃んとするを巫女手を取て引づりながら) お前此
 年寄をなぐさんで今逃るとは御座らぬ 彌次 イヤ人違へたおれではない 婆々ア インチをう
 云いしやますな。わし共はよんちとを。商賈にやアとませぬぞ。旅人衆の例でもして。ちつ
 と斗しの心附を貰ふが仕渡り。はらさんくなくさんで只逃るとはあつかまし夜の明
 る迄わしのふところをねやしやませ 彌次 是はめいわくな。ヤイ北八く 婆バ アレハイ大
 きな聲をさしやい升な 彌次 去でもおれいしらぬエ、北八めがとんだ目に合しやアがる
(トやうくひりに引はなして逃んとすれバ又とりつくを。つきた)
(をして。がたびしとけちらかしそうく次の間へはいこみながら)
 巫女ぞと思て忍び北八に。口を寄るとぞくやしき
 しの、めまだき驛路のいそがしげに。引つる、朝出の馬の嘶に旅勞れの目をこすりなが
 ら。彌次郎北八おき出て支度する内。相宿の巫女が顔ふくらかしむるもあかしく。爰を立
 いで古宮畧田の八幡を打過。右に。しうとの畑。嫁の田といへる。見ゆれば彌次郎兵衛
 干からびししうとの畑に引替て。水澤山の嫁が田ぞよき
 夫より 堀井川と云所に至りけるに。昨日の雨つよくして。橋落けるにや。行かふ人みづか

、寒いく(トはだか)成りがた〜ふる(ながら)彌次こゝで干てもわられめへから。
 着替を出して茶やれ。何所ぞで火を焚て貰てあぶるがい、北八 エ、いま〜しい風を引
 たハ。アクツシヤミ(トぶつ〜)小言を云ながら着替を出して替替へくさつ(棒鼻の茶屋
 女お召よナ上りやアし。鯨とこんにやくと。干大根のお吸物もお座りまアす。鯛のせんば
 煮もおざりまアせ。お休なさいまアし〜(長持人)吹ばナア。吹程ナア、ンエ。持もナカ
 るいナア、ンエ綿をサア入たやナア長持に綿をナア、ンエヨウしつたかだうだか〜
(馬のいななき)彌次 ヲヤ北八見さつし先刻の座頭めらが。あそこに呑でけつかるは 北八
(ヒイン)〜
 まいつはい、事が有。あいらを川へはめた意趣返しをしてやるふ(トつくり聲にて。か
 る茶屋) 北八 ヲイ御免なせ〜 茶や女 お出なさいまアし(茶を汲でくる。北八かの) 茶や女
 へ這入) 支度でもなさい升か 彌次 まだ〜腹かぼんぼりなぞ(先きの坐頭二人此所に休み酒を呑
 犬市 ハアねつから酒がたらぬようだ。もう二合やらかそう 猿市 いか様なア御亭主〜も
 うちつと頼升 茶や女 ハイ〜 犬市 時に今の川へはまつたべら棒共はどうしたるふ 猿市 夫
 よハ、〜 先替り目をやらかそう(ト猪口に一盃ついでト口呑。下に置と。北八と
つと手を出し猪口の酒を呑でしさいちやつと元

〇主 説
 客 無 餘
 蘊 一 矣

の所に) 猿市 イヤふといやつらで有た。ちやんとおれよおぶさりやアがつて。其代り、水を
 喰やアがつた時。たすけてくれるとかなしひおとぼねを出しかつた何でも。かすりを
 取事斗り。心掛てゐるやつだから。大方あいつはごまの灰だろふよ 犬市 そふさ。どうでろ
 くる者しやアあい。あ、いふやつ。こんな所へ來ても。ゑては喰逃をして。ぶちのめされ
 る者だ。イヤ時に盃はどうした 猿市 ホンニわすれた(ト猪口を取揚て呑うとし) ヲヤこぼ
 したそうな(トそまらあたり) ハテめいよふさ。改めてさそう(ト又一盃つき一口呑で下に
 置と北八又そつと引寄せ呑
 どもふ) 犬市 かうして居る所へ先きのやつらが來たらおかしかるふ 猿市 なにあいつらは大
 方着物を絞たりたり。干たりしてまだあつちになごつて居るだろふ智惠のないべら棒共
 だ(ト云ながら盃を取揚た所) 猿市 是はどうだ 犬市 又まぼしたか。いくぢのなない 猿市 イヤ
 こぼしはせぬが。ハテ奇妙てう來な 犬市 イヤ手めへそんな事斗り云て一人で呑な(ト此内
 子を取。自分が呑だ茶呑茶碗二ツに) 犬市 コリヤ猿よ酒盃を廻さぬか(トひつたくり銚子
 わけて。そつと銚子を元の所に置く) 犬市 ヤア此猿市め一人りのでんではしまやアがつた 猿市 ナアニとんだ事を 犬市 夫でも銚子がさ
 つぱりだ 猿市 何だ銚子がない。イヤ此所の御亭主〜わしらを盲とわなごつて。こんな横

着をさつしやるか。二合の酒がたつたニタロ香ともうみい。どうしたもんだ亭主ハイ夫
 い二合しかもたつぷりついで上りましたよ。大方おぼしなされたもんだんて猿市ナニおぼ
 そもんだ。商人に似合ぬ事をさつしやるから此酒代は拂ませぬぞト大きに腹を立る此時
 が最前より見て居りしが北子もりト口は遊でいる子もり
 八の肉うへゆびさしをして）ワアイ。座頭殿の酒ウ皆なあの人茶碗へ汲でしまは
 つせいた北八ヲヤ此子のとんだ事を云。コリヤア茶だト云ながら呑した茶亭主
 イヤお前酒くさいは。そして顔が赤くならしやつたは大方あの衆の酒を呑しやつた北
 八エ、此人もおあじように。度方もぬへ。わしが顔の赤く成つたのは。茶に酔たのだ。わし
 はかいつたとで。茶をたんと呑と酔升。酒又酔た人は。くだを巻が。茶に酔た証據には。茶
 斗り云がくせであらぬ。底で茶斗りながら。どなたも茶よふチャハ、くくく猿市イ
 ヤ其手は喰はぬ子供正直だ。コリヤアこんた衆が横取して。香だに違ひない。酒代を
 拂ひしやれ北八茶れやれ。茶りとの。茶わるもない事を。茶べらしやる茶つきから香だは
 茶斗り。茶どう衆の茶けを。茶くぶくした。覺て御茶らぬ。わるぬ茶れた。チャハ、く
 く大市イヤ是眼の見へぬ者だと思て其ちやらくらりの。おかつしやれ。ハテ見て居た

○北答
 辨亭主
 裁判得
 中庸蓋
 不可茶
 糟



で六十四文北八ヤ何だ茶を二合呑だ。度方もぬへ彌次エ、めんどうな。拂つて。しまつた
 がい。手めへのするこたア。何でもおさまらぬへ足元の明るい内拂つてしまやト眼顔
 せると北八もせうまどな猿市イヤ早さんだ人たちだ。大方先刻おぶさたもこんた衆であ
 ろふ人の買った酒を横取して呑と云はまア。盗ろ衆と云者だ北八ナニ盗賊だ此どう目くら

子供が證據人だ猿市まだ健事御亭主あの
 衆の香だ茶碗が酒くさいか。かぎて見さしや
 れトうごかね所へ氣を附られ。北八ちやつと
 茶碗おかくそふとすると亭主ひとりか
 見て）ヒヤア。くさいくとして酒でにちやに
 ちやする。コリヤハイお前ちが呑ましやつた
 に違ひはない。酒代を置つしやゐまし。ト云
 北八あいつはを）イヤ茶けの香ぬから。茶の代
 さまらねと思ひ）イヤ茶けの香ぬから。茶の代
 は拂はぬ。茶代なら何ぼでも拂をふ幾らだ亭
 主そんなら茶代をおかつしやる升。茶か二合

が。(ト)りきみ掛るを(彌次)ハテこつちがわるいモシテ量してくんなせへ。まいつは茶に酔
と氣がつよくて成やせぬ。サア茶つくと行ふ。アイお茶らばく(ト)言捨て。北八を無理
で足ばやに此(北八)ア、いまくしい今日ほとんど間がわるい。錢を出て酒を飲ながら
こまされたがうまらね(彌次)ハ、くくをれよりはよつ程ちゑのぬへ男だ
する事もなす事も皆盧羅や。茶にしられたる人のしがあさ
斯興じ(打笑)ひつ、頼て秋葉三尺坊への別れ道に至り彌次郎兵衛遣拜して

〇三尺
坊効驗

於今著
明矣

脇差の二尺五寸も何かせん。三尺ばうの誓ひ頼らば
夫より澤田細田を打過砂川の坂道に掛りけるに。西方より木立生茂りて。日の影くらく。
折節行さも。とだへたるに。誰ともしれずコヲレく旅の入りく(ト)呼掛られ兩人うし
ば。片わらの木影よりのさくとふところ手にて出来るは。どてら布子に一腰ぶつこみ。
山岡頭巾をかむりたる髭だらけのむさくる敷男。彌次郎北八が向へ廻り立はだかる二人
はくながら(彌次)コリヤ晝日中に何の用だ(山男)イヤ酒手を壹文下さいませハ、く
く(北八)何のとだ夫で落つゐたソレ壹文(彌次)あつたら肝をつぶさしやアがつて。い
まくしい乞食めだ(ト)つぶやきながら原川を打過き早くも名栗
(の建場につくこと、は花ごさぎを織りて商ふ)

道細に開く櫻の枝ならで。皆めいくにおれる花ごさぎ

程なく袋井の宿に入るに両側の茶や賑はしく往來の旅人各々酒香食事などして居たり
けるを彌次郎兵衛見て

爰に來て行きの腹やふくれけん。されば布袋の袋井の茶屋

此宿はづれより。上方者と見へて機留の布子に銀拵への脇差を差。花色羅紗の袋東掛し合
羽を着る男。供一人連て跡になり先まなり(上方者)モンお前方はお江戸じやな(彌次)左様さ
上方もの(彌次)わしも毎年下る者じやがお江戸ハ。氣味とは繁昌な所じやツイの。アノ吉原へも。

ちよこくさそはれて晝三とやらいふ娼婦を買たが。いつも人に振る廻れて行さかぬ。何
程か、つたやら。こちやしらんが。お前方も定めて買なさるじやあろふが。アリヤ何ば程
掛るぞいな(彌次)わつちも女郎買では。地面の五ヶ所と十ヶ所はなくした者だが。ナ晝三
位では。わずかな事さ。マア平の晝三なら片しまるで。壹分貳朱。茶屋が壹分か。藝者が一
組で又壹分。そして一斤くでもとれば。其代が貳百づ、掛る分の事さ(上方もの)ハデノわ
しも大見せは所々へいたが。其一斤くと云は何のこつちやいな(彌次)ソリヤア酒一斤肴

○馬々々
暴赤恥
彌次尙
敖然

一斤など、内の酒が呑ぬから別に外から取寄る事さ。上方者ハアわしが行た内では。其様
みことはなかつたワイな。そして何も呑酒は出しませんワイの。ゑろふよい酒で有たワイ
奇彌次 ナニそりやア飲む酒でも飲めぬへと云て別に取が江戸ツ子の氣性さ。上方者をして
上方では皆借てもどるが。お江戸の女郎は現金拂じやそりな。彌次 ナニサあそまでも附馬
を連れて歸りさへすりやア。いくらでも貸てよこしやす。上方者ハ、くくく。コリヤお
前は大見世のお客じやあいのワイの。その附馬とやら云事は。わしらが店の職人しもの咄し
で聞て居升が。晝三買に。そんなとありやせんワイを。彌次 なくつてさ。ほんにわつちら
ア尻に四ツ手駕の蛸の出来た程かよつた者だ。ナニねへ事を云やしせう。上方者ハ、そん
ならお前のおなじみ。何屋じやいな。彌次 アイ大木屋さ。上方者 大木屋の誰じやいな。彌次
留之介よ。上方者 ハ、くくく。そりや松輪屋じやワイな。大木屋にそんなあやまは。ないも
の。コリヤお前とんとやくだたいじや。彌次 ハアあすこにも有やすナア北八。北八 エ、さ
つきからだまつて聞て居りあア。彌次さんお目へさひた。ふうたぜ。女郎かいに行た事も
なくて人の咄しを聞かちつて出方だいばつかり。外聞のわるい。國者の面よこした。彌次ベ

○彌次
遭裏切
一敗塗
地

ら替めおれだつて。いかねへ者か。しかもソレ手めへを神に連れて行たじやアねへか。北八
エ、あの大屋さんの葬ひの時か。エ、神に連たもすさまじい。成程貳朱の勤を。あぶさつ
た代り馬道の酒屋で。むきみのぬたとから汁で呑だ時の錢は。皆なおいらが拂つておいた
彌次 うそをつくぜ。北八 うそなもんか。しのも其胸おめへ。さんまの骨を咽へ立て。飯を五
六盃丸呑にしたじやアねへか。彌次 馬鹿アいふ汝が田町で醴酒を喰つて。口を焼どした事
ア云ずよ。北八 エ、それよりかお目へ土手でい、紙入が落ちてあると。犬のくそをつらんだ
じやアねへか。業さらしな。上方者 ハ、くくく。イヤ早あまい方はとんと。やくだたいな衆じ
やワイな。彌次 エ、やくだたいでも。あくだたいでも。うつちやつてあきアがれ。能つべあべと。
しやべる野郎だ。上方者 ハア。こりや御免なさい。コレお先へ参ろう。(トきもをつぶし。そり
に行き)彌次 いまぐしい。うぬらに一番へこまされたハ、くくく。
り大窪の坂を越て早)北八 ア、くだびれた馬にでも乗ふか。馬士 おまいち。お馬アいらじや
くも見附の宿に至る)北八 ア、くだびれた馬にでも乗ふか。馬士 おまいち。お馬アいらじや
るませぬか。わし共は役又出たおまだんで。早く遠りたへ安くないか。サア乗らつしや
りまし。彌次 北八乗らねへか。北八 安くば乗べい。(ト馬のそりだんが出来て。北八是より馬に
乗。此馬方は助郷に出たる百姓ゆゑいんぎ

○天龍
近道昇
空馬士
中々博
識

也ん彌次コト馬士どん愛ふ天龍への近道が有じヤアねへか馬士アイ其所から空へあのら
しやると。壹里斗も近くあるは北八馬の通らぬか馬士イン子から道でお座るよト愛
彌次郎は一人近道の方へまいる。北八馬にて本道を茶や女お休みさりヤアしく横ば
行に早くも鴨川橋を打渡り西坂境松の建場よつく名物のまんぢう。かわしやりまし馬士婆アさん異な日よりでおさる婆アおりやうおどい
やした。今新田のあんにいが。どうしに行ずとまつてゐたアに。コレコレ横須賀の伯母ど
んよ。云ついでくんささい。道樂寺様に御説法が有から遊ぶがらお坐いと云てよ馬士ア
イく又此頃よ来ずい。ドウく北八此馬は静な馬だ馬士女馬でお坐るは北八どうりで
乗り心がよい馬士旦那アお江戸は何所だなアし北八江戸は本町馬士ハア。忍いとこだア。
わしらも若い時分。お殿様に付て行おつたの。其本町と云所は何でもづない。商人斗り居
るとこだアのし北八ヲ、夫よあいらが内も家内七八十人斗りの暮しだ馬士ソリヤア御た
いそうあちかつ様が飯を焚も。たるていのこんでいない。アお江戸の米がいくらしお
り升北八ア、壹升貳合い、所で壹合位よ馬士ウリヤアいくらに北八しれた事百にさ馬士
ハア本町の旦那が米を百つ、買しやるそふだ北八ナニどんだ事を車を買込は馬士どんだ

○浪既
逆カ卷所
以有轉
流名

此川の早き流れも世の中の人々の心の類と見ると鴨長明



ら雨よはいくらしまと北八ナニ壹雨にか。ア
、こうと。二一天作の八だから二五十二八十
六で踏附られて。四五の廿で帶とかぬと見れ
ば。無けんの鐘の三斗八升七合五夕斗もしよ
ふか馬士ハア何だかお江戸の米屋はひづかし
い。わしらにやアわからない北八わからぬ等
だおれにもわからぬへ、くくくく此咄の
しの内程なく天龍よ至る。此川の信州諏訪の
湖水より出。東の瀬を大天龍西を小天龍と云。
船渡しの大河也。彌次郎此所に待請て。供に此
渡しを打越るとて
氷上は雲より出て鱗程
浪のさかまく天龍の川

船より上りて。建物の町に至る。此所の江戸へも六十里。京都へも六十里にてふり分の處なれば中の町と云る由

けいせい道の道中ならで草鞋掛け。茶屋よとだへぬ中の町客

夫より。かやん塲薬師新田を打過鳥居松近く成たる頃。濱松の宿引出向かひて宿引モシ

あきた方アお泊ならお宿をお願ひ申升 北八女のいゝのが有なら泊やせう宿引随分おざり

升 彌次泊から食も喰せるか宿引上げませいで 北八コレ菜は何を喰せる宿引ハイ常所の名

物薯蕷でも上げませう 北八夫が平か。夫斗りじや有めへ宿引ハイ夫に推却くじいの様る

物をあしらいまして 北八汁が豆腐にこんよやくの白わえか 彌次マアおるくして置がいゝ。

其代り百ケ日にはちと張込つせへ宿引コレハ異なとをおつしやるハ、くく時よもう

参りました 彌次イヤもう濱松か思ひの外早くきたはへ

さつくとあゆむに連て旅衣。吹つけられし濱松の風

(宿引先へ) サアくお着だアよ 宿亭主 お早くお坐いました。ソレおさんお茶とお湯だア

かけ扱て) 彌次イヤそんなに足はよこれせぬ 亭主 そんなら直にお風呂におめしなさいまし 北八

湯灌場ハ何所だ彌次さんマア先へやらかしねへ 彌次 いまぐしいことをいふ男だ手めへ先へ這入宿女こつちイ。お出なさりまし (ト直湯殿へ案内する此内荷物も坐) 銀屋ハイ

両替ハようおざり升か あんま お療治をなさいませぬか 彌次 ヲットもんで下さいイヤ貴様

眼が有の あんま ハイ仕合と片つぼり能見へ升。十年ばかりも跡風眼とやらを煩らいお

りまして。両眼共に。かいかもくおつ、ぶして仕まい居ましたが。夫からこつちイ。色々療

治をして。やらやつとまの間左りの方が能成ました 彌次 久し振で眼が明ひたら皆んな。

しらぬ人斗りだろう あんま ヲさやうでお座り升 彌次 見へない方も随分療治をしさい。

なをりさへすりやア見へるもんだ。時に北八湯はどうだ (北八風呂) ア、い、湯だあんま

りあつくて體が半分水引の様になつた 宿女 ハイ御膳を上げませう (トこゝにて膳も出。色々

入て仕舞ひ) 彌次 サアあんまさん。やらかしてくん。イヤ時に今湯殿から見れば。この

内のかみ様かしらぬが病人と見へて取乱して居が中くうつくしひしろ物だ あんま ソリ

ヤア氣違ひでおざるはのし 北八氣違ひでも。大事糸への あんま イヤ聞おさい今に念佛がは

じまり升ハ (ト此内勝手の方にてチャンく) あんま ソレお見さい。あの氣違殿はこゝの

と鉦の音して百萬遍始まる

○接摩

雖三片目

心有二目

兩個一雖

目明一見

女亡二目

○盲人
遭幽靈
不得見
兩個應
羨之ヲ

下女でお座つたが。御亭主がふつと手を附られたを女房様がひどい焼餅焼で。あの女さぶつたり。はたいたりして。とうくさらけ出し居ましたが。兎角御亭主は不便がつて。夫から脇よ。かよつて置おりましたを。猶さがし。女房様が。やか間敷云てとうく氣が違ひ。首をくつて死にやりました。そうすると御亭主は又い、ことにしてあの女を内へ入ると。其晩から女房様のゆう霊が。とつ、いて。あの女が又女房様のよりに氣違に成たもんだ。夫であんなに毎晩百萬遍をくりあり升(トひそく咄すに。彌次郎北八も口ハ)北八何だ幽霊が。どつ、いたとは。ま、の内へ其幽霊が出るかの。あんま、出るだんか。彌次うそをつくぜ。あんま、ナニうそじやアおざらぬ。毎晩此屋根の上へよ白い者が立て居るのを見た者がおざり升。北八。ヤアコリヤ。とんだ所に泊り合せた。あんま、夫よその女房様が首をくつた時の顔色と云物は目眼をくるりと明て背鼻涕をたらし齒と喰しばつて夫い、く生て居るような顔であつた。北八。ソリヤアどこで。あんま、しかもソレお前への後の椽先で。北八。ヤアコリヤアたまらぬ。どうか。首筋がぞくくするようだ。彌次。あいにくしよぼく。雨が降出したは。なまけな。あんま、今夜などはさつと出そふなよんだ。北八。イヤコレあんま酸

もう歸つて下さい。彌次。アノ又た、き銚の音で一ぱい氣が引入るようだ。北八。何にしてもいまくくしい宿を取た。あんま、エ、臆病なお衆だハ、くく。彌次。もう仕めへか。北八はどらだ。北八。おらアもうねよふ。あんま、左様から御機嫌能(トあんまのいとまをひして立て行人共よいつにあひ。しやれもむだもいで)彌次。エ、いつそのと北八今から立うじやアねへか。北八。ナニとんだ事を云ふ。今の咄でどう夜道があるか。彌次。夫にこの内、何だか。だ、つびろいばかりで人が少ぬから。うす氣みの悪い内だ(ト目斗りばちくくと駆る音がらく)チウくくくく。北八。エ、鼠までが馬鹿にしやアがつて。小便を仕かけた。彌次。其鼠がうら山しい。おらア先刻のら小便を仕度てもあらへて居るに。ヤア何だかやばらかな物が足にさばつた。北八。何だ。猫ニヤアン。彌次。コノちく生めシツく。百遍の音。チャアン(軒に落る)ぼたりく(折もく)とまよひ(まよひ子の長太やアい。チャアン)二人共夜着の内へもぐり込(北八夜着の袖から差のぞき)どうだ彌次さんまだ生ているの。彌次。南まいだく。ア、時にこまつたところがあるもう小便がもるようだ。北八。おたがい。なんぎき目に合た。彌次。何と思ひ切て一所に行ふか。北八。兩戸を明てやらかすべし(ト二人いつ所に。こはく起いで。そろくど障子を

北八 何が出るもんだ(ト雨戸をさらりと明けた) 所が何か庭の隅に(白い)



け 北八 サア彌次さん 彌次 イヤ手めへ先へ 北八 何が出るもんだ(ト雨戸をさらりと明けた) 所が何か庭の隅に(白い) 物がちうとにふはく(北) 彌次 ヤアどうし 八さやつと云てたをれる(ト) 北八 どうした所かわれを見ねへ 彌次 あれとは 北八 白ひ物が立てゐらア。そして腰 から下が見へぬ 彌次 ドレ(トふるへなが 見たくなり。雨戸の外をそつとのぞき。是) 北 もきやつと云つて。坐敷へ這込たをれる(ト) 八 コリヤ彌次さんどうしたヲ、イ彌次さん ヤ(ト此さはぎに勝手より亭主かけきて此 体を見様々介抱して漸々彌次郎正氣づ きけ) 亭主 ヤレどうなされました 北八 イヤ小 便に行た所が。あそこは何か白い物が居て夫

○本草
盲目曰
臆病ノ虫
此曰ニ弱
虫

○此レ是
晉ノ木餅

いと云こたアしらぬへもんだがなぜか今夜の虫の居所がわるかつたそふな 亭主 ハイお休 となさいまし(ト勝手) 彌次 エ、いまくしひ大きに肝を冷した(トやうく心にちつ をたして坐敷へ歸り夜着引かぶりて) ゆら靈とおもひの外は洗濯の。襦袢の糊がこわく變つて 初めて笑ひを催ふし。心おちつさて色々とい一睡の夢を結ぶに程なく八聲の鶏の聲家毎に 唄ひつる。さあさあ。早出の馬の鈴の音シヤン(ト) 馬士うた 晩又御坐らばナア。裏か ら御坐れよヲ。表くる、戸で音がするよヲエ、馬 ロイレ(鳥が板家根) コト(ト) 彌次 もう夜が明けたさう(ト北八も共におき出れば。頓て勝手より膳もいで急ぎ) 梅干の諏訪の社と聞からに。守らせ給へ皺の寄まで 斯て若林の郷を打過篠原の取つきにて 北八 ヲヤ味さうなぼた餅が有ツト婆アさん一ツ くん(ト立乍ら見世先のぼた) ヤアコイツハくへぬ 婆ア ツリヤアぼた餅のかん板でござ るは 北八 イヤほんに木でこしらえたので有た。どうりでかたい 婆ア いくつ進ませます 北八 ナニ三ツ斗りくん(ト錢を拂ひぼた餅) 北八 ヲ、イ、彌次さん、彌次 何だ味へ物あ

らちつとくれろ 北八 どうきに味へ 彌次 ドレ一ツ 北八 イヤ夫から御らうじろ (ト手の平へ
ると驚が来りちよ) 彌次 ハ、くくく 北八 いまくしひこ、らの驚ハ皆下戸だそうな (ト
空をながめて)

明た口ふさがれもせぬ其上に。鼻を明かせし驚のにくさよ

程なく蓮沼壺井村を打過舞坂の驛に至る。是より荒井迄一里の海上。乗合船に打乗り渡る。
げにも旅中の氣さんじは船中思ひくくの雑談高聲にかたりあひ。笑い罵しり打興じ行程
も頓て中ば渡りで乗合の人くも咄草臥。めいく柳ごりに肘をもたげて居ねむりをと
るも有。又此風景に見とれて只默然として居も有り (此乗合の内は年の頃五十斗の罷むし
か附たる布子を着たるか。何をか。うしなひけん。居ねむれる人く乃膝の下をさぐり。又
はうすべりを持上げ。しきりに物をさがしもとむるやうすにて。彌次郎か袖の下をさぐり
まわす彌次其彌次 コウ貴様は何だ。ことばりなしに人乃袂をさぐりて何とする 親父ハイ
手をとらへて) 御ゆるされまし。としハハ。少斗い。なくみらした物が御坐るから 北八 おめへみるなつ
た物が有なら。斷つてたづねるがい。此船の中どつちへも行とではない。何だ煙草入か
喜せるか 親父 インニイエんなものヒヤア御坐らない 北八 イヤそんなら銭か金か 親父イン

○蛇在
舟中ニ不
足ヲ怖彌
次等此
大蛇

ニヤたづねづと。もう能御坐る 彌次 たづねとよい物ぢら人の居寐ぶりをして居る内。そ
こらア。さぐり廻とアねへ 乗合人々 サア何が見へぬ。云なさい此中で物が見へないでは
すまぬ 親父 インニヤモウ。よく御坐る 彌次 ハテ能では濟ねへ。何が見へやせん 親父 ハアそ
んから云升べい。皆なびつくりさつしやり升な 北八 ハ、くくくお目へが物を紛失たど
つて。誰がびつくりする物だ 彌次 何が見へやせん 親父 アイ蛇が一疋なくなり申た 北八 ヤ
アくくとんだとを云人だ蛇だア。何の蛇だ 親父 なん 何だべいとつて生た蛇で御坐るハ 乗合ヤ
アくく 彌次 イヤ貴様も。とんだ物を持って来た蛇をマア何にしようと思つて 北八 こいつ
は氣みのわるい。こ、らにはいぬか (ト立さわげば舟中皆々) ヤア此板子の下に。とぐろを
巻てるは。ソリヤそつちの方へ行た。エ、コリヤアきみのわるい。ソレく明荷の下へ
這込んだは。コリヤアア。とんだ人と乗合した (ト舟中上を下へひつくり替し立騒ぐ。かの
つらみ又懐) 北八 コレくお目へとんだとをする。夫をふところへ入ておると又這出升は。
海へうつちやつて仕舞なせへ 親父 インニヤ借そうは成申さね。わしハハア。讃岐の金比羅
様へ行者だが。道中路銭につまて。すべいようが御坐らないから。道で此蛇を取たを。さい

○股間

飛龍潜

居如持

蛇此瑣

事

○親爺

蓋知地

面屋敷

被流

はい蛇道へびみちひに成なつて壹文宛いちもんゑん貰もららつて行者いんぎょうだから。コリヤわしが商賣しょうばいの種ねで御坐ごまるは彌次やじイヤなんほ貴様きさまが商賣しょうばいの種ねだつて。蛇へびを持もつて居ゐらると。どうして二所ふたところも居ゐられる者ものだコレ船頭せんとう殿どのなぜこんな者を舟ふねよのせた。船頭せんとうわしらだつて。よもやあの人ひとが蛇へびを持もつて居ゐようといしりませぬ。乗合まがひコレ親父おやぢどん何なんのかのと。云いつ共とも多勢たせいにぶ勢せいいだ。早くうつちやつて仕舞しまひなせへ。親父おやぢインニヤ。やアだ成申なりまさぬ。北八きたはちからア貴様きさまぐるめ。海うみへぶち込こんでしまうがどうだ。親父おやぢヨ、サ。はめるならはめて見みさつしやい。もしにも手ぶしが御坐ごまるは北八きたはちエ、此親父このおやぢめは。ふてへやつた。ト北八きたはち立たつてかの親父おやぢのむらぐらを取とり。ふとこのく。彌次郎やじらうつ、いて立上たてありさせるにて親父おやぢを一いつくらわせる。親父おやぢ腹はらと立た。皆人みなひとソリヤてか。附つと舟中ふねなか皆みなく。取とりさる内うち。又彼蛇またあいつへびが親父おやぢの袂たもとから落おつてのたくり廻まわす。又出でおつた。ぶちこそせく。北八きたはち自分の脇差わきざしの小じりややつと蛇へびの頭かぶをぶさへる。蛇へび其そのがすべり脇差わきざしもいつしよ。海うみへ打込うちこんける。又蛇またへびは浪なみに巻まかれて見みえず。脇差わきざしは。乗合まがひ皆みなく。竹ゆ光たけゆみを浮うけて流ながる。北八きたはち面目めんめいなくしよ。けて居ゐるゆゑ。親父おやぢ是こゝれよ。腹はらをいへる。ア是こゝ、でおちついた。しかしお氣いきの毒どくなどはあなたのお腰こしの物ものだ。親父おやぢわし。此年このとしに成なるか脇差わきざしの流ながれるのを初はじめてに見み申また。北八きたはちエ、尻しつの穴あなのせめをといふ。親父おやぢめだ。奥州おくしゅうの衣川えがわで辨慶べんけいがたちあうじやうした時ときア太刀たちも鎧よろひも流ながたと云いふ。親父おやぢハ、く、く。ありやアハア

横よこつ腹はらがいたく成なり申まは柳やなぎ樹きと云いふ本ほんに衣川えがわ財さい樾げばかり流ながれけり。と云いふ句くがあり申ま辨慶べんけいの差さてお出でやつた腰こしの物ものは金かみで拵こしらへたもんだから流ながべいこたア。御坐ごまんないは北八きたはちエ、云いはせておさやア能ぞしやべる。死しにぞまないめだ張はりとばしてやるふ。ト又立上またたてありつかみ掛かも。う北八きたはちい、にしや乗合まがひの衆しゆうの手前てまへも有あり静しずまれく。ト是こゝを考かんがへだめる内うち舟ふね。船頭せんとうサア、くお關所せきしょ前で御坐ごまる。笠かさを取とり膝ひざを直なさつしやりませ。ソレく。船ふねが當あたり升あるぞ。乗合まがひヤレくといこほりあく。着つて目出めでたいく。程ほどなく舟ふねの荒井あらいの濱はまを管くだれば乗台まがひ皆みな舟ふねを上あり。舞坂まいざかを乗出のりだしたるは今切いまきりと。また、くひさまも荒井あらいにぞつく。さるにても腰こしの物ものの流ながれるは前代ぜんだい未聞みきこの咄はなしの種ねとみづから打笑うちわらひつ、北八きたはち竹篋たけばちを拾ひろて仕舞しまひし男おとこぶり

夫おとこより二人ふたりの此荒井このあらいの宿しゆくに酒さけ汲くかばして足あしを休やすめぬ。○四編。由縁ゆゑん齋貞柳さいていりゆうの狂歌きやうかの。螺貝はかいの出いでし昔むかしはしらね共今吹いまたふは能よき追風おいてなりけりと讀よしは東海道とうかいどう

出女の顔の黒さも名にめて。七きんかくす白須賀の宿
此宿を打過。程なく汐見坂よさし掛るに。是なん北は山つゝきにして。南に蒼海漫々と見
へ絶景と云ふに云ふりなし

風景に愛敬あつてしをらしや。女が目元の汐見坂には

○ 遇不

風流漢

鹿無鹿

(北八が口つさみたるを) ハア旦那はゑらい哥人じやな。アレ向ふの山を見さしやりまし。
駕の先棒さつつけて) 鹿が居ちり升は 北八 ドレく是て而向い 先棒 めいよふお江戸の旦那方はあんな面うも
あいの。ちくせうめを珍らしがらしやつて。さんによろも發句とやらを言つしやれたお人が
有た北八 おれも今の鹿で一首よんだ。貴様たちに云て聞せたつて。馬の耳に風だろうが。
こういふ歌だ。奥山に紅葉踏わけ啼鹿の。聲聞時ぞ秋かなしき。何と奇妙かく。後棒旦那
那はゑらい者じや。わし共はかいもくしらぬが。何よしされ。歌がたにひゆつと出るとい
ふ者じやからゑらいく 北八 鳥渡した所が此位な者よ。イヤ貴様たち。あんまり讀てく
れたから酒が呑し度成た。爰は建場か。先棒 猿が番場でお坐り升。サア棒組一ぶく吸てい
かアす (ト茶屋の門口に) 北八 皆な一盃つ、呑つし。コレ女中そこへ酒を寄升でも二升で

も味へ肴を附て出してやつてくん (彌次郎駕) ヤ北八どうした大分おうふうあとを云



八の一番へこま) 彌次 サアく御亭主いくらだの。御酒代は駕の旦那がお掛ひだ 亭主
れてだんまり也) ハイく酒と肴で三百八十文でお坐り升 北八 コリヤどうてきに食やアがつた (トふせう
の錢を拂てしも) ヤほんに棒組先刻の一本の錢はとうした 棒組 ヲ、夫くモン旦那あた

○猿松
天夫仰
天之声
亦悲

たの乗て御坐らしやる。布團の間に四文錢壹本入て置ましたたが有か見てくだされませ
はれて北八 ナニ爰にか。イヤ見へ無はへ 駕かき ナニ無とはあらまい。 礎よ入て置ました
彌次 先刻見りやア北八手目へが布團の下から出してひねくり廻し居た錢じやアねへか駕
かさ 夫でお坐り升 (ト北八心の内よいまくしひとを云と彌次郎をにらむ。彌次郎をか
だして布團の下) 北八 ヲ、く爰にあつた 駕かき サア棒組此元氣でやりからかそふ
茶や よふお坐りました (ト駕をかき出す。彌次郎おかしくこい)
ひろふたと思ひし錢は猿が餅。みぎから左りの酒にとられた

斯打笑て。行程に境川と云ふに至る。爰は遠江三河の境にて橋あり彌次郎地口にてよめる
遠州へつき合せたる橋なれば。二かわの國と云べかりける
程なく二川の驛に着。此所家毎に強飯を商賣ふ見ゆれば
名物はいはねどしるき強飯や。これ重箱の二川の宿

兩側の茶屋ごとに旅人を見掛て呼たつる女 お休あさりまアし。あつたかなお吸物もお坐
りまアす。無鹽の肴で酒でも。お飯でもあがりまアし (此茶屋の門口に居る雲助北八彌
次郎を乗たる駕かきを呼掛て

ヒヤア八兵衛。替てうせしたな。畜生め。早ういて喉が番をされ。密夫めがしけ込でけつかる
わ (彌次郎を乗) あほうめおどれが所の親父めが首釣てをるまたアしらすにくそたれめハ
、く、く (トこ、を行過ぎ問屋のすまし手前に駕をわろす。彌次郎兵衛北八こ、よりお
りて行と。此宿は同れの殿様よやお小休と見へて。御本陣の前に乗物たてつ
、き。數多の御同勢馳せ違ひ問屋袴腰をぬじりて。駈) 北八 ハ、アお屋敷だけ大屋様も二
廻り。野袴ふん込のお侍衆御本陣へ相つめるを見て
本差でゐる。彌次 馬鹿ア云ふ踏込さへはいて居ると大屋だと思つてげつかるそうだ 北八
アノ乗掛を見な。ごうぎに布團がのさねてあらア 彌次 其等だ乗て居る人の天窓を見や。叶
ふ福助と云もんだハ、く、く。ソレ馬が来たア 馬 ヒン、く、く 彌次 アイタ、く、く。
わりい所に合羽籠をさきやアがる (トけつまづいて小言を云と) コノ野郎め。合羽駕へ土
足を踏掛やアがつてふてへことをぬかしやアがる。横面アかぶりかくア 彌次 ハ、く、
く 大江山の飯時じやア有めへし。顔アかぶりかくも氣がつる、 仲間 なん 何だよいつ。ぶちば
なぞぞ 彌次 貴様たちの赤鯛でナニ切る物か 仲間 そうぬかしやア切にやアならぬ。コリヤ
角助お身の腰の物を鳥渡借しやれ (トほうばの角助が腰) コリヤ、く切ならばお身の刃
物でなせきらぬ 仲間 ハテヤかましい。とれできつてもい、じやねへか 角助 イヤよくない

仲間 ハテじはひ男だ鳥渡かしやれな 角助 イヤ儲お主も氣のきかぬ男だ。おれがほん
 とうの脇差は鎧持の樋右衛門へ二百の方とられたを。お身様もしつて居るじやアねへ
 か 仲間 ホンニそうだ。エ、コリヤおのれ打はたすやつなれど。ゆるしてくれう早く行彌次
 イヤ行めへサア切く (トつ、かゝる。皆々此喧嘩をおかしがり) エ、そうぬかしやア了
 簡がならぬ突殺してなごくれふ (ト引抜つきに掛る竹光を彌次郎) 仲間 ヤアレひと殺し
 く (ト此内早殿様のお立と見) カッチく (そりやお供揃へと。さわぎ立。御同勢に
 幸に北八もろ共にこ、彌次 ハ、く大笑ひの喧嘩だ
 をのがれて足早に行過) 脇差の扱身は竹と見ゆれ共。喧嘩よふしはなくて日出たし
 夫より此宿を出て。たどり行よ。早くも大岩小岩を打過岩穴の觀音を。ふしおがみて
 行掛の駄賃におがむ觀音も。尻くらるとは岩穴の内
 げよも旅のささんじは差合くらす。高聲に咄物して行うちにも。さすがに退屈の欠びし
 ちがら 北八 ア、草臥たちつと斗りの風呂敷包や紙合羽も。中く邪魔な成物だ。コウ彌次
 さんお目への荷とわつちの荷と一所にして坊主持にしようじやアねへか 彌次 コリヤア面

白へさいはひ愛にい、竹が捨て有 (トひろひ取て二人の荷物) 彌次サアく北八手前へ
 から持てこい 北八 年役にお目へ始めまつせへ 彌次 そんなら狐拳でやるふサアこい。ヒイ
 フウミイ。おつとみた 北八 エ、いめへまじひ (とひつかたげて行く向から) 僧だぶく
 くだぶだぶだぶく。フニヤくくく。だぶくくく 北八 ソリヤ彌次さんわた
 したぞ 彌次 ヲット詩取たぞ。其次の坊様はどうだ早く来れたい、に (ト又向よりくる) シ
 ヤンくくく 馬十歌 高い山から谷底見ればニ。あ萬かはいや。布さらそサアエどう
 く 彌次 きたぞく お衛符は勅願所ソレ馬の上に御出家由か 北八 あんまり早いな (ト
 取てひつかつぎ) いざり 御らんの通り足のかないぬ。ゐざりに御ほうしや 北八 イヤアこ
 行。道の片はらに) 彌次 前から見ると。坊主のようだが。後を見やぼんの窪に毛が有は 北
 八 おさやがれハ、く (此内跡より。びくまが三人づれにてゆ) 身をやつす賤が思
 ひを夢程様にしらせたヤ。ゑいそりヤ。夢程様にしらせたヤサアサさんからへく 北八 あ
 だやかな聲がする (トふり) ヒヤア比丘尼だくさア彌次三。渡しやす 彌次 エ、いめへま
 しい 北八 入に荷を持せたるは。中くい、物だ。是でお供を連た心持だ。ヤアくこまつ

らアまんざらでもねへ。彌次さん見ねへこち
 らの比丘尼があれを見て。アレいつそ。にまに
 こと。愛敬がこぼれるようだ畜類め 彌次 愛敬
 のいゝのじやアねへ。アリヤア顔にしまりの
 ねへのだい 北八 悪く云ぜ (ト此内跡まあり先
 はまだ年も廿三今獨りひとしま十一二の小
 比丘と共に三人連中にも若い比丘尼が北八の
 そばへ) 若あまた。火はお座りませぬか 北八ア
 よりて) 今打てあげやせう (ト摺火打を出し) 北
 イく今打てあげやせう (ト摺火打を出し) 北
 サアああがり。時にお前方アどけへ行さ
 る 比丘尼 名古屋の方へ参り升 北八 今夜一所に
 泊りてへの。何と赤坂迄行なせへ。一所にしや
 せう 比丘 夫は有がとうお座り升。モシとうぞ
 お煙草粉を一ツぶく下さりませ。とんと買の



○有無
 限、餘情

を忘ました 北八 サアく煙草入を出しな皆な上よふ 比丘 夫でいあなた。あこまりでお坐
 りましょ 北八 ナニわつちやア。由さ時にお目へ方のようなうつくしい顔でさせ髪を剃な
 さつた。ほんにそうして置はおしひ物だ 比丘 ナニわたしらが。たとへ髪が有たとて。誰
 も構入はお坐りませぬ 北八 有だんて。わつちらア一番に構氣だ。何とかなはしてくんな
 さらんか比丘ヲホ、くくく 北八 早く一所に泊りてへ彌次さん此先の宿へ最ふ泊ろふじ
 やねへか 彌次 馬鹿ア。ぬかせ。あやにく坊主のくるがとぎれた (トまゝとい、ながら行程
 屋に至ると此所より比) 北八 コレくおめへたちやアどこへ行。そつちじやア有のへ 比丘
 丘尼のわき道へ這入る) 北八 是からお分れ申升。わし共は此在郷へ廻て参り升から (ト野道をさつくと行過る。
 郎兵衛おか) しく吹出し) ハ、くくく。北八手めへ今日の大分つけがはりいせ 北八 エ、とんだ目に逢
 た。どうはらな (トうつかりしてゐる後から) 北八 アイタ、くくく目を明て通れ。たれだ
 (トふり歸り) 彌次 ヲツト荷物渡したく 北八 コリヤはじまらねへ (トふせうく荷を引
 見れば旅僧) 田の宿) 旅人をまねく薄のやくちか。爰も吉田の宿のよねたち

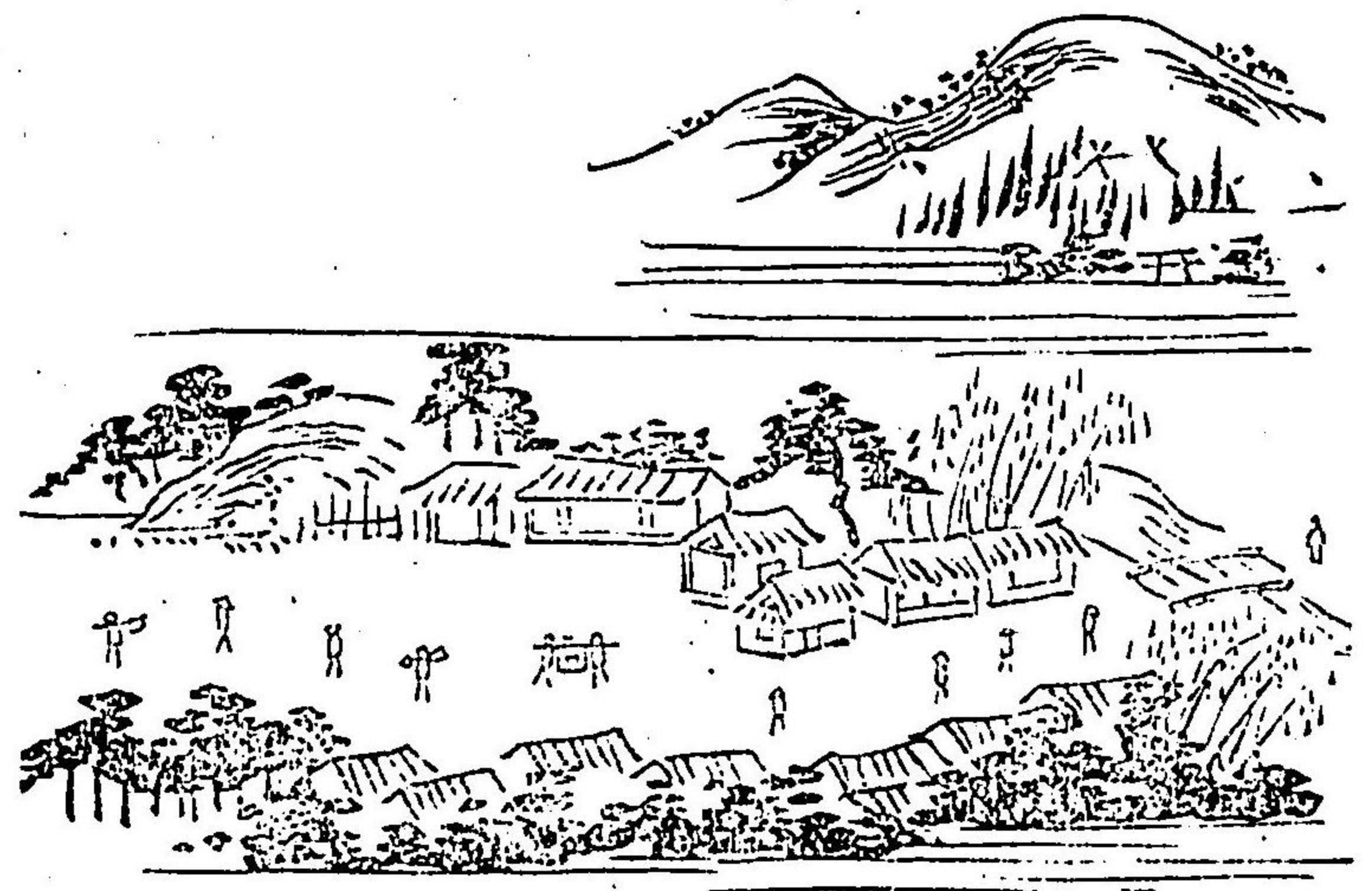
此宿はづれより遠國同者とは見ゆれ共少しいたうにしゃへる手合五六人高聲に咄て
 行を聞ば中にも目引の立纏に肩の所編から替りたる切を當たる裕を引張り風呂敷包と
 糸だてを脊あひし男跡ヲ、イ源九郎義經ヤアイく早く來さいのくト呼聲に彌次郎
 北八おかしく此
 義經と呼べる、男をみれば紺の紋付の廣袖袷は是も包と糸龜井兄なアヤ。片岡兄なア。
 早くと足が達者だアのし。うらア。あくとのあかざれさアへ。石ころがつ、ばいつて。ある
 かれ申さぬ 静岡前はどうしきつたアのし 義經 ヤレ諸國なさる。跡の建場で靜岡前
 が持病の疝氣さアふこつたとき金玉ノウ釣上て。うつ死べいと。西風の東風に。さわぎやるこ
 とよ。夫にはア六代御前が。牡丹餅さア三十斗も。うち喰たげで食傷のウしてむたん。ば
 たん。切あがりやる。まんた夫よ辨慶は。團子のくしさアで咽喉のウ。つ、いたと派ア翻し
 て。なきやつたげで。うらの源家の友盛殿が三人のウ。介抱して。やらやつと跡から連んて
 來申すの。主たちやア。何もしらずにうろ走つて仕合せたアのし彌次郎此咄をおかしく
 跡になりささよありて
 お目へ方ア何所へ行なさる 義經 お伊勢様へ参り申すは 彌次 先さから聞ばお目へ方ア義經
 だの。辨慶だのと云なさるが。どう云まつたね 義經 ハアそんな衆の聞やつたらおかしかん
 べの。コリヤハアわし共が國さアつん出て來るまへに祭禮が有申て。千本櫻といふ芝居の

○ 徐御
 膳所ニ以
 後

ウし申たからの夫でハア義經だア辨慶だア。のと狂言さア。おつ初めた時。忘れぬ様にと
 其名を。やつべし云つけた。くせさア。今でも戯けに云のでござる 彌次 聞えやした。そんな
 らお目へハ義經も成た。お方と見へる 義經 そうでござる其前にわし共が國さアへ。江戸芝
 居が來て天神様の狂言のウし申たが。聞なさる。玉けた理屈よ。あにがハア時平やら五兵
 衛とやら云悪人殿が。ざん言のウせられたげで。天神様の島流にならしやます時。興に乗
 てお出やると。あにがハア見物のウしてゐる婆ア様立も。瞬様立も。ヤレくいとほいみ
 んだと誤ア翻して。御門跡様の通らしやまに様に米だアの。錢だアのと。舞臺さアへ。詩ち
 らかいて。悲しがりやる。そよまでハア見物の中から博勞の與五左と云づない人が舞臺さア
 へ。駈だして。いやるよやア此芝やアならないぞく。ゆぜ天神様ア島流しにせるのだ最
 前お出やつた。長樂寺様のゑんま様ア見る様お公寮殿が悪人だア。あにも天神様に科ア
 ない。いかに芝やだアとつて。ふとを馬鹿にしたこんだア。天神様の尻やア。此博勞の與五
 左が持は。時平殿はうらが相手だと。あにハア御年貢米の二俵べしも。さしやアげる力の
 有せさアだんて。誰もうつたまげて。挨拶のウせる人アなし。見物もくちやうく。與五

左殿さうだ其時平とやらアしよびき出してぶつた、けと。めにハア村中の若いふとたちが樂屋さアへ廻込で。らんごくを遣ると思ひなさら。さうせると江戸役者の時平殿は。コリアたまらあいと。尻のウおつはしよつて。つん逃申た。夫からハア名主殿へ寄合付て最ふ此村へ江戸役者ア入るなと談合のウして。わし共が其跡の芝やさアで狂言のウたつぱし申たが。江戸芝やよりかア。ぶち割る程流行申したトいさせいはつて。どはすがたり自慢らしく咄もつて行中、に。いつの間にかは大雲寺に至る。此所は醴酒の名物あれバかの人々の打連て此茶屋に休む彌次郎兵衛北八は急ぎこ（、を打過るとして）

「さや高き御寺の前の名物わ
是も佛にあれまあまさせ



斯て此渡りより早日も傾き暮に近ければいざや急んとて草臥し足を早めてたどり行道をがら北八 どうだ彌次さん坪が明かぬへの 彌次 大きに草臥た 北八 何と夕べの泊りの中位の宿で有たが今夜のこうしやせう赤坂迄。わつちが先へ行てい、宿を取やせう。お目へ草臥たから。跡から徐かに來なせへ。宿から向ひの人を出せて置やせう 彌次 夫のよかろう。しかし宿のどうでもい、からのたぼの有そうな内よしやれ 北八 呑込山く（ト此所より駈拔郎跡よりたどり行に。程なく御油の宿に入たる頃ハ。はや夜に入て兩側より出來る泊の女何れも面をかぶりたる如く塗立たるか袖を引てうるさければ彌次郎兵衛やうくと振切行過るとして）

共顔で泊だてなまば宿の名の。御油るされいと逃て行ばや

彌次郎兵衛。餘りに草臥ければ。先此所。はづれの茶店に腰を掛たるにまの塗、アイ茶ア参りませ 彌次 モシ 赤坂迄の最う少しだの。ば、アイたんだ十六丁お坐るが。おまへ一人りなら。此宿に泊しやりませ。此先の松原へ。わるい狐が出つて。旅人衆が能化され中は彌次 そりやア氣のぬへ咄だ。しかし爰へ泊りたくても。連が先へ行たから仕方がねへ。エ、氣ついたアねへ。やらかしてくれやふ。アイおせは（ト茶代を置き此所を立出行に暗さハ暗し薄氣味悪く眉七に唾を

○狐話
無氣則
常話耳

だと思ひ詰た北八馬鹿くしいめに逢た。今だに此手首がびりくする彌次ハ、
 く。しかしまてよ斯は云ふ物の矢張是が化されて居るのじやアねへか。どうやらどかし
 な心持だ(トむしやうよ)御亭主く亭主ハイお呼なさりましたか彌次コレどうも合點の
 行ぬ爰は。どこだ亭主ハイ赤坂宿でお坐り升北八ハ、くく彌次さんどうしたのだの
 彌次エ、まだはぐらかして居やアがる(ト云つ、まゆ)御亭主さん。何とこ、の内は亂塔
 場じやアねへか亭主エ、何よをかつしやる北八ハ、くく面白へく(ト此内勝手)お
 湯にお召なさりませ北八サア彌次さん先湯にでも入て。氣をちちつけるがい、よ彌次畜
 生めが糞壺へ入ようとと思て其手を喰物か亭主ナニ湯は清水でお坐り升から奇麗でお坐り
 升。マアお出なさりませ(ト勝手へ行く女)モシお淋しかア。女郎さん方でもお呼なさりま
 せ彌次馬鹿アいふま。石地蔵を抱て寝るとアいやだ宿女ホ、くいなとをおつしやり升
 北八そんなら先へ這入やせう(ト北八湯殿へ行く此内)時にお客様へ申上り。今晚は私し
 方よし祝事がお座り升から。御酒を一ツ上ませう(ト云内勝手よ)彌次お構ひ成るな何
 ぞお目出度とかの亭主ハイおさやうでお坐り升。私の甥めに嫁を貰ひました。今晚婚禮を

○彌次 誓登

致させ升からおやかましうお坐りましよ(トいひすて、立て行)北八何だおぞり掛る彌次
 お、の内に婚禮が有と云とだ。コリヤ彌々。さやつめが。はぐらかすに。極まつた。もう水
 風呂へも這入めへワへ北八エ、お前もい、かげんにしな。さりと執念深へこつた彌次
 ヤイくめつたに油断はあらぬ。此視ぶたも。よんなに味そうに見へても性は馬の糞や犬
 の糞だろふ北八ホンニ。そうだろふから。おめへは見て居あせへこいつは有がてへ。おじ
 ぎるしにやらかしやせう(ト北八手酌にてさつくと呑掛る彌次郎れいのい)彌次いぬへ
 ましい氣を。わるくさしやアがる北八さづけへはねへ。一盃呑なせへ彌次イヤく馬の小
 便だろふ。ドレにはひをかして見せや。ムウくこりやアほんとうの様だ。どうもこ
 らへられぬア、ま、よやらかせ(ト一盃ついで、呑)酒だくドレく肴ア。ヨツ
 ト此玉子のどうも色相が氣にくはねへ海老にしよふ。カリくくこいつは本とらの海
 老だく(ト引かけくさへつ。おさへつ。さつくと呑掛る此内勝手の方はわんがくの
 うたひの)四海浪靜にて國も治る時津風枝をならさぬ御代なれや。相に相生の松よそ目出
 たかりけれ北八ヤンヤア彌次コウやかましひわへ北八やかましひは、が。お目へ先刻

から盃をはなさねへ。ちつとこつちへ廻しな。ホンニ馬の糞だの小便だのと云かと思やア
 開くも一人で喰やつさへ、く彌次 おらア正直化された氣に成て居たが。今思やア。そら
 でもねへ。とんだ苦勞をさせやアがつた北八 エ、お目への苦勞したよりかアおらア縛れ
 て變ちさな目に合たハ、
 (此内勝手より膳も出彼是する) 千代も替はらじ幾千代も榮
 榮ゆる松梅の二葉の竹の夜をこめて老と成迄と結ぞたのしかりける。目出たひく三
 一の嫁を取まゐた。しやんく
 (ト手を打た。さ。めき) あなた方最ふお床をとりま
 しまか彌次 そんなとにしやせう北八 コレ女中祝言は最ふ濟やしたか。定めて嫁ごらうつ
 くしかろふ宿女 アイサ。むこ様もよい男。嫁ご様もゑらゐさりやう由でお坐り升。お氣の
 毒などはあちらの坐敷に寝やしやり升から。むつ事が聞へまじよ彌次 何だそんな手合と
 割床のあやまる北八 こいつの大變く宿女 モウおしづまりなさいませ
 (ト出て行。二人も
 と早ふすまひとへ隣の坐敷にむこと嫁がねるようす。ひそくと咄しするを聞はしたじ
 から色事にて貰ひし嫁と見へて中く初たい面とは見へずぶつたりつめつたりして。
 いちやつく様子手に取るように) 彌次 エ、とんだ目に合しやアがる北八 ホンニわるい
 宿を取た。人の心も知らずに。何んだかおそろしくむつまじゐる畜生め彌次 サア咄聲がや

○嫁違
 目彌次
 難見違
 之

んだからむづかしう (ト段々布團からのり出隣の様子を聞耳立て。ねられぬまに彌次
 はひか) 北八 コウ彌次さん嫁はうつくしいか。おいらにもちつと見せくんな彌次 コリヤ
 静にして肝心の所だ北八 ドレレ見ねへ彌次 コレサ引張な北八 夫でもちつと退なせへ
 (ト彌次郎が夢中に成てのぞきいるを引のけん引張とものかじぞおぢるはづみよ。バ
 つたりふすまがあちらの間へたをれると二人共もにふすまの上へおろげる。むこにも嫁
 もおしにうたれ) じこ あいた、くコリヤどやつじやいなんぜ唐紙を打こわいた (トはね
 てきもをつぶし) じこ あいた、くコリヤどやつじやいなんぜ唐紙を打こわいた (トはね
 所か。行燈もひつくりかへして。眞く聞彌次郎は。ちやつとにげて) 北八 御免なせへ手
 のがね所へ還込。北八まどくしてかのむまにつかまりせん方なく) 北八 御免なせへ手
 水に行とつて。ッイ戸まどひやしやした。せんでへ爰の女中がわりい。夜座敷のまん中に
 行燈を置から夫よけつまづいてお氣の毒だ。ア、小便がもるようだ鳥渡行て来やせうお
 っをばなしてくんなせへむこ いや早あされたお人達じや。夜着も巾團も油だらけになつ
 た。コリヤおさんく。だれぞ早う。おこしてくれぬか (ト呼たつる聲に勝手より下女が火
 北八も手持なくはづれしから紙をはめて引立やうく) ままとは
 り云て。元のねどころへ歸りすべくとね掛る彌次郎おかしく) ねて聞ばやたらおかしや唐紙と。共にはづれしあごの掛がね
 北八も夜着打かむりながら



鴛嫁のね屋をひせうよかきながし。
我は面目うしなひしとして

期打興じて。夜も更け行ま、に。双方静まり。只
るびさの聲のそ高くなりぬ。鶏の聲萬戸に響
きて。引つる、課役の馬の嘶さしつゝましく。と
でよ夜明ければ。彌次郎兵衛北八もふさ出。わ
ら増に支度と。のへ。早くも赤坂の宿を立出け
るに。此の宿の出端よと跡になり先になり行三
人連の旅人。是も江戸者と見えて。少し勇み肌
の巻舌よて出行を聞ば。一人の男。コウタベの泊
はおかしかつたなア。今一人ソレヨ何たる奥の
間に泊て居た。やつらアきのさかねへ野郎共
だ。宿の婚禮が有を羨ましがりやアがつて襖の

○赤ッ耻
自首
○彌次
敗軍

間から覗き居て夢中に成。とうく襖をぶつこかしやアがつた。大笑ひな。べら棒共だ今
一人 夫から其聲にあやまるさまア。あの騒ぎでいらもろくに寝られなんだぬめへまし
い 一人の男 そしてアノ一個の野郎めは何だか宵の亭主を呼やアがつて。この家は
亂塔場じやアねへかと云やあかつたか。あのべら棒めはどうでも気が觸て居ると見へる
ト此手やい夕へ彌次郎北八が泊し家へ一所に泊たと見へて此 彌次 コレ貴様達やア先刻
咄をそると彌次郎聞て大きにわつく成足早にかけより詞を掛 先の男 ナコこんな衆
からだまつて聞てありやア。おいらがこどをべら棒だア何のこつた 衆
のとじやアねへこつちのとだは 彌次 こつちのと云とがあるもんか夕べの宿でのとをぬ
かすだろふ其襖をぶつこかしたべら棒と云たアおれがとだは 旅人 ハアこんだ其べら棒か
彌次 ナ、其べら棒だ 旅人 ハ、くべら棒だから。べら棒と云たがいひじやアねへか 彌次
イヤ。こいつわるくしやれやアがる 旅人 糞を喰へ 彌次 何だ糞を喰へコリア面白へ喰べひ
から持てうしやアがれ ト彌次郎。眞黒に成てりさむ。されど合手はけつ サア持てきたか
らくらへく 彌次 イヤ馬の糞の先にかけ 旅人 さらひと云とが有物か是非喰せにやアね
ト三人掛て彌次郎を手込に 北八 イヤ最う御免なせへ。たべたも同前で御坐りやす 三
ぬ ずる北八おかしく中へ這入

人ハ、アかんにしてやろふ(ト行過る彌次郎迎も叶はぬと)此内桐の木。中柴を打過山中に至る。爰は麻の網袋早繩など、商賣ふならバ北八

御佛の燈ひと見へて寶藏寺。南無阿彌袋はよ、の名物

斯て藤川に至る。棒鼻の茶屋。軒毎に生肴をつるし大平皿鉢見世先に並べ立て旅人の足をと、ひ彌次郎兵衛

湯で蛸のむらさきいろは軒毎に。ぶらりと下る藤川の宿

夫より此宿を打過。出はなれのあやしげなる茶見世に休みて北八何だか業てきに虫が。か

ぶる。婆アさん素湯は有めへが婆はハア素湯は御ざらぬ。水をしんせませうか北八エ、藥

を香ののだは。コリヤたまらなく成た。特に雪隠は何所にある彌次何所にとつて。そんなに

お家を見廻しても。雪隠か壘の上に有物が裏へいかつし北八ヒヤアつきあたりに見へる

はく表へ出。雪隠へ行。しばらく用達て出てあたりを見れば此裏に物置を住居とせ

様子。北八れいのほるじやれ北八モシ御無心から。水を一ツト手を洗ふ内娘は北八にて。どつと此内へ遣入笑掛

コウ姉さんお目へ何を笑ひるさるそして一人爰に居なさるのか無用心なトあたりを見

○北八
腰間之
紫龍可
想像

なし北八腰を掛へ、おみのわりい何を笑ひなさるコレサ何を笑ふのだよウト娘の

て引張にさす振切もせず。やつぱり笑てゐる。北八おいつは有難。ワアイくあの人

もうしめたものだと。ぐつと引寄る。いつの間にやら子供が見附トワアイくあ

氣違と色事をせる。ヤアハ、ト大盛を上げて笑ひ駈出す北八びつくりしてにげ娘エ、此

男め。はなさんく北八是は情けないトむりよ引放さんとするコリヤ我徒は若い女

子をどらへて何せるのじや北八イヤ何にもしませぬ親父せんものが。何條女一人おる内

父遣入うつせた。コリヤ承知ならんわい北八ナニサ今用達にいつて。ツイ水を貰た斗親

父インニヤあれは氣違で御坐る。こなさん氣の違つたものをとらぬて。あぐさみ掛さつせ

へたに違ひはあらまい北八ナアニとんだとと親父インニヤ。すまんく氣違とあさどつ

て。ひゆつとあなさんが。やりからかゝるたよ違やしよまい兎角云つせるな此分ではすまん

ぞくトあめさちらかし大さわざをやらかす。此内彌次郎表の茶見世に待りたりしが。

ておかしさこらえられずしかしも彌次御免なせへ。わつちやアこの男の連の者だがいさ

る聞やした。こいつめもめのように見ぬても。有やうはちつと氣がふれてゐやす。了簡し

てくんなせへ。エ、此野郎め能世話をやかせる。アノ顔はよアレ見なせへさよろく

する顔が証據。娘子は女丈まだしも。イヤモ此氣違にはあまりはてやす親父イヤ〜そら
ではわらまい。ナニわの人が氣違な者か 彌次 ハテサあの顔付を見なせへ。アリヤ〜あ
の通りだ 北八 何だをれを氣違へだ。コリヤ面白い。ハ、ア降は〜。アレ〜。花のふぶき
が散やたらり。うんきんたらり。かんきんちり。ちりかゝるよふで。おいとしゆてねられ
ぬトト、ヤアそこ居は女房共か。イヤ好女房じやに〜。コリヤのはひほ、ひ。さん
なわろかいあるヤンヤア 彌次 アレ御ろうじろ。あの通り其くせあの面で色氣違さ。夫だから
女と見るとびろ〜して。ほん又恥を云はにヤア理が聞へませぬが。こいつめは。わしが
弟でイヤモこんな因果なまたア御坐りやせん 親父 ハアこゑさんか。そう云はせるとわし
もかなしひ。見さつせる通りたんだ一人の娘が此病でわしは。おつきな苦患で御坐る 彌次
さつしてをり升。エ、此馬鹿野郎め。何をげら〜笑のだ。時に親父さん。おやかましう御
座りやした 親父 マツ茶でも呑で御座らつせ、彌次 最うめへりやせう。サア氣違めうせお
れト彌次郎がちやらくらにやう〜と納まり。彌次郎
北八を連れてこゝをのがれ出掛け。果は大笑ひと成て
言釋たる娘はほんの氣違ひに。こちや間違ひとなりし目違ひ

斯打興じて。こゝを立出行道すがら 彌次 コウ北八手めへもどんだ者だ。氣の違た娘をどら
めへで。どうしやうと。思て業さらしる男だ 北八 へ、面目次第もねへ。しかしわつち迄を
氣違ひと彌次さんありやアお前へ一生の出来だぜ 彌次 酒でも買ひやれ時に夫又附て咄
が有る丁度手めへのような氣問ぐれ者が。氣違ひの女をとらへて。じやらつと掛ると其女
の親父が見附て腹を立。ヤイ此野郎めは人の内へとはり。あしに牛込やアがつて。娘をち
よろまかそうとか。ソリヤア赤坂へイだはへト云ト。手めへもまけぬ氣よ成。イヤうぬ何
だ口ばしを。どんがらかして四谷鷲のようだと。茶かすと先の親父がヲ、おれが四ッ谷鷲
なりやア。うぬは八幡様の鳩だと云ふコリヤおかし此北八がなせ八幡様の鳩だと。云と
親父がハテ貴様は氣違の豆を喰ふと。したじやアねへかと。ハ、〜 北八 何だ市谷の地
口をおそれる。ハ、〜 打笑ひツ、行程に小豆坂を過。岡の江。遊泉寺を打越て大平川に
至る
岸に生入芹の青々に小鴨まで。水にひたれる大平の川
夫より大平村を過行程よ。岡崎の驛に至る。此の東海に名だゝる。一勝地にて殊に賑はし。

両側の茶屋いづれも奇麗に見へたり。茶屋お休みさりまアし。お飯をあげりまアし。よい諸
 白もお坐りまアす。お這入なさりまアし。彌次ナント腹が少し御坐つたじやアねへか
 北八 いかさま此でお小休とやらかそふ(トある茶屋へ) 這入内の女(トある茶屋へ) ようお出なさりました。彌次姉さん
 お飯にしよう何ぞ味へ物はあしかの茶や女、ハイよい鮎の香がお升。北八 ナニ鮎の生酢だ。茶
 屋女 ナホ、く(ト笑ひながら頼て鮎の煮びた) 彌次 ドレ、く。まいつは味へ。そしてどう
 てきに白い飯だ。北八 エ、外聞のわるいことを云アレ女が笑て行ア。あいつめは顔ぢうが。
 黙だはへ。彌次 黙なら宜が。ほうべたが窪んで。踏返しの馬蹄石と云もんだハ、く(ト例
 る口だらくしやれくゑると。此内奥坐敷は近在の客三人斗。此宿に居續けし歸り掛と
 見へ合方の女郎。此所迄送り來りしと見へて。別れの酒盛大さわきにて此宿の小浮節うと
 ふ聲にぎやか) 唄。菊又問せ垣結こめられて。今忍ぶに忍ばれず。チツテレトツテレ(ト大
 ぎをやる故北八彌次郎奥の方を) コレ、く。太兵酒盃のどう爲のじや。太兵 イヤ仁兵の側に
 覗き見れば一人の客の聲として) 太 あらためていよしやれ。仁 ヲト、く、く。此様に請ては
 あらアす。仁兵 ドレおらひらそふ。太 あらためていよしやれ。仁 ヲト、く、く。此様に請ては
 兎角のあらまい。ツレそふかい。太 ヲツト請た。ひゆつと。やりからかいて。是から門もつこ
 ふへ。もどろうまいか。但しハ榎屋か丁子屋へいこふまいか。女郎いくの。なんじやいし。アノ

太兵さんはナア。酔なるとナア。あの様など云てじやがナア。外へやり升をハナア。あら
 まいわいなア。太 イヤ、く、かゝるおりから橋屋で。手形請取たしる物が有から。いかざなら
 まい。女郎 ヲウそうかいし。仁 そうともく(チツテレ) かねて手管とわまや知ながらだま
 れて喉室の梅ハ、く、く(ト此内輕尻の馬二三疋をつ立來り。此茶屋) 旦那方を向ひに
 参りました。三人 御太義、くお名残を惜が。是でわかれざならまい。女郎 ひさしかぶりて。是
 から又鳴海の小鶴さんじやをませんかい。太 仁ハ、く、く。サアいかうまいか。茶や女御
 機嫌よふ(トそれ、く、に挨拶する。内三人の客は各々輕尻馬に打乗。暇乞して乗出す。女郎
 の輕尻馬で歸るもを) 送出て様、く、のじやれもわれ共略す。彌次郎北八はじ此のていを見て女郎買
 かしひと打笑ながら) 三味線の駒に打乗歸るなり。岡崎女郎衆買よ來れば
 斯て二人も此所を立出宿外れの松葉川と打越矢矧の橋に至る
 欄干は弓の如くに反橋や。是も矢矧の川に渡せば
 夫よりうたふ坂町尾崎の郷。今村の建場につく。茶やば、名物砂とう餅召なさりまアし
 お休みなさいまアし。く。北八 ヲイ此餅は幾ら宛だ。餅や 三文で御坐り升。北八 こいつは安い。